

様式1【公表】

「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」  
平成29年度事後評価資料（実施報告書）

整理番号	S 2 6 0 3		関連研究分野 (分科細目コード)	薬理系薬学 (7804)
補助事業名 (採択年度)	酸化ストレス仮説に基づく新規精神疾患創薬のための国際共同研究（平成26年度）			
代表研究機関名	国立大学法人大阪大学			
代表研究機関以外の協力機関	公益財団法人東京都医学総合研究所， 国立大学法人福井大学（H27.12.22追加）			
主担当研究者氏名	橋本 均			
補助金支出額	(平成26年度) 39,081,104円	(平成27年度) 40,201,528 円	(平成28年度) 41,240,000円	(合計) 120,522,632 円
(公募応募当初の「事業計画調書」に記載の) 若手研究者の 派遣計画	(平成26年度) 4 人	(平成27年度) 4 人 ( 4 人)	(平成28年度) 6 人 ( 4 人)	(合計) 6 人
若手研究者の 派遣実績	(平成26年度) 4 人	(平成27年度) 4 人 ( 4 人)	(平成28年度) 5 人 ( 4 人)	(合計) 5 人
(公募応募当初の「事業計画調書」に記載の)研究者 招へい計画	(平成26年度) 2 人	(平成27年度) 6 人 ( 1 人)	(平成28年度) 6 人 ( 5 人)	(合計) 8 人
研究者の 招へい実績	(平成26年度) 3 人	(平成27年度) 5 人 ( 0 人)	(平成28年度) 4 人 ( 4 人)	(合計) 8 人

(参考)

派遣期間が300日未満となり、最終的に若手派遣研究者派遣実績のカウントから除外された者（外数）	(平成26年度) 0 人	(平成27年度) 1 人 ( 0 人)	(平成28年度) 0 人 ( 0 人)	(合計) 1 人
---	-----------------	---------------------------	---------------------------	-------------

## 1. 派遣・招へいによる人的交流を通じて得られた成果の達成状況

### (1) 事業計画調書に記載した到達目標

(事業計画調書(3-(2))に記載した「研究課題を海外の研究グループと共同して行うことにより、国際研究ネットワークの強化・拡大に関して客観的な指標に基づく到達目標」)

本事業では、派遣・招へいの人的交流を通じた国際研究ネットワークの構築・強化を進め、①日本人研究者を責任著者とした国際共著論文・発表数の増加、②海外連携機関への日本人研究者の追加派遣や同機関での雇用、③派遣・招へい研究者の昇進、④新規研究費や国際共同研究グラントの獲得、の達成を到達目標とし、これらの多寡を評価の客観的指標とした。なお本事業では、国際的観点を持った若手研究者の育成を目標に、准教授を含む4名の長期派遣に加え、公募により選抜した若手研究者を最大2名追加で派遣することとした。これらを機に、⑤プログラム終了後も継続した国際連携を継続・発展させられるかどうか、ネットワーク強化の客観的指標になると考えた。

### (2) 上述の到達目標に対する達成状況の自己評価とその理由

#### 【自己評価】

- 期待を上回る成果を得た
- 十分に達成された
- おおむね達成された
- ある程度達成された
- ほとんど達成されなかった

#### 【理由】

- ① 事業の開始前(2012-3)と実施中(2015-6)とで、共著論文数・発表数は共に約1.5倍に増え、責任著者が日本人の論文は平均1.5件から5.0件に大きく増加した(資料4等)。
  - ② 初年度から派遣した4名で、規定通り各年2名以上の派遣を達成した。また潜在的派遣者として設定した最大数(2名)を広く公募し、選抜を通じ、新たな日本人研究者の追加派遣を実現した。事業の開始以降、連携研究者が計2名の日本人研究者を雇用した。
  - ③ 参画した日本人研究者20名のうち8名(40%)が昇進に類する地位を獲得した。また日本人の連携研究者1名が担当研究者の研究室の特任助教に就任した(資料1, 2)。
  - ④ 国際共同グラントは未獲得だが、日本医療研究開発機構等の大型研究費3件など計11件の研究費を新たに得た(継続は18件)。連携先でも関連テーマで新規の獲得があった。
  - ⑤ 派遣者1名(総派遣日数318日)について、事業終了後の連携先での継続的滞在が実現した。また派遣者を中心に開始した共同研究には、ワシントン大学など連携先以外も含まれた(7件)。なお継続中の共同研究は派遣者1名平均5.9件である(資料3)。
- 以上の成果は、本事業の推進により、事業主体が進める研究や日本人研究者の国際社会でのプレゼンスが着実に向上したこと、事業主体が進める研究が少なくとも本邦で高く評価されたことを示すもので、ネットワークの着実な構築・強化を意味すると考える。また②③⑤は、国内外でのネットワークの拡大と国際的な頭脳循環の促進を端的に示すものである。よって本事業では、連携機関との間の国際研究ネットワークの構築・強化に留まらず、国内外でのネットワーク拡大という想定を超える成果を得たと考える。

## 2. 国際共同研究課題の到達目標及びその達成状況

### (1) 事業計画調書に記載した国際共同研究課題の研究目的及び到達目標

(事業計画調書(3-(2))に記載した国際共同研究課題の研究目的及び到達目標(「研究の学術的背景」及び「当該研究領域における本研究課題の学術的な特色や独創的な点、及び事業期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか、到達目標とその検証方法」))

主担当研究者らは、PACAPシグナルを修飾する低分子化合物の同定や、精神疾患の分子病態解析のための次世代型解析系(疾患モデルの脳病変を、脳全細胞の3次元的イメージを用いて定量比較する全脳細胞定量評価系)の構築を世界に先駆けて達成している(共に申請当時未発表)。本事業主体の最終目標は、本事業で得られる知見を、これら最新の研究ツールを用いて統合的に検証し、アカデミア発の精神疾患創薬を実現することである。この最終目標の達成に向け、本事業では、海外派遣を通じた関連知見/技術の獲得、連携機関との長期的かつ世界水準の共同研究の締結、担当研究者らによる国内外での関連知見の集積と創薬基盤技術の開発を達成目標とする。すなわちこの3年間、海外の研究室とどれだけの数、担当研究者等を主導とした共同研究を締結・開始し、また国内での研究推進も含め、どの程度明確な成果を生み出せるか、がその評価の指標となる。

### (2) 上述の到達目標等に対する達成状況の自己評価とその理由

#### 【自己評価】

- 期待を上回る成果を得た
- 十分に達成された
- おおむね達成された
- ある程度達成された
- ほとんど達成されなかった

#### 【理由】

- ① 本事業を機に開始した国際共同研究は、派遣者を中心とする34件と担当研究者が主導した8件を併せ計42件であった(月平均1.4)。また現在継続中の課題は派遣者1名あたり約6件である(前頁に記載)。この結果は、この3年間の事業で(国際共同研究に限っても)毎月2件弱の共同研究が開始されると共に、半年に1件程度の頻度でその内容が評価されたことを意味する。これらの数は到達目標として十分な数といえる。
- ② また本事業の明確な成果としては、まず上述の次世代型解析系の成果を脳神経系分野の超一流紙に公表できたことが評価できる(Neuron誌, 論文112)。またNat Commun誌への複数報の公表(論文25, 27, 57)や、短期間での共著論文の公表(計9件)も併せて評価できるもと考える。これらの成果の多くは、事業の開始直後より始めた各連携機関との密な連携の上に達成されたものと考えられ、事実、事業開始前と比較して高インパクトな成果発信が達成されている。しかしその一方、低分子化合物のテーマでは有用な知見を得られなかった。よって総合的には、おおむね～十分に達成といえる。以上2点から、本事業は、研究成果という点で十分な達成がなされたといえる。

### 3. 今後の展望について

これまでの実施状況を踏まえて、事業実施期間終了後の展望について記入して下さい。

① 自己資金、若しくは他の競争的資金等による海外派遣・招へいの機会を含む若手研究者の研鑽・育成の事業の継続（又はその見込み）状況

本事業の申請当初、30代後半の研究者が取得可能な海外研修補助金は、ほとんど存在しなかった。現在は、科学研究費を利用して海外研修を行える制度、34歳以上が応募可能な国際共同研究加速基金、等が利用可能になっているが、本事業ではこれらの補助金のコンセプトを先駆けて実施したといえる。すなわち研究者が所属するグループが進める研究に立脚したプロジェクト型の戦略的海外派遣を通じ、自らの研究にある程度の実績と経験がある30代後半以上の研究者に対し、極めて啓発的・効果的な研究環境を提供する形の海外派遣である。上述のとおり、海外補助金の制度は、年齢層などの要件が細分化され、年々多様な補助金に応募できるようになっている。また、大学レベル、研究科レベルでも様々な補助金が充足されてきている。今後、これらの競争的資金を獲得することで、これまで以上に若手研究者の研鑽・育成が続けられることが期待される。

② 本事業の相手側を含む海外の研究機関との研究ネットワークの継続・拡大（又はその見込み・将来構想）状況（組織において本事業で支援した若手研究者に期待する役割も含めて）

本事業では、ある程度交流のある2研究室と連携の強化を進め、また全く交流のない2研究室との間に新たな連携を築き、かつそれを強化することもできた。今後、これらとの連携の継続に加え、同機関を介したネットワークの拡大が大きく見込まれる。本事業では5名の長期派遣、2名の短期派遣を実施した。また1-(2)-②③⑤に記載のように、現在、連携機関には派遣者1名を含む日本人研究者が複数所属し、また本邦の大学には連携機関出身の研究者が所属している。したがって、これら若手の日本人研究者が中心となることで、今後とも、外部競争的資金を活用した、連携機関とのネットワークの維持や、より若手の研究者の研鑽などが進むものと大きく期待できる。本事業で派遣した若手研究者には、今後も様々な活動に積極的に取り組むことで、ネットワークの継続や拡大、ならびに後進の育成に貢献してほしい。

③ 本事業で支援した若手研究者の研究人材としての将来性について

まず日本とは文化や習慣、暦も違う海外で、様々なプライベートの問題を適切に解決しつつも、日本の所属機関等の制度・規定に沿った形で、最後まで本事業を推進した若手研究者5名の胆力を評価したい。本事業期間の経験は、様々な困難を乗り越え、自らが中心となり研究を推進していく力を涵養する上で貴重なものになったと考える。

なお派遣者は、連携先の研究推進に大きく貢献するだけでなく、人的交流にも真摯に取り組み、高く評価されている（連携先の評価書2通を参照）。これらのマネージング的能力はネットワークの構築や拡大には必要不可欠であり、将来、国際的なアカデミアにおいて中心的に活躍する能力が、本事業によって大きく培われたものとする。

さらに、各々の派遣者は、本事業に真摯に取り組むだけでなく、本事業への参画を、貴重な自己研鑽の場ととらえている（自己評価書3通を参照）。今後とも、次の目標を明確に設定し、たゆまない努力を継続されるものと期待する。

資料1 実施体制

① 日本側研究グループ事業実施体制

フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名 (身分)	専門分野	備考
主担当研究者 ハシモト ヒトシ 橋本 均	大阪大学	薬学研究科	教授	分子精神薬理学	
担当研究者 ナカザワ タカノブ 中澤 敬信	大阪大学	薬学研究科	特任准教授	分子神経科学	現同学歯学研究科 准教授
カサイ アツシ 笠井 淳司	大阪大学	薬学研究科	助教	薬理学	
ハヤタ アツコ 早田 敦子	大阪大学	連合小児発達学研 究科	助教	生化学	
ナガヤス カズキ 永安 一樹	大阪大学	薬学研究科	特任助教	分子神経薬理 学	H27.3.31まで、現 京都大学薬学研究 科助教
マツダ トシオ 松田 敏夫	大阪大学	薬学研究科	教授	神経精神薬理 学	H26.3.31まで、現 同学名誉教授
オナカ ニュウスケ 尾中 勇祐	大阪大学	薬学研究科	特任助教	行動薬理学	H27.3.31まで、現 撰南大学薬学部特 任助教
タクマ カズヒロ 田熊 一徹	大阪大学	歯学研究科	教授	神経薬理学	
カタヤマ タイイチ 片山 泰一	大阪大学	連合小児発達学研 究科	教授	神経解剖学	
マツザキ シンスケ 松崎 伸介	大阪大学	連合小児発達学研 究科	准教授	神経解剖学	H27.3.31まで、現 和歌山医科大学准 教授
イトカワ マサナリ 糸川 昌成	東京都医学総合研 究所	精神行動医学研究 分野	参事研究 員	精神医学	現病院等連携研究 センター長(兼務)
アライ マコト 新井 誠	東京都医学総合研 究所	精神行動医学研究 分野	副参事研 究員	分子精神医学	
マツザキ ヒデオ 松崎 秀夫	福井大学	子どものこころの 発達研究センター	教授	分子精神医学	H27.12.22 追加
若手研究者 シンタニ ノリヒト 新谷 紀人	大阪大学	薬学研究科	准教授		
アゴウ ユキオ 吾郷 由希夫	大阪大学	薬学研究科	助教		
タカムラ ヒロノリ 高村 明孝	大阪大学	連合小児発達学研 究科	助教		
トリウミ カズヤ 鳥海 和也	東京都医学総合研 究所	精神行動医学研究 分野	固有研究 員		現同研究所同分野 主任研究員
イワタ ケイコ 岩田 圭子	福井大学	子どものこころの 発達研究センター	特任助教		公募で選出後、H27 年度に追加、現同 学同センター助教

カサハラ アツコ 笠原 敦子  計19名	大阪大学	薬学研究科	招へい研 究員	・パドヴァ大学客 員教授 公募で選出後、H26 年度に追加、 H27.12.22 まで若 手研究者、現金沢 大学がん進展制御 研究所特任助教
-------------------------------	------	-------	------------	---

② 相手側となる海外の研究グループ（海外の連携機関）

研究機関名	相手側研究者氏名 (招へいした研究者は※印を表 示)	職名 (身分)	備考	派遣した 若手研究者氏名
University of Padova (パドヴァ大)	※Luca Scorrano ※Elena Ziviani ※Maria Soriano	教授 助教 助教	主要連携研究者	新谷 紀人 岩田 圭子 笠原 敦子 (H27年 度中に派遣中止)
University of California, Los Angeles (UCLA)	※James A. Waschek	教授	主要連携研究者	吾郷 由希夫
University of Toronto (トロント大)	※Paul E. Fraser	教授	主要連携研究者	高村 明孝
University of Texas Southwestern Medical Center (UTSW)	※Genevieve Konopka ※Noriyoshi Usui (白井 紀好)	助教 博士研究員	主要連携研究者 現福井大学子ども のこころの発達研 究センター特任助 教	鳥海 和也
計 4 機関	※Stefano Berto	博士研究員		

## 資料2 双方向の人的交流にかかる資料

## (1) 若手研究者の選抜方針・基準、選抜方法の概要

1. H26年度に派遣開始の若手研究者4名について

本邦の4研究室（橋本研/阪大薬、松田研/阪大薬、片山研/阪大連合小児、糸川研/都医学研）の研究を、海外の4研究室（Scorrano研/イタリア・パドヴァ大、Waschek研/アメリカ・UCLA、Fraser研/カナダ・トロント大、Konopka研/アメリカ・UTSW）との国際共同研究として展開する目的で、各研究室で研究の中核を担う4名の常勤研究者（新谷、吾郷、高村、鳥海）をH26年度開始の派遣者として決定し、本事業への申請を行った。

2. H27年度以降に派遣開始の若手研究者（最大2名）について

本事業では、短期派遣者1名を含む5名の派遣に加え、「本事業計画の加速的推進と、本研究領域での頭脳循環の継続・加速を目的とし、若手派遣者①～④を派遣する研究室のいずれかに、最大で2名の追加派遣を行う」、という到達目標を設定した。

これを実現するため、公募による追加派遣者の募集、事業主体内での書類・面接審査を進めた。選抜の方針、基準、方法は以下のとおりだが、これらの一部は主担当研究者の研究室ホームページで現在も公開している（<http://molpharm.umin.jp/program.html>）。

[選抜方針]

- ・世界トップクラスの研究を進める海外の4研究室との共同研究を通じ、精神疾患の分子病態としての酸化ストレス仮説の提唱と、日本のアカデミア発の神経精神創薬の実現を目指した、国際研究ネットワークを構築する、という本事業の趣旨に強く賛同し、その推進に協力する者、かつ、日本の今後の神経精神創薬研究の推進に大きく貢献しうる者を、追加派遣者として最大2名募集することにした。
- ・また、この選抜で適任者が選抜されない場合、追加派遣者をゼロとすることも視野に入れて実施した。なお本事業は、H26年度開始の4名で各年度2名300日以上派遣が達成されるため、追加派遣者がゼロでも交付規定には抵触しない計画としている。
- ・また本選抜は、神経精神創薬領域での国内研究ネットワークの強化と国際的頭脳循環の必要性を、日本国内に波及させる狙いを併せ持つものとして実施した。選考基準も、担当研究者の研究室に所属する者を優遇するものにはなっていない。応募を広範囲に求めるため、公募情報は、関連学会を含め、若手研究者に広く周知することを努めた。
- ・広く、また隠れた才能を見出すべく、応募時に年齢制限は設けなかった。また、申請時に大阪大学に所属していない研究者でも応募ができることにした。さらに事業の趣旨に適合するものであれば研究テーマは限定しないことにした。ただし派遣先におけるテーマは、主担当研究者や連携研究者との協議を通じて調整・決定することにした。

[選抜基準]

- ・まず本事業の規定に従い、追加派遣者は、事業主体の一員として本事業の推進に貢献できる研究者（学生不可、学位取得見込み等は可）で、H27年9月～H29年3月の間、海外の4研究室のいずれかに300日以上滞在可能な者であることを前提にした。選抜に必要な情報は、申請書として応募者から提出させた。
- ・1次選抜（書面審査）では、提出された申請書をもとに次の点を評価した： 国内外での研究や成果還元活動、外部研究資金や特許出願の実績と、今後の研究の計画性、海外派遣先とのネットワーク強化、事業主体との連携に関する計画性

- ・なお派遣期間中、国内外の教育研究機関で常任職を継続できる者を優先することとし、学位取得見込の者も応募できるが、学位の有無や年齢も1次選抜の判断材料にした。
- ・2次選考（面接審査）では、応募者による研究概要の説明と質疑応答を通じ、次の点を評価した： これまでの研究における、独創性、計画力、課題決定力、対人関係力、勤勉さ、各国間の人的交流をコーディネートできる高いコミュニケーション能力と英語能力、海外派遣先での研究内容に関する柔軟性、神経精神疾患研究に関する経験
- ・なお本事業において追加派遣者は、先行の派遣者と協調して、構築された（構築されつつある）研究ネットワークを強化する役割を担う。そこで2次選考では、派遣先との研究ネットワーク強化に関する強い意思についても評価の一部に加えた。
- ・2次選考後には適宜、推薦者に問い合わせを行った。また、先行の派遣者の研究推進状況も考慮し、バランスのとれた追加派遣になるよう、派遣希望先も判断材料にした。

#### [選抜方法]

- ・書面審査（1次選抜）の後、選考委員会による面接審査（2次選抜）を行い、事業主体内合同会議および大学事務局が了承した者を追加派遣者として決定した。
- ・公募に関しては、日本薬学会第135年会などの関連学会、主担当研究者の研究室のホームページ（<http://molpharm.umin.jp/program.html>）を利用し、国内外に内容の周知を行った。ホームページには、H27年度の5～2月に派遣を開始すること、同じ研究室に2名派遣する可能性を含むこと等を記載した募集要項、よくあるご質問、海外派遣申請書、を掲載し、応募者が同ページから簡単にダウンロードができるようにした。募集期間はH27年3月5日（木）～8月30日（日）とし、3月初旬に情報の掲載を行った。
- ・なお応募者の殺到による選抜・派遣の遅延を避けるため、1次募集で充足された場合は以降の募集を行わないことにした。この情報は3月末日に同ホームページで周知した。
- ・選抜は、上記の選抜基準をもとに、主担当研究者の橋本を含む複数名で行った。なお、応募者がFraser研への海外派遣を希望した場合は、片山が選抜に加わること、Konopka研への海外派遣を希望した場合は（先行の派遣者がH27年3月からの派遣のため）派遣の可否を慎重に取り決めること、等を前提に選抜を進めた。

#### (2) 派遣及び招へいの支援体制の概要

（日本側からの派遣者及び連携機関からの招へい者に対して組織としてどのようなバックアップ体制をとったかについて記載してください。）

#### [派遣者への支援]

派遣者②③は本事業の申請以前から派遣先に渡航しており、以下の1～4の支援体制で何ら問題は生じていなかった。そこで他の派遣者に対しても、同様の支援を行うことにした。なお、本事業の採択や世界状況の変化などの問題点に基づき、1, 2, 4は改訂を加えた。

1. 二国間の移動、渡航先国内での住環境や生活環境、派遣者の生活保障においては、一定水準の支給額を確保した。なお本事業への採択にあたり、同補助金から拠出される派遣費は、日本学術振興会海外特別研究員の支給額を基準に設定し、支給した。
2. 各研究室の代表の担当研究者は、派遣者や連携研究者と共に、派遣者の支援体制の協議や、渡航情報の収集、情報開示に努めた。特に中東や欧州でテロ活動が頻発したH27年以降は、安全確保を万全にする旨について、事務局からの直接の注意喚起も行った。



3. また同代表の担当研究者は、外務省より開示される緊急安全性情報を適宜、派遣者に連絡し、国外退去などの状況においては迅速に対応するとの意識を喚起した。
4. 一方で派遣者は、数週間に一度、自らの状況を主担当研究者あるいは各代表の担当研究者に報告し、その所在を明確にすることにした。H27年度中、このシステムを改訂し、3か月毎に、自らの状況を主担当研究者（事務局）に直接報告することにした。
5. 追加派遣者⑤は、協力機関等での常勤としての所属がなかった。そこで派遣開始までに大阪大学大学院薬学研究科の招へい研究員として登録を行った。また派遣においては、主担当研究者が同派遣者のメンターとしての役割を担った。
6. 追加派遣者⑥は、代表機関・協力機関以外の研究機関に特任助教として所属していた。そこで同派遣者が所属する研究室の教授と協議し、同機関の長に対して、本事業に対する同機関の協力機関としての参画と、同特任助教・同教授の若手派遣研究者・担当研究者（メンター）としての参画を依頼し、これらをお認め頂いた。

5と6の対応で、代表機関の大阪大学と追加派遣者との連絡等を円滑に進めた。

#### [招へい者への支援]

橋本研、片山研、糸川研に招へいを行い、各招へいには派遣者が同行した。それが不可能な場合は関連する担当研究者が対応した。事業主体としては以下の支援方針をとった。

1. 二国間の移動、日本国内での生活においては、大阪大や都医学研の旅費規程に従い、一定額を支給した。
2. 招へい時には、推進中の国際共同研究の進捗状況や今後の方針を十分に議論できる時間を確保した。また招へい先研究室の理解と同研究室構成員のグローバルな研究マインドの向上をねらい、同構成員（大学院生等を含む）と様々な議論ができる機会を設けた。
3. さらに事業主体の国内外でのプレゼンス向上を目的に、可能な範囲で、招へい者が進める研究を日本国内で紹介できる機会を確保した（例：薬学ミトコンドリアセミナー等）。
4. また、より効果的なアウトリーチを目的に、学会等で派遣者や担当研究者との共同セッション（頭脳循環セッション）を設けた。本セッションでは本事業の周知も行った。
5. なお同セッションへは、その活性化を目的とし、自己資金の投入も含め、関連領域の著名研究者に参画を依頼した（例：モナシュ大からの招へい、ケルン大研究者への依頼等）。
6. 各イベントは主担当研究者のホームページへのポスター掲載等を通じ広く周知した。
7. また国際研究ネットワークにおける日本人研究者の頭脳循環の加速、国内研究ネットワークにおける事業主体のプレゼンス向上をねらい、本事業に差し支えがない範囲で、招へい者と事業主体以外の国内研究者との交流がとれる機会も確保した。

（3）若手研究者の海外派遣計画及び研究者の招へい計画の見直し（増減）状況とその理由

#### [派遣計画]

当初の予定どおり、H26年度に派遣を開始した4名について、各年度2名以上、300日以上の派遣を達成した（H26-3名、H27-4名、H28-3名、平均総日数609日）。

一方、最大2名として公募した追加派遣者に関しては、H27年5月に最大数の2名が選抜できた。そこで追加の派遣者2名を加えた計6名の派遣予定とした。派遣者⑥は予定通り派遣された（H28、318日）。しかし派遣者⑤は、派遣の開始後に他機関への就職が決定し

たため同年度中に派遣を中止し、最終的な派遣人数は計5名となった。派遣者⑤を派遣していたパドヴァ大学（連携機関）には派遣者①がH26年度から派遣されていた。そこで派遣者⑤が進めた「神経機能制御におけるミトコンドリア動態の役割解明に関する研究」等を主要連携研究者の主導で進め、派遣者①がこれに携わることで、当初計画に支障なく事業を進めることができた。派遣者⑤は研究支援補助者として計178日間の派遣を行った。なお、これらに関する協力機関、担当研究者の追加、派遣者⑥の所属と派遣開始時期の変更、派遣者⑤の派遣中止、についてはH27年12月22日付けで変更申請が承認されている。[招へい計画]

当初の予定どおり、8名（各年平均4名）の招へいを達成した。ただし、事業の推進状況や相手先機関の公務の都合を踏まえ、招へいする年度や回数は若干変更して実施した。

#### （4）若手研究者が果たした役割にかかる成果の概要

##### ① 派遣された若手研究者の成果

（資料4に記載するような研究成果の発信状況等だけではなく、国際共同研究における役割を含め、将来的に当該研究領域において中核的な役割を担う活躍が見込まれるか等の観点も含めて記載してください。）

##### [発表等の成果の発信状況]

本事業期間中に公表した論文111件（印刷中を含む）について、派遣した若手研究者が著者になっているものは計57件で、そのうち計26件では筆頭著者相当の貢献をしている。事業主体の構成メンバーが19名であることを踏まえると、メンバーの26%に相当する派遣者が、本事業の51%の業績に貢献すると共に、23%の業績では筆頭著者相当の貢献をしたといえる。これらの値は、日本滞在中と大きく変わるものではないが、海外派遣の環境下で、このようにコンスタントな発信・貢献を続けられたことは、高く評価できる。

##### [国際ネットワーク上での役割]

本事業では、研究室単位である程度交流のある2研究室、全く交流のなかった2研究室との連携を進めた。現在これら4研究室全てとの間で、派遣者が主要な役割を担った国際共同研究が計29件推進中である。したがってこれらの成果公表には、5名の派遣者は今も欠かせない存在になっている。また特に後者の2研究室に関しては、派遣先や研究テーマの選定、さらには本事業に参画する連携研究者の選出（それぞれ主要連携研究者以外に2名の連携研究者が参画）などについても、各派遣者は能動的かつ中心的な貢献をし、この3年で見事に新規のネットワークを構築した。今後、このネットワークを維持し、かつ拡大していくうえで、当該派遣者は必要不可欠である。

##### [共同研究を通じた研究能力、マネジメント能力の向上]

海外の研究室で、派遣者は実験系も含め一から全てを立ち上げて本事業の研究を進めた。また日本に滞在していた際と同様に、積極的な学会参加、学会発表を行い、学術論文としてのとりまとめも着実に進めた。自らのデータやプランを核とし、海外の連携研究者と日本の担当研究者とを引き合わせ、当初の計画に加えて新たな共同研究も複数開始した。シンポジウム等での頭脳循環セッションが派遣者を中心に企画・実施されてきたことも併せ、本事業を通じて、派遣者の研究能力やマネジメント能力は大幅に向上し、国際共同研究ネットワークの核となる力が極めて効果的に養成されたものとする。

[研究者としてのキャリアアップ等]

本事業期間中、派遣者5名のうち、2名(40%)が昇進し、2名(40%)が学会賞を2件ずつ受賞した。昇進は同じ研究機関内、学会賞もこれら学会での実績が評価されたことによる受賞であるが、本事業でも確認できたように、様々な事柄に対する日頃の着実な取り組みがこのように評価されたものと理解している。なお派遣を中止した1名についても、昇進に伴う中止であった。他の派遣者も含め、自身のプロモーションに関する活動などを研究活動と併行して適切に実施しており、高く評価できる。

[当該研究領域において中核的な役割を担う活躍が見込まれるか]

本事業では、分子一分子、基礎一臨床の多様な枠組みの中で神経精神疾患の創薬研究への貢献を目指すものとして実施してきた。各派遣者はそれぞれの分野で着実な成果を得ているものの、神経精神創薬の分野で中心的役割を担うためには、今後とも継続的な研鑽が必須と考える。しかし、各派遣者が本事業で挙げた数々の成果を踏まえ、そのように活躍する人材となる将来は遠くないと考える。今後の成長に大きく期待をしている。

## ② 派遣・招へいした機関・組織の成果

(機関等として組織的に若手研究者や招へい研究者を支援する枠組みが構築されたか、機関等の研究者の評価において、海外での研究実績を重視するシステムが構築されたか、また本事業による派遣・招へいが今後も維持・継続されるか等の観点も含めて記載してください。)

[機関等として組織的に若手研究者や招へい研究者を支援する枠組み]

近年大阪大学では、大阪大学未来基金グローバル化推進事業の一環として、学生あるいは職員を対象にした海外研修プログラムが設置された。また海外からの招へいについても同様のプログラムが設置された。さらに同学薬学研究科でも、製薬企業や財団等と連携し、学生や大学院生を対象にした海外派遣制度、海外の常勤職員や大学院生を一定期間受け入れる制度等が充実しつつある。なお、本事業の派遣者1名は、本事業の開始まで、同研究科の卒業生団体(薬友会)から支援を受けていた(グローバル部門賞の受賞)。

[研究者の評価で、海外での研究実績を重視するシステム]

大阪大学では、海外での研究実績の獲得を支援するシステムについて、大幅な拡充が進みつつある。また実績の評価についても、これらの支援の有無にかかわらず、FD(ファカルティ・ディベロップメント)等として、海外研究室の紹介や自身の研究を広く周知する場が設けられており、本事業の派遣者も実際に発表を行っている(自己評価書2を参照)。実績評価に関しては今後も一層重視されていくものと考えられる。

[本事業による派遣・招へいが今後も維持・継続されるか]

本事業で行った派遣・招へいの明確な波及効果として、1)福井大学の派遣者1名が、大阪大学と複数の共同研究を進めるパドヴァ大学にvisiting professorとして継続滞在することが決定したこと、2)都医学研と複数の共同研究を進めるUTSWの連携研究者1名が、H29年4月に福井大学の特任助教に就任したこと、が挙げられる。したがって、本事業で派遣した5名の若手研究者や福井大学の特任助教1名等が、今後の継続的な人財交流に貢献する可能性は十分にある。なお現時点ではまだ採択の結果を得ていないが、各連携機関からの招へいや同機関への派遣については、競争的資金に複数件の申請を行っている。

(5) 若手研究者の派遣実績の詳細【氏名のみ非公表】 ※派遣者毎に作成すること。

派遣者①： 准教授

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)  
 ミトコンドリアの動態研究で世界をリードする若手の主要連携研究者/招へい者①の研究室で、大阪大学で同定した新規のミトコンドリア動態制御因子 (MiFI) の機能解析を進め、日本人研究者を責任著者とした共著論文の発表を目指す。神経機能制御の分子機序研究など他の共同研究にも参画する。また本邦の神経精神創薬研究の活性化をねらい、招へい者①④⑤の本邦での講演開催等に尽力する。追加派遣者と事業主体との連携や、日本人研究者の派遣・訪問等にも携わる。ネットワークの構築と強化の両方に携わる。  
 (具体的な成果)  
 ミトコンドリア内膜制御の新たな分子機序、同プロセスへの MiFI の関与、MiFI と酸化ストレスの連関を見出し、FASEB 会議、日本神経精神薬理学会、Ebec2016 等で発表した。また MiFI 研究の一部を公表するほか (論文 28, 34)、内膜制御に関する成果を国際共著論文として公表した (論文 56)。MiFI に関する他の成果 2 件の投稿も行った。人的交流では計 5 回の招へいに同行し様々な調整を行った。特に、計 3 件の共同シンポジウム等をオーガナイズし、招へい者の計 11 回の講演で、事業主体のプレゼンス向上に大きく貢献した。またイタリアへの担当研究者 4 名、追加派遣者 2 名の受け入れを補助するほか、派遣が中止となった派遣者⑥の成果を引継いだ。これらの活動により、パドヴァ大とのネットワーク構築が無事に達成された。また DTI retreat への参加、Innsbruck 医科大学の訪問や、派遣者⑥と実施したパドヴァ大への新規解析系の導入を通じ、新たな共同研究にも着手した。合同会議で司会を努めるなど、事業全体への貢献もあった。これらの活動は招へい者①からも高く評価されている (連携研究者の評価書を参照)。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
イタリア・UNIPD(パドヴァ大学)・生化学部門・Scorrano 教授	166 日	273 日	147 日	586 日
イタリア・DTI retreat・Scorrano 教授	3 日			3 日
アメリカ・FASEB 会議・Scorrano 教授		8 日		8 日
オーストリア・Innsbruck 医学大学・薬理学部門・Scorrano 教授		2 日		2 日
韓国・第 46 回日本神経精神薬理学会年会 ・Scorrano 教授			2 日	2 日
イタリア・European Bioenergetic Conference(Ebec)2016・Scorrano 教授			3 日	3 日

派遣者②： 助教

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)  
 神経ペプチド PACAP の研究を進める主要連携研究者/招へい者②の研究室で、以前から共同で進めてきた 3 型受容体 VIPR2 に関する研究を継続し、短期派遣者との共同作業や再渡航、新規改変マウスの作製などを通じ、PACAP シグナルの包括的機能解明と、複数の共著論文発表を目指す。また短期派遣者・主担当研究者の派遣・訪問に携わる他、主担当者と招へい者②の新たな共同研究の締結など、ネットワーク強化に尽力する。

(具体的な成果)

VIPR2 とシナプス機能や恐怖記憶との関連を見出し、Neuroscience Meeting 2014 等で発表するほか、PACAP 国際会議等のシンポジスト・オーガナイザーを努めるなど成果の発信を精力的に行った。また成果の多くを学術誌に公表した(論文 33, 62, 65, 97)。これらは、学会賞の受賞 2 件(GPCR 研究会 第 1 回松尾研究奨励賞, JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016) や、製薬企業との新規共同研究として評価された。また短期派遣者との共同作業や自身の再渡航、主担当研究者を含む複数回の会合を通じ、VIPR2 や PACAP の新たな改変マウスの作製を達成するほか、本事業の目的達成(論文 112)にも貢献した。なお H27 年度には、派遣者②の研究室の担当研究者が事業主体から外れたが、研究科レベルで様々な補てんがなされ、結果として国際連携の強化が加速された。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
アメリカ合衆国・UCLA・精神医学/生物行動科学部門・Waschek 教授	167 日	92 日	69 日	328 日
アメリカ合衆国・Neuroscience Meeting 2014・Waschek 教授	4 日			4 日

派遣者③： 助教

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)  
 神経変性疾患の分野で著名な主要連携研究者/招へい者⑧の研究室で、以前から共同で進めてきた種々のアルツハイマー病関連因子の研究を継続する。特に SUMO 化による神経機能調節の研究を進めるほか、SUMO 化とミトコンドリア動態制御の関連、ミトコンドリア - 小胞体の相互作用に関する研究を行う。また事業の終了も、研究を日本とカナダで並行して進められるよう、技術交流等の調整も行う。ネットワーク強化に注力する。

(具体的な成果)

培養神経細胞や実験動物での検証と、死後脳を用いた研究とを併せて実施することで、神経変性疾患発症における SUMO 化の役割に関する様々な知見を獲得し、これらの成果を論文 1 報として投稿した。また SUMO 化に関する他の成果や、ミトコンドリア制御に関する研究については別途、論文を投稿準備中である。また成果の一部は、Neuroscience Meeting 2015 等の学会でも発表した。人的交流では、カナダへの担当研究者 2 名の訪問に際して種々の調整をするほか、招へい者⑧の招へいに同行して担当研究者らとの議論を深めた。また、これら日本とカナダとの研究ネットワークの強化に加え、得られた知見をさらに高い階層で追及すべく、コロンビア大学との共同研究を開始した。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	

カナダ・トロント大・神経変性疾患研究所 ・Fraser 教授	159 日	292 日	297 日	748 日
アメリカ合衆国・Neuroscience Meeting 2015・Fraser 教授		6 日		6 日

派遣者④： 固有研究員

<p>(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)</p> <p>H27 年 3 月から派遣を開始する。ヒト固有の高次認知機能に関する研究を進める若手の主要連携研究者/招へい者③の研究室で、同研究室が保有する改変マウスの表現型解析を行う。それと同時に、招へい者③が得意とするインフォマティクスの手法を学び、本邦への導入を目指す。また招へい者③⑥⑦の招へいに同行するほか、本邦での講演開催等に尽力する。追加派遣者と事業主体との連携や、日本人研究者の派遣・訪問等にも携わる。長期的に国際共同研究が続けられるような、研究ネットワークの構築を進める。</p> <p>(具体的な成果)</p> <p>マウスの行動評価系を UTSW で立ち上げ、複数の改変マウスの認知機能評価を達成した。またヒト死後脳を用いたインフォマティクスの解析系を立ち上げ、UTSW が主導する計 6 件の共同研究に参画した。同研究や、関連の成果は WFSBP (World Congress of Biological Psychiatry) や Neuroscience meeting 2015, 2016 等で発表し、学術論文として公表した(論文 49, 72 等)。これらの活動は WFSBP や日本神経精神薬理学会の学会賞として評価された。招へいでは講演等を 7 件調整した。また、アメリカへの担当研究者 2 名の訪問等での議論を通じ、都医学研が主導する共同研究 2 件の開始にも貢献した。都医学研やアメリカでの合同会議の調整も行い、UTSW と都医学研との間での新たなネットワーク構築を達成した。これらの活動が認められ、帰国後には主任研究員に昇進した。これらの活動は招へい者③からも高く評価されている(連携研究者の評価書を参照)。</p>				
派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
アメリカ合衆国・UTSW・神経化学部門・Konopka 助教	31 日	346 日	352 日	729 日
ギリシャ・WFSBP・Konopka 助教		6 日		6 日
アメリカ合衆国・Neuroscience Meeting 2015・Konopka 助教		5 日		5 日
アメリカ合衆国・Neuroscience Meeting 2016・Konopka 助教			6 日	6 日

派遣者⑥： 助教

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)  
 日本人の研究者が、海外の超一流の若手研究者と密な関係を築くためには、派遣された派遣者の不断の努力が必要なほか、同派遣者が築いた成果と信頼を、多くの優秀な日本人研究者が引き継いでいくことが必須である。追加派遣者⑤⑥はその役割を担う。派遣者⑥は H28 年 5 月から派遣した。独自の研究テーマを進めると共に、招へい者①④⑥や派遣者①と密接に連携することで、日本とイタリアとのネットワーク強化に注力する。  
 (具体的な成果)  
 派遣に先立ち助教に昇進した。自らのテーマとして「ミトコンドリア動態制御の神経発達における役割」に関する研究を進めて多くの知見を得るほか、連携機関内での様々な *in vivo* 機能解析系の立ち上げを通じ、計 4 件の国際共同研究の開始に貢献した。また研究成果を Neuroscience Meeting 2016 等で発表する他、Tri-Retreat や Joined symposium on mitochondrial function of the Universities of Padua and of Innsbruck への参加を通じ、新たな共同研究の芽を探索した。H28 年 8 月にはイタリア・パドヴァ市で、招へい者①と共に日伊国交 150 周年事業を実施し、日本とイタリアの連携強化と、本事業主体のイタリアでのアウトリーチに貢献した。なお事業の終了と併せ、別途、新たな海外派遣助成金を取得した。本事業終了後もパドヴァ大学で研究を続けており、この事実により、パドヴァ大とのネットワークが強化され、かつ継続的なものとなった。これらの活動は招へい者①からも高く評価されている(連携研究者の評価書を参照)。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
イタリア・UNIPD(パドヴァ大学)・生化学部門・Scorrano 教授	0 日	0 日	306 日	306 日
イタリア・Joint Telethon Intramural Scientific Retreat (Tri-Retreat)・Scorrano 教授			3 日	3 日
アメリカ合衆国・Neuroscience Meeting 2016・Scorrano 教授			7 日	7 日
オーストリア・Joined symposium on mitochondrial function of the Universities of Padua and of Innsbruck・Scorrano 教授			2 日	2 日

【参考】派遣期間が 300 日未満となり、最終的に若手派遣研究者派遣実績のカウントから除外された者

派遣者③： 招へい研究員(ポスドク)

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

日本人の研究者が、海外の超一流の若手研究者と密な関係を築くためには、派遣された派遣者の不断の努力が必要なほか、同派遣者が築いた成果と信頼を、多くの優秀な日本人研究者が引き継いでいくことが必須である。追加派遣者⑤⑥はその役割を担う。派遣者⑤は H27 年 6 月から派遣した。独自の研究テーマを進めると共に、招へい者①④⑥や派遣者①と密接に連携することで、日本とイタリアとのネットワーク強化に注力する。

(具体的な成果)

ジュネーブ大学からミトコンドリア融合因子のジーントラップ ES 細胞を入手し、自らのテーマである「統合失調症脆弱性因子 calcineurin の作用機構の解明(研究1)」のほか、招へい者①の助言に基づく「神経機能制御におけるミトコンドリア動態の役割解明に関する研究(研究2)」を進めた。H27年6月1日～12月21日の間で、以下に記載した129日を含む計178日間派遣された。なお派遣開始後にテニユアトラック助教としての着任(H28年1月15日)が決まったため、資料2-(3)に記載したような対応が行われた。研究2に関しては派遣者⑤の派遣中止後も、派遣者①や⑥によって展開された。これらの活動は招へい者①からも高く評価されている(連携研究者の評価書を参照)。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
イタリア・UNIPD(パドヴァ大学)・生化学部門・Scorrano 教授	0 日	127 日	0 日	127 日
スイス・ジュネーブ大学・Scorrano 教授		2 日		2 日

(6) 研究者の受入実績の詳細【氏名のみ非公表】 ※招へい者毎に作成すること。

招へい者①：教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

42 歳の若さでミトコンドリア動態研究を世界的に牽引する若手の主要研究者/招へい者①は、派遣者①⑤⑥の派遣や招へい者④⑤の招へいに関し、研究指導やメンターとしての責務を負う。また日本の大学とパドヴァ大学との国際連携についての議論を行う他、本邦での複数回の講演を通じて、神経精神創薬領域でのミトコンドリア動態研究の重要性の提案および日本側研究チームのプレゼンス向上にご協力頂く。

(具体的な成果)

派遣者①⑥(および派遣を中止した派遣者⑤)を受け入れ、研究の指導や支援を行った。また共同研究の成果として、派遣者①や招へい者④と共著論文1報を発表した(論文56)。招へい時(計2回)には、日本薬学会年会シンポジウム「ミトコンドリアの品質管理・障害研究の最前線」や日本分子生物学会年会シンポジウム「多才なミトコンドリアを支える分子基盤」を含め、国内で計4件の講演を行い、神経精神創薬領域でのミトコンドリア動態研究の重要性を同領域の研究者に発信した。また招へい者④⑤も関わる複数の共同研究の実施状況や研究の方向性、事業終了後の共同研究の継続に関する議論を行った。一方で担当研究者のイタリア訪問時(計3回)には、派遣者①⑥と共に研究の方向性や



派遣者⑥の派遣延長に関する議論を行うほか、日伊国交 150 周年事業を含む 2 回の VIMM seminar を企画・開催し、その座長を務めた。これらを通じ、ミトコンドリアの研究領域で事業主体の国内外における研究ネットワークの拡大・確立に大きく貢献した。なお派遣者⑥の滞在延長が決定したこともあり、現在も、派遣者⑥の指導を行うと共に、派遣者①⑥と関連した複数の共同研究に参画している。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者（機関名）	受入期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
パドヴァ大、生化学部門、イタリア、橋本均（大阪大学）	4 日	0 日	5 日	9 日

招へい者②：教授（非若手）

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）  
 PACAP 研究で主担当研究者と交流のある主要研究者/招へい者②は、派遣者②等の研究指導の責務を負う。また招へい時や PACAP 国際学会では、主担当研究者と共に PACAP 研究の重要性について広く発信を行う。さらに主担当研究者が構築した全脳細胞定量評価系を用いた新規研究への参画を含め、複数の関連した共同研究に参画する。

（具体的な成果）  
 派遣者②ならびに短期派遣者 1 名を受け入れ、研究指導等を行った。また派遣者②と共に国際共著論文 4 報を公表した（論文 33, 62, 65, 97）。初年度の招へいでは、キックオフセミナー（都医学研）を含めた計 3 回の講演を行うほか、主担当研究者が主導で進める複数の研究に共同研究として参画することを決定し、その一部の成果として、事業主体が第一目標として設定していた全脳細胞定量評価系の成果発表に貢献した（論文 111, 主要論文 1）。また PACAP 国際会議（トルコ）では、主担当研究者や派遣者②と共に 2 件のセッションをオーガナイズし、本研究領域における事業主体のプレゼンス向上に大きく貢献した。なお最終年度には派遣者③の再渡航と主担当研究者の訪問を通じ、得られた成果の発表方法と、新たな共同研究の開始について議論を行った。現在も派遣者②や主担当研究者等と継続した共同研究を進めている。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者（機関名）	受入期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
UCLA、精神医学/生物行動科学部門、アメリカ合衆国、橋本均（大阪大学）	7 日	0 日	0 日	7 日

招へい者③：助教

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）  
 遺伝学とバイオインフォマティクスを専門とする主要研究者/招へい者③は、派遣者④の研究指導や、招へい者⑥⑦との共同研究を調整する。特に都医学研と連携し、精神疾患の認知機能障害に関する、分子病態の解明研究に参画する。来日時には研究内容の紹介を行う他、都医学研へのバイオインフォマティクス技術の導入に関しての議論も行う。

（具体的な成果）  
 派遣者④の研究指導を行い、派遣者④、招へい者⑦との研究成果を 2 件投稿した。また他の共同研究の成果についても投稿の準備を進めている。H27 年の 9 月の来日では、日

本神経精神薬理学会のシンポジウムを含む計3回の講演を行い、トランスクリプトーム解析に関する最新の成果を国内の研究者に発信した。また本事業の実施状況や今後の方針等について担当研究者2名等と詳細な協議を行う他、都医学研が保有する膨大な臨床データの解析に必要な設備等に関する助言を行った。また担当研究者2名のUTSW訪問時には、派遣者④の研究に加え、都医学研で進める研究に関する議論も行った。また最終年度はSan Diegoで開催した合同会議に参加し、主担当研究者等と、今後の脳神経研究の方向性や共同研究の可能性を議論した。また本事業の成果に基づき、現在も派遣者④、担当研究者2名との共同研究を実施中である。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者（機関名）	受入期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
UTSW、神経科学部門、アメリカ合衆国、糸川 昌成（東京都医学総合研究所）	0日	8日	0日	8日

招へい者④の氏名・職名：助教

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）  
最近招へい者①の研究室から独立した招へい者③は、ショウジョウバエ等を用いたマイトファジー研究で、そのメカニズム研究における先駆的役割を果たした研究者である。同領域での解析技術を用いて、大阪大学のMiFI研究等に参画する。

（具体的な成果）  
派遣者①と共に培養細胞を用いたマイトファジー研究を開始し、H27年度の招へい時の議論も含め検討を進めたが、ショウジョウバエを用いた研究の方が有効だと判断された。H28年度から同手法による共同研究を開始し、現在も継続している。計2回の招へい時には、日本薬理学会年会シンポジウム「神経変性疾患創薬に向けた新たな細胞内分子反応の理解」を含む計3回の講演を行い、神経精神創薬領域におけるマイトファジー研究等の重要性を発信した。さらに大阪大学の担当研究者らと新たな共同研究の開始についても協議を行った。現在これらの実現を目的とし、競争的資金への応募を行っている。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者（機関名）	受入期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
パドヴァ大、生化学部門、イタリア、橋本均（大阪大学）	0日	8日	8日	16日

招へい者⑤の氏名・職名：助教

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）  
最近招へい者①の研究室から独立した招へい者③は、ミトコンドリアのクリステ構造に着目した研究を精力的に進めている。博士は、組織や細胞からの単離ミトコンドリアの機能解析や電子顕微鏡解析の専門家であり、この卓越した研究技術をもって、大阪大学で保有するMiFIの遺伝子改変マウスの表現型解析研究に参画する。

（具体的な成果）  
派遣者①とMiFIの遺伝子過剰発現マウスの表現型に関する電子顕微鏡を用いた共同研究を開始し、初年度の招へい時の議論も含め展開を図ったが、さらなる検討が必要と判断された。現在、同欠損マウスを用いた共同研究を継続している。一方で同時期に開始

したクリステ構造の分子機序解析については、派遣者①に解析の一部を依頼し、最終的に共著論文1報として公表した(論文56)。また2回目の招へい時には、福井大学子どもこころセミナー「ミトコンドリア研究の最前線」を含む2回の講演を通じ、神経機能制御におけるミトコンドリア内膜制御の重要性を発信した。招へい時には大阪大学や福井大学の担当研究者と、新たな共同研究に関する協議も行った。招へい者①④と併せ、本事業主体が進める研究のアウトリーチ活動の促進に大きく貢献をした。

招へい元(機関名、部局名、国名)及び日本側受入研究者(機関名)	受入期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
パドヴァ大、生化学部門、イタリア、橋本均(大阪大学)	4日	0日	6日	10日

招へい者⑥の氏名・職名: ポスドク

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

招へい者⑧はバイオインフォマティクスの専門家であり、招へい者③の研究室で様々なデータの *in silico* 解析を行っている。UTSWで派遣者④と共に研究を進め、都医学研では、膨大な臨床データに関する取得方法や解析手法に関する助言を頂く。

(具体的な成果)

バイオインフォマティクスの専門家として、招へい者④と派遣者④の研究に参画した。H27年度は招へい者④と共に来日した。都医学研で本事業の実施状況や今後の展望に関する議論に加わり、膨大な臨床データを精査する方法について有用な助言を行った。また自身の研究成果を日本神経精神薬理学会で発表した。また都医学研では臨床サンプルからの iPS 細胞の樹立技術を学んだ。また担当研究者の UTSW 訪問時にも、招へい者④と共に共同研究の議論に加わった。現在も複数の共同研究に参画している。

招へい元(機関名、部局名、国名)及び日本側受入研究者(機関名)	受入期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
UTSW、神経科学部門、アメリカ合衆国、糸川昌成(東京都医学総合研究所)	0日	8日	0日	8日

招へい者⑦の氏名・職名: ポスドク

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

招へい者⑧は神経発生の専門家であり、招へい者③の研究室で神経発達障害に基づく精神疾患の研究を行なっている。UTSWで派遣者④と共に研究を進め、都医学研で進めているカルボニルストレス性統合失調症に関して、神経発生の見地からの助言を頂く。

(具体的な成果)

招へい者④のスーパーバイズの下、派遣者④と共に複数の共同研究に参画した。UTSWでは派遣者④と共同で新たなバイオインフォマティクス解析系を構築し、同定された新たな因子群についての機能評価を進めた。2回の来日時には、都医学研での議論に加わるほか、日本神経精神薬理学会での発表や、大阪大学を含めた3件の講演を行った。また派遣者④との共同研究の成果を、筆頭演者として国内外の学会で発表した(学会発表257, 261, 265)。また最終年度は事業主体内合同会議(福岡)に参加し、派遣者や研究担当者と共に、事業期間中に達成すべき課題の確認や、事業終了後の継続した連携に関する

る議論に加わった。これらの活動が認められ、事業終了後に担当研究者（福井大学）の研究室の特任助教として採用され、着任した。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者（機関名）	受入期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
UTSW、神経科学部門、アメリカ合衆国、糸川 昌成（東京都医学総合研究所）	0 日	8 日	10 日	18 日

招へい者⑧の氏名・職名： 教授 \_\_\_\_\_（非若手）\_\_\_\_\_

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

アルツハイマー病研究の大家であり、かつ招へい先研究室の担当研究者と交流がある主要連携研究者/招へい者⑧は、派遣者③の研究指導等の責務を負う。招へい時には、担当研究者や主担当研究者と事業の推進に関する協議を行うと共に、特に事業終了後の他の研究機関・製薬企業をあわせた新たな共同研究の枠組みについて議論を行う。

（具体的な成果）

トロント大における派遣者③の研究に対し、自己資金を含めた様々な支援を行い、派遣者③が実施した SUMO 化の病態的意義に関する研究成果 1 件の投稿に尽力した。招へい時には、大阪大学神経科学懇話会で派遣者③や招へい先の担当研究者らとの共同研究の成果をあわせてタンパク翻訳後修飾に関する最新の知見を紹介すると共に、主担当研究者との協議も行った。2 名の担当研究者の 2 回のカナダ訪問も併せ、本事業で推進してきた計 8 件の共同研究に関して深い議論を重ねた。これらを介し、アメリカ・コロンビア大学との共同研究の開始や、担当研究者との共同研究の成果発表を実現した（論文 39）。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び日本側受入研究者（機関名）	受入期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
トロント大、神経変性疾患研究所、カナダ、片山 泰一（大阪大学）	0 日	6 日	0 日	6 日

## 資料3 国際共同研究の計画概要・方法

## (1) 実施期間中における研究のスケジュールと実施内容の概要

5名の長期派遣者と2名の短期派遣者を中心に、以下の時系列で、連携4機関を含む10の海外機関と国際共同研究を推進した。連携研究者の招へい(8名, 9回)、担当研究者の訪問(9名, 11回)、事業主体内会議(8回)を、事業期間中の適切な時期に実施し、進捗状況の確認、新たな共同研究の開始や加速、連携の継続確認等を行った。各派遣者が中心的に携わった共同研究について、以下に共同研究No. 1A~6Dとして示した。

派遣者①⑤：パドヴァ大(計9件(派遣者⑤が進めた2件を併せて11件))

- H26 招へい者①④と1Aを開始, 担当研究者の訪問を通じ招へい者④と1Bを開始  
 H27 担当研究者の訪問を通じ招へい者①と1C, 1Dを開始, インズブルク大と1Eを開始, 派遣者⑤(短期派遣)が進めた5A, 5Bのうち5Bを継承, 招へい者⑤と1Fを開始  
 H28 招へい者①と1Gを開始, 同機関の別の助教と1Hを開始, 招へい者⑤と1Iを開始, 主担当研究者の訪問と招へい, 合同会議で研究内容を確認

派遣者②：UCLA(計11件)

- H26 招へい者②と2A~2Dを継続, 招へいと合同会議を通じて2E~2Hを開始  
 同機関の別の教授と2I, 2Jを開始  
 H27 短期派遣, 国際会議での協議を通じて2Eを加速, NIHの研究者と2Kを開始  
 H28 再渡航と主担当研究者の訪問を通じて2Eを加速, 合同会議等で研究内容を確認

派遣者③：トロント大(計7件)

- H26 招へい者⑧と3A~3Cを継続  
 H27 主担当研究者との協議, 担当研究者の訪問を通じて招へい者⑧と3D~3Fを開始  
 コロンビア大と3Gを開始  
 H28 担当研究者の訪問を通じて3A~3Gの研究を加速, 合同会議等で研究内容を確認

派遣者④：UTSW(H27.3より派遣開始, 計8件)

- H26 渡航に向けて共同研究内容・形態の打ち合わせ  
 H27 招へい者③⑥⑦と4A~4Eを開始, ジョージア工科大やエモリー大との共同開始  
 H28 担当研究者の訪問を通じて4F~4Hを開始, 主担当研究者の訪問等で内容を確認

派遣者⑥：パドヴァ大(H28.5より派遣開始, 計4件)

- H27 渡航に向けて共同研究内容の打ち合わせ, 招へい者①等と6Aを開始  
 H28 1G, 1Hに参画, 招へい者①の研究6Bに参画, クラーツ大の研究者と6Cを開始, 招へい者⑤と6Dを開始, 訪問と招へい, 合同会議等で研究内容を確認

## (2) 成果の概要

[成果の発信状況・当該分野での学術的な貢献面]

本事業の成果は、連携機関との国際共著論文としてH29年3月までに計8件公表している(資料④-1：パドヴァ大1件, UCLA6件, トロント大1件)。また特に、UCLAと進めた共同研究No. 25の成果は、H29年6月にNeuron誌(インパクトファクター = 14.024)に掲

載された(主要論文2, 論文112)。この成果は、新規精神疾患創薬を推進するための新しい基盤技術が開発されたものとして、読売新聞等で報道されるなど高く評価された。

また連携4機関以外との国際共同研究の成果も計17件公表された(PACAPに関する主要論文1, 論文57等)。なお主要論文1の公表に先行するH27年のPACAP国際会議では、全10件のセッション枠で、本事業主体が提案した2件が両方採択された。これらの事実は、事業主体が進める研究が、PACAPの領域では世界的に高く評価されたことを示すといえる。

[海外の研究機関とのネットワークの構築面等の成果]

(1)のとおり、本事業で派遣者が中心的に携わった国際共同研究は計41件である。すなわち各派遣者は、年間平均約3.4件の国際共同研究の推進に関与した。なお派遣者②③が実施した継続課題7件を除き、主担当研究者等が中心となり連携4機関以外の機関と開始した国際共同研究8件を加えると、本事業を契機として始まった国際共同研究は計42件になる。また連携4機関以外との共同(を含む)研究はこの8件を加え15件であった。一方で派遣者が中心となって実施した国際共同研究41件のうち、29件が現在も継続中である。すなわち派遣者ひとりあたり平均5.9件が論文投稿中あるいは研究推進中である。

派遣者①：パドヴァ大

開始： 計9件(派遣を中止した派遣者⑤と併せて11件), 連携機関以外と1件  
 成果： 発表済1件(13), 論文投稿中2件, 推進中2件, 中止2件

派遣者②：UCLA,

開始： 計11件, 4件が継続課題, 連携機関以外と1件  
 成果： 発表済6件(21, 22, 25-28), 論文投稿中2件, 推進中3件

派遣者③：トロント大,

開始： 計7件, 3件が継続課題, 連携機関以外(を含むものが)2件  
 成果： 論文投稿中2件, 推進中6件

派遣者④：UTSW

開始： 計8件, 連携機関以外を含むものが2件  
 成果： 論文投稿中2件, 推進中6件

派遣者⑥：パドヴァ大,

開始： 計4件, 連携機関以外と1件  
 成果： 論文投稿中1件, 推進中3件

その他、主担当研究者等が中心となった国際共同研究

開始： 計8件(連携機関以外との国際共同研究として)  
 成果： 連携機関以外との国際共著論文13件(主要論文1(論文57)等)  
 担当研究者と連携機関との国際共著論文1件(論文39)  
 担当研究者らと連携機関以外との国際共著論文5件

(3) 本事業を契機として新たに始まった国際共同研究 (件)

合計	うち、相手先機関以外
42	15

## 資料4. 共同研究成果の発表状況

## ① 学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文又は著書

	<p>論文名・著書名 等 (以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。</li> <li>・本事業の研究成果で、DP(ディスカッション・ペーパー)、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるものも、3件以内で付記することができます。</li> <li>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</li> <li>・著者名について、責任著者に「※」印を付してください。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者には<u>下線</u>、派遣した若手研究者には<u>波線</u>、海外の主要連携研究者には<u>斜体・太下線</u>、連携研究者には<u>斜体・破線</u>を付してください。</li> <li>・共同研究の相手側となる海外の研究機関との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文については番号の前に「○」印を付してください。速報性のあるものについては番号の前に「□」印を付してください。</li> <li>・当該論文の被引用状況について特筆すべき状況があれば付記してください。</li> <li>・上記のうち、主な発表論文のコピー(A4版)を2件以内で添付し、添付したコピーの表紙等の右上にそれぞれに「事業番号」を記入するとともに、当該論文の番号の前に「★」印を付してください。</li> </ul>
1	Shintani N, Onaka Y, ※Hashimoto R, Takamura H, Nagata T, Umeda-Yano S, Mouri A, Mamiya T, Haba R, Matsuzaki S, Katayama T, Yamamori H, Nakazawa T, Nagayasu K, Ago Y, Yagasaki Y, Nabeshima T, Takeda M, Hashimoto H. Behavioral characterization of mice overexpressing human dysbindin-1. <b>Mol Brain</b> . 2014 Oct 9;7(1):74. 査読有
2	Takuma K, Hara Y, Kataoka S, Kawanai T, Maeda Y, Watanabe R, Takano E, Hayata-Takano A, Hashimoto H, Ago Y, ※Matsuda T. Chronic treatment with valproic acid or sodium butyrate attenuates novel object recognition deficits and hippocampal dendritic spine loss in a mouse model of autism. <b>Pharmacol Biochem Behav</b> . 2014 ;126:43-9. 査読有
○ 3	Botz B, Böleskei K, Kereskai L, Kovács M, Németh T, Szigeti K, Horváth I, Máthé D, Kovács N, Hashimoto H, Reglődi D, Szolcsányi J, Pintér E, Mócsai A, ※Helyes Z. Differential regulatory role of pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide in the serum-transfer arthritis model. <b>Arthritis Rheumatol</b> . 2014 Oct;66(10):2739-50. 査読有
4	Takuma K, Maeda Y, Ago Y, Ishihama T, Takemoto K, Nakagawa A, Shintani N, Hashimoto H, Baba A, ※Matsuda T. An enriched environment ameliorates memory impairments in PACAP-deficient mice. <b>Behav Brain Res</b> . 2014 Oct 1;272:269-78. 査読有
5	Banki E, Pakai E, Gaszner B, Zsiboras C, Czett A, Bhuddi PR, Hashimoto H, Toth G, Tamas A, Reglodi D, ※Garami A. Characterization of the thermoregulatory response to pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide in rodents. <b>J Mol Neurosci</b> . 2014 Nov;54(3):543-54. 査読有
6	Kita Y, Ago Y, Higashino K, Asada K, Takano E, Takuma K, ※Matsuda T. Galantamine promotes adult hippocampal neurogenesis via M <sub>1</sub> muscarinic and α7 nicotinic receptors in mice. <b>Int J Neuropsychopharmacol</b> . 2014 Dec;17(12):1957-68. 査読有
7	Okamoto M, Iguchi T, Hattori T, Matsuzaki S, Koyama Y, Taniguchi M, Komada M, Xie Min-Jue, Yagi H, Shimizu S, Konishi Y, Omi M, Yoshimi T, Tachibana T, Fujieda S, Katayama T, Ito A, Hirotsune S, Tohyama M and ※Sato M. DBZ regulates cortical cell positioning and neurite development by sustaining the anterograde transport of Lis1 and DISC1 through control of Ndel1 Dual-phosphorylation. <b>J Neurosci</b> . 2015 Feb 18;35(7):2942-58. 査読有
8	※Tohyama M, Miyata S, Hattori T, Shimizu S, Matsuzaki S. Molecular basis of major psychiatric diseases such as schizophrenia and depression. <b>Anat Sci Int</b> . 2015 Jan 17. 査読有
9	Bangel F. N, Yamada K, Arai M, Iwayama Y, Balan S, Toyota T, Iwata Y, Suzuki K, Kikuchi M, Hashimoto T, Kanahara N, Mori N, Itokawa M, Stork O, ※Yoshikawa T. Genetic analysis of the glyoxalase system in schizophrenia. <b>Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry</b> . 2015 Jun 3;59:105-10 査読有

○ 10	※Malchenko S, Sredni ST, <u>Hashimoto H</u> , <u>Kasai A</u> , <u>Nagayasu K</u> , Xie J, Margaryan NV, Seiriki K, Lulla RR, Seftor RE, Pachman LM, Meltzer HY, Hendrix MJ, ※Soares MB. A mouse model of human primitive neuroectodermal tumors resulting from microenvironmentally-driven malignant transformation of orthotopically transplanted radial glial cells. <b>PLoS One</b> . 2015 Mar 31;10(3):e0121707. 査読有
○ 11	※Ogata K, ※Shintani N, ※Hayata-Takano A, ※Kamo T, Higashi S, Seiriki K, Momosaki H, Vaudry D, Vaudry H, Galas L, <u>Kasai A</u> , <u>Nagayasu K</u> , <u>Nakazawa T</u> , Hashimoto R, <u>Ago Y</u> , <u>Matsuda T</u> , Baba A, ※ <u>Hashimoto H</u> . PACAP enhances axon and neurite outgrowth in cultured hippocampal neurons to a comparable extent as BDNF. <b>PLoS One</b> , 2015 Mar 25;10(3):e0120526.
12	Hasebe S, Hiramatsu N, <u>Ago Y</u> , Mori K, Watabe Y, <u>Hashimoto H</u> , <u>Takuma K</u> , ※ <u>Matsuda T</u> . Role of the 5-HT <sub>1A</sub> autoreceptor in the enhancement of fluvoxamine-induced increases in prefrontal dopamine release by adrenalectomy/castration in mice. <b>J Pharmacol Sci.</b> , 2015 Feb;127(2):232-5. 査読有
13	Schulze W, <u>Hayata-Takano A</u> , Kamo T, ※ <u>Nakazawa T</u> , <u>Nagayasu K</u> , <u>Kasai A</u> , Seiriki K, <u>Shintani N</u> , <u>Ago Y</u> , Farfan C, Hashimoto R, Baba A, ※ <u>Hashimoto H</u> . Simultaneous neuron- and astrocyte-specific fluorescent marking. <b>Biochem Biophys Res Commun.</b> , 2015 Mar 27;459(1):81-6. 査読有
◎ 14	<u>Onaka Y</u> , ※ <u>Shintani N</u> , <u>Nakazawa T</u> , Haba R, <u>Ago Y</u> , Wang H, Kanoh T, <u>Hayata-Takano A</u> , Hirai H, Nagata K, Nakamura N, Hashimoto R, <u>Matsuda T</u> , <u>Waschek JA</u> , <u>Kasai A</u> , <u>Nagayasu K</u> , Baba A, ※ <u>Hashimoto H</u> . CRTH2, a prostaglandin D2 receptor, mediates depression-related behavior in mice. <b>Behav Brain Res.</b> , 2015;284:131-7. 査読有
15	Ota Y, <u>Ago Y</u> , Tanaka T, Hasebe S, Toratani Y, <u>Onaka Y</u> , <u>Hashimoto H</u> , <u>Takuma K</u> , ※ <u>Matsuda T</u> . Anxiolytic-like effects of restraint during the dark cycle in adolescent mice. <b>Behav Brain Res.</b> , 2015 May 1;284:103-11. 査読有
◎ 16	Yamasaki A, <u>Kasai A</u> , Toi A, Kurita M, Kimoto A, <u>Hayata-Takano A</u> , <u>Nakazawa T</u> , <u>Nagayasu K</u> , <u>Shintani N</u> , Hashimoto R, Ito A, Meltzer HY, <u>Ago Y</u> , <u>Waschek JA</u> , <u>Onaka Y</u> , <u>Matsuda T</u> , Baba A, ※ <u>Hashimoto H</u> . Identification of the role of BMP and TGF- $\beta$ signaling in the trajectory of serotonergic differentiation in a rapid assay in mouse embryonic stem cells in vitro. <b>J Neurochem</b> . 2015 Feb;132(4):418-28. 査読有
17	※ <u>新谷紀人</u> . イタリアへのミトコンドリア留学. 神経化学, 2015 ;54(1): . 査読無
18	※ <u>新井誠</u> 、 <u>小堀晶子</u> 、 <u>宮下光弘</u> 、 <u>鳥海和也</u> 、 <u>堀内泰江</u> 、 <u>畠山幸子</u> 、 <u>内田美樹</u> 、 <u>井上智子</u> 、※ <u>糸川昌成</u> . カルボニルストレス代謝障害と統合失調症. 日本生物学的精神医学会誌. 2015 ;1:pp. 27-33. 査読無
19	※ <u>新井誠</u> . 「最先端バイオマーカーを用いた診断薬/診断装置開発と薬事対応」13章：今後の研究開発のための各疾患の最新のバイオマーカー開発とその応用. 第8節 統合失調症のバイオマーカーと診断薬・機器開発 技術情報協会 pp. 382-385, 2015. 査読無
20	※ <u>宮下光弘</u> , <u>新井誠</u> , <u>市川智恵</u> , <u>鳥海和也</u> , <u>小堀晶子</u> , <u>天野直二</u> , ※ <u>糸川昌成</u> . カルボニルストレスからみた治療抵抗性統合失調症の理解と今後の展開. 臨床精神薬理 17(12):1631-1636, 2014. 査読無
21	※ <u>糸川昌成</u> . 私を変えた、患者さんの「あの一言」. 週刊医学界新聞 第2098号 2014/10/27, 医学書院, 2014. 査読無
22	※ <u>糸川昌成</u> . 特集4・決めつけないでください: 母の行動には理由があった. メンタルヘルスマガジンこころの元気 plus 92:12-13, 2014. 査読無
23	※Hashimoto R, ※ <u>Nakazawa T</u> , Tsurusaki Y, Yasuda Y, <u>Nagayasu K</u> , Matsumura K, Kawashima H, Yamamori H, Fujimoto M, Ohi K, Umeda-Yano S, Fukunaga M, Fujino H, <u>Kasai A</u> , <u>Hayata-Takano A</u> , <u>Shintani N</u> , Takeda M, Matsumoto N, <u>Hashimoto H</u> . Whole-exome sequencing and neurite outgrowth analysis in autism spectrum disorder. <b>J Human Genet</b> . 2016 Mar;61(3):199-206. 査読有
24	※Xu Z, ※Ohtaki H, Watanabe J, Miyamoto K, Murai N, Sasaki S, Matsumoto M, <u>Hashimoto H</u> , Hiraizumi Y, Numazawa S, ※Shioda S. Pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide (PACAP) contributes to the proliferation of hematopoietic progenitor cells in murine bone marrow via PACAP-specific receptor. <b>Sci Rep</b> . 2016 Feb 29;6:22373. 査読有



25	※ <a href="#">Nakazawa T</a> , ※ <a href="#">Hashimoto R</a> , <a href="#">Sakoori K</a> , <a href="#">Sugaya Y</a> , <a href="#">Tanimura A</a> , <a href="#">Hashimotodani Y</a> , <a href="#">Ohi K</a> , <a href="#">Yamamori H</a> , <a href="#">Yasuda Y</a> , <a href="#">Umeda-Yano S</a> , <a href="#">Kiyama Y</a> , <a href="#">Konno K</a> , <a href="#">Inoue T</a> , <a href="#">Yokoyama K</a> , <a href="#">Inoue T</a> , <a href="#">Numata S</a> , <a href="#">Ohnuma T</a> , <a href="#">Iwata N</a> , <a href="#">Ozaki N</a> , <a href="#">Hashimoto H</a> , <a href="#">Watanabe M</a> , <a href="#">Manabe T</a> , <a href="#">Yamamoto T</a> , <a href="#">Takeda M</a> , ※ <a href="#">Kano M</a> . Emerging roles of ARHGAP33 in intracellular trafficking of TrkB and pathophysiology of neuropsychiatric disorders. <b>Nat Commun</b> . 2016, Feb 3;7:10594. 査読有
26	<a href="#">Higashino K</a> , <a href="#">Ago Y</a> , <a href="#">Umeki T</a> , <a href="#">Hasebe S</a> , <a href="#">Onaka Y</a> , <a href="#">Hashimoto H</a> , <a href="#">Takuma K</a> , ※ <a href="#">Matsuda T</a> . Rivastigmine improves isolation rearing-induced prepulse inhibition deficits via muscarinic acetylcholine receptors in mice. <b>Psychopharmacology (Berl)</b> . 2016 Feb;233(3):521-8. 査読有
○ 27	<a href="#">Watanabe K</a> , <a href="#">Palonpon AF</a> , <a href="#">Smith NI</a> , <a href="#">Chiu LD</a> , <a href="#">Kasai A</a> , <a href="#">Hashimoto H</a> , <a href="#">Kawata S</a> , ※ <a href="#">Fujita K</a> . Structured line illumination Raman microscopy. <b>Nat Commun</b> . 2015 Dec 2;6:10095. 査読有
28	<a href="#">Ikeda K</a> , <a href="#">Tomimoto S</a> , <a href="#">Tsuchiya S</a> , <a href="#">Hamagami K</a> , ※ <a href="#">Shintani N</a> , <a href="#">Sugimoto Y</a> , <a href="#">Ichikawa A</a> , <a href="#">Kasai A</a> , <a href="#">Nakazawa T</a> , <a href="#">Nagayasu K</a> , <a href="#">Hayata-Takano A</a> , <a href="#">Baba A</a> , ※ <a href="#">Hashimoto H</a> . Comparative gene expression profiles in pancreatic islets associated with agouti yellow mutation and PACAP overexpression in mice. <b>Biochem Biophys Res Commun</b> . 2015 Jul;2:179-83. 査読有
29	<a href="#">Kawanai T</a> , <a href="#">Taruta A</a> , <a href="#">Inoue A</a> , <a href="#">Watanabe R</a> , <a href="#">Ago Y</a> , <a href="#">Hashimoto H</a> , <a href="#">Hasebe S</a> , <a href="#">Ooi Y</a> , <a href="#">Takuma K</a> , ※ <a href="#">Matsuda T</a> . Decreased expression of hippocampal Na <sup>+</sup> /Ca <sup>2+</sup> exchanger isoform-1 by pentylentetrazole kindling in mice. <b>Epilepsy Res</b> . 2015 Sep;115:109-12. 査読有
30	<a href="#">Ago Y</a> , <a href="#">Hasebe S</a> , <a href="#">Nishiyama S</a> , <a href="#">Oka S</a> , <a href="#">Onaka Y</a> , <a href="#">Hashimoto H</a> , <a href="#">Takuma K</a> , ※ <a href="#">Matsuda T</a> . The female encounter test, a novel method for evaluating reward-seeking behavior or motivation in mice. <b>Int J Neuropsychopharmacol</b> . 2015 May 29;18(11):pyv062. 査読有
○ 31	<a href="#">Helyes Z</a> , <a href="#">Kun J</a> , <a href="#">Dobrosi N</a> , <a href="#">Sándor K</a> , <a href="#">Németh J</a> , <a href="#">Perkecz A</a> , <a href="#">Pintér E</a> , <a href="#">Szabadfi K</a> , <a href="#">Gaszner B</a> , <a href="#">Tékus V</a> , <a href="#">Szolcsányi J</a> , <a href="#">Steinhoff M</a> , <a href="#">Hashimoto H</a> , <a href="#">Reglődi D</a> , ※ <a href="#">Bíró T</a> . Pituitary Adenylate-Cyclase Activating Polypeptide is Upregulated in Murine Skin Inflammation and Mediates Transient Receptor Potential Vanilloid-1-Induced Neurogenic Edema. <b>J Invest Dermatol</b> . 2015 Sep;135(9):2209-18. 査読有
32	<a href="#">Hasebe S</a> , <a href="#">Ago Y</a> , <a href="#">Nishiyama S</a> , <a href="#">Oka S</a> , <a href="#">Hashimoto H</a> , <a href="#">Takuma K</a> , ※ <a href="#">Matsuda T</a> . Pharmacological profile of encounter-induced hyperactivity in isolation-reared mice. <b>Behav Pharmacol</b> . 2015 Oct;26(7 Spec No):681-90. 査読有
◎ 33	<a href="#">Ago Y</a> , <a href="#">Condro MC</a> , <a href="#">Tan YV</a> , <a href="#">Ghiani CA</a> , <a href="#">Colwell CS</a> , <a href="#">Cushman JD</a> , <a href="#">Fanselow MS</a> , <a href="#">Hashimoto H</a> , ※ <a href="#">Waschek JA</a> . Reductions in synaptic proteins and selective alteration of prepulse inhibition in male C57BL/6 mice after postnatal administration of a VIP receptor (VIPR2) agonist. <b>Psychopharmacology (Berl)</b> . 2015 Jun;232(12):2181-9. 査読有
34	<a href="#">Higashi S</a> , <a href="#">Katagi K</a> , <a href="#">Shintani N</a> , <a href="#">Ikeda K</a> , <a href="#">Sugimoto Y</a> , <a href="#">Tsuchiya S</a> , <a href="#">Inoue N</a> , <a href="#">Tanaka S</a> , <a href="#">Koumoto M</a> , <a href="#">Kasai A</a> , <a href="#">Nakazawa T</a> , <a href="#">Hayata-Takano A</a> , <a href="#">Hamagami KI</a> , <a href="#">Tomimoto S</a> , <a href="#">Yoshida T</a> , <a href="#">Ohkubo T</a> , <a href="#">Nagayasu K</a> , <a href="#">Ago Y</a> , <a href="#">Onaka Y</a> , <a href="#">Hashimoto R</a> , <a href="#">Ichikawa A</a> , ※ <a href="#">Baba A</a> , ※ <a href="#">Hashimoto H</a> . p13 overexpression in pancreatic β-cells ameliorates type 2 diabetes in high-fat-fed mice. <b>Biochem Biophys Res Commun</b> . 2015 Jun 12;461(4):612-7. 査読有
◎ 35	<a href="#">Shibasaki Y</a> , <a href="#">Hayata-Takano A</a> , <a href="#">Hazama K</a> , <a href="#">Nakazawa T</a> , <a href="#">Shintani N</a> , <a href="#">Kasai A</a> , <a href="#">Nagayasu K</a> , <a href="#">Hashimoto R</a> , <a href="#">Tanida M</a> , <a href="#">Katayama T</a> , <a href="#">Matsuzaki S</a> , <a href="#">Yamada K</a> , <a href="#">Taniike M</a> , <a href="#">Onaka Y</a> , <a href="#">Ago Y</a> , <a href="#">Waschek JA</a> , <a href="#">Köves K</a> , <a href="#">Reglodi D</a> , <a href="#">Tamas A</a> , <a href="#">Matsuda T</a> , <a href="#">Baba A</a> , ※ <a href="#">Hashimoto H</a> . Atomoxetine reverses locomotor hyperactivity, impaired novel object recognition, and prepulse inhibition impairment in mice lacking pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide (PACAP). <b>Neuroscience</b> . Jun 25;297:95-104. 査読有
36	<a href="#">Hara Y</a> , <a href="#">Takuma K</a> , <a href="#">Takano E</a> , <a href="#">Katashiba K</a> , <a href="#">Taruta A</a> , <a href="#">Higashino K</a> , <a href="#">Hashimoto H</a> , <a href="#">Ago Y</a> , ※ <a href="#">Matsuda T</a> . Reduced prefrontal dopaminergic activity in valproic acid-treated mouse autism model. <b>Behav Brain Res</b> . 2015 Aug 1;289:39-47. 査読有
37	<a href="#">Tsumuraya T</a> , <a href="#">Ohtaki H</a> , <a href="#">Song D</a> , <a href="#">Sato A</a> , <a href="#">Watanabe J</a> , <a href="#">Hiraizumi Y</a> , <a href="#">Nakamachi T</a> , <a href="#">Xu Z</a> , <a href="#">Dohi K</a> , <a href="#">Hashimoto H</a> , <a href="#">Atsumi T</a> , ※ <a href="#">Shioda S</a> . Human mesenchymal stem/stromal cells suppress spinal inflammation in mice with contribution of pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide (PACAP). <b>J Neuroinflammation</b> . 2015 Feb 22;12:35. 査読有
38	<a href="#">Kusakari S</a> , <a href="#">Saitow F</a> , <a href="#">Ago Y</a> , <a href="#">Shibasaki K</a> , <a href="#">Sato-Hashimoto M</a> , <a href="#">Matsuzaki Y</a> , <a href="#">Kotani T</a> , <a href="#">Murata Y</a> , <a href="#">Hirai H</a> , <a href="#">Matsuda T</a> , <a href="#">Suzuki H</a> , ※ <a href="#">Matozaki T</a> , ※ <a href="#">Ohnishi H</a> . Shp2 in forebrain neurons regulates synaptic plasticity, locomotion, and memory formation in mice. <b>Mol Cell Biol</b> . 2015 May;35(9):1557-72. 査読有

◎ 39	<u>Matsuzaki S</u> , Lee L, Knock E, Srikumar T, Sakurai M, Hazrati LN, <u>Katayama T</u> , Staniszewski A, Raught B, ※Arancio O, ※ <u>Fraser PE</u> . SUMO1 Affects Synaptic Function, Spine Density and Memory. <b>Sci Rep</b> . 2015 May 29;5:10730. 査読有
40	Miyatake Y, <u>Matsuzaki S</u> , Taniguchi M, <u>Takamura H</u> , Yamada K, Hattori T, Kameyama T, Manabe T, Tohyama M, <u>Katayama T</u> . Identification and characterization of a novel splice variant of disrupted in schizophrenia 1 (Disc1). <b>J Brain Sci</b> . 2015 Mar 45, 5-34. 査読有
41	※ <u>Matsuzaki S</u> , Hiratsuka T, Taniguchi M, Shingaki K, Kubo T, Kiya K, Fujiwara T, Kanazawa S, Kanematsu R, Maeda T, <u>Takamura H</u> , Yamada K, Miyoshi K, Hosokawa K, Tohyama M, <u>Katayama T</u> . Physiological ER stress mediates the differentiation of fibroblasts. <b>PLoS One</b> . 2015 Apr 10(4):e0123578. 査読有
42	※ <u>Arai M</u> , Kobori A, Miyashita M, <u>Toriumi K</u> , Horiuchi Y, Hatakeyama S and ※ <u>Itokawa M</u> . Pentosidine accumulation in the pathophysiology of schizophrenia: overview of schizophrenia with carbonyl stress. IMARS highlight. 2015; 9(6):9-16. 査読有
43	※Uno K, Nishizawa D, Seo S, Takayama K, Matsumura S, Sakai N, Ohi K, Nabeshima T, Hashimoto R, Ozaki N, Hasegawa J, Sato N, Tanioka F, Sugimura H, Fukuda KI, Higuchi S, Ujike H, Inada T, Iwata N, Sora I, Iyo M, Kondo N, Won MJ, Naruse N, Uehara-Aoyama K, <u>Itokawa M</u> , Yamada M, Ikeda K, Miyamoto Y, Nitta A. The Piccolo Intronic Single Nucleotide Polymorphism rs13438494 Regulates Dopamine and Serotonin Uptake and Shows Associations with Dependence-Like Behavior in Genomic Association Study. <b>Curr Mol Med</b> . 2015 15(3):265-274. 査読有
44	※Koike S, Kayama T, <u>Arai Makoto</u> , Horiuchi Y, Kobori A, Miyashita M, <u>Itokawa M</u> , Ogasawara Y. Characterization of modified proteins in plasma from a subtype of schizophrenia based on carbonyl stress: Protein carbonyl is a possible biomarker of psychiatric disorders. <b>Biochem Biophys Res Commun</b> . 2015 467(2):361-6. 査読有
45	※Maekawa M, Yamada K, Toyoshima M, Ohnishi T, Iwayama Y, Shimamoto C, Toyota T, Nozaki Y, Balan S, <u>Matsuzaki H</u> , Iwata Y, Suzuki K, Miyashita M, Kikuchi M, Kato M, Okada Y, Akamatsu W, Mori N, Owada Y, <u>Itokawa M</u> , Okano H, Yoshikawa T. Utility of Scalp Hair Follicles as a Novel Source of Biomarker Genes for Psychiatric Illnesses. <b>Biol Psychiatry</b> . 2015 Jul 15;78(2):116-2. 査読有
46	※Nishizawa D, Kasai S, Hasegawa J, Sato N, Yamada H, Tanioka F, Nagashima M, Katoh R, Satoh Y, Tagami M, Ujike H, Ozaki N, Inada T, Iwata N, Sora I, Iyo M, Yamada M, Kondo N, Won M, Naruse N, Uehara-Aoyama K, <u>Itokawa M</u> , Ohi K, Hashimoto R, Tanisawa K, Arai T, Mori S, Sawabe M, Naka-Mieno M, Yamada Y, Yamada M, Sato N, Muramatsu M, Tanaka M, Irukayama-Tomobe Y, Saito Y, Sakurai T, Hayashida M, Sugimura H, Ikeda K. Associations between the orexin (hypocretin) receptor 2 gene polymorphism Val308Ile and nicotine dependence in genome-wide and subsequent association studies. <b>Mol Brain</b> 2015 8:50. 査読有
47	※Saiga R, Takekoshi S, Inomoto C, Nakamura N, Tsuboi A, Osawa M, <u>Arai Makoto</u> , Oshima K, <u>Itokawa M</u> , Uesugi K, Takeuchi A, Terada Y, Suzuki Y and Mizutani R. Three-Dimensional Neuronal Structure of Human Cerebral Cortex Determined by Synchrotron-Radiation Microtomography. <b>Microsc. Microanal.</b> 2015 21(Suppl 3) 査読有
○ 48	※Aoyama Y, <u>Toriumi K</u> , Mouri A, Hattori T, Ueda E, Shimato A, Sakakibara N, Soh Y, Mamiya T, Nagai T, Kim H-C, Hiramatsu M, Nabeshima T, Yamada K. Prenatal nicotine exposure impairs the proliferation of neuronal progenitors, leading to fewer glutamatergic neurons in the medial prefrontal cortex. <b>Neuropsychopharmacology</b> 2015 41: 578-589. 査読有
○ 49	※ <u>Toriumi K</u> , Mamiya T, Song Z, Honjo T, Watanabe H, Tanaka J, Kondo M, Mouri A, Kim H-C, Nitta A, Fukushima T, Nabeshima T. Deletion of SHATI/NAT8L decreases the N-acetylaspartate content in the brain and induces behavioral deficits, which can be ameliorated by administering N-acetylaspartate. <b>Eur Neuropsychopharmacol</b> . 2015 25: 2108-2117. 査読有
○ 50	※Kouidrat Y, Amad A, <u>Arai Makoto</u> , Miyashita M, Lalau JD, Loas G, <u>Itokawa M</u> . Advanced glycation end products and schizophrenia: A systematic review. <b>J Psychiatr Res</b> . 2015 Jul-Aug; 66-67C:112-117 (総説)
51	※糸川昌成 科学者が脳と心をつなぐとき～父と母と私が織りなす 50年の物語～ 千葉:COHMO, 2016

52	※堀内泰江, 新井誠, 糸川昌成. II 臨床応用を目指した基礎研究: 疾患モデル細胞、iPS 細胞を用いた毒性評価と製薬研究 iPS 細胞を用いた精神疾患の病態解析. 日本臨床 2015 73(5):406-410,
53	※糸川昌成. 統合失調症への面接に挑む姿勢-患者さんの生活を診る姿勢. 中井久夫の臨床作法 こころの科学 2015/9 統合失調症のひろば編集部
54	※糸川昌成. タチツボスミレの咲く丘で. 統合失調症のひろば No.6 2015 秋. 25/9/2015. 日本評論社.
55	※糸川昌成. 精神科医として、科学者として、子どもとして. 精神医学 2015 57(11)973-980.
◎ 56	Glytsou C, Calvo E, Cogliati S, Mehrotra A, Anastasia I, Rigoni G, Raimondi A, <u>Shintani N</u> , Loureiro M, Vazquez J, Pellegrini L, Enriquez JA, ※ <u>Scorrano L</u> , ※ <u>Soriano ME</u> . Optic Atrophy 1 Is Epistatic to the Core MICOS Component MIC60 in Mitochondrial Cristae Shape Control. <b>Cell Rep.</b> 2016; 17: 3024-3034. 査読有.
★ ○ 57	Nakamachi T, Ohtaki H, Seki T, Yofu S, Kagami N, <u>Hashimoto H</u> , <u>Shintani N</u> , Baba A, Mark L, Lanekoff I, Kiss P, Farkas J, Reglodi D, ※Shioda S. PACAP suppresses dry eye signs by stimulating tear secretion. <b>Nat Commun.</b> 2016; 7: 12034. 査読有.
58	Seiriki K, <u>Kasai A</u> , Kuwaki T, <u>Nakazawa T</u> , Yamaguchi S, ※ <u>Hashimoto H</u> . Critical involvement of the orbitofrontal cortex in hyperlocomotion induced by NMDA receptor blockade in mice. <b>Biochem Biophys Res Commun.</b> 2016; 480: 558-563. 査読有.
59	Nakata M, Zhang B, Yang Y, Okada T, <u>Shintani N</u> , <u>Hashimoto H</u> , ※Yada T. High-Fat Diet Augments VPAC1 Receptor-Mediated PACAP Action on the Liver, Inducing LAR Expression and Insulin Resistance. <b>J Diabetes Res.</b> 2016; 9321395. 査読有.
○ 60	Kormos V, Gáspár L, Kovács LÁ, Farkas J, Gaszner T, Csernus V, Balogh A, <u>Hashimoto H</u> , Reglodi D, Helyes Z, ※Gaszner B. Reduced response to chronic mild stress in PACAP mutant mice is associated with blunted FosB expression in limbic forebrain and brainstem centers. <b>Neuroscience.</b> 2016; 330: 335-358. 査読有.
61	Matsumura K, ※ <u>Nakazawa T</u> , Nagayasu K, Gotoda-Nishimura N, <u>Kasai A</u> , <u>Hayata-Takano A</u> , <u>Shintani N</u> , Yamamori H, Yasuda Y, Hashimoto R, <u>Hashimoto H</u> . De novo POGZ mutations in sporadic autism disrupt the DNA-binding activity of POGZ. <b>J Mol Psychiatry.</b> 2016; 4: 1. 査読有.
◎ 62	<u>Ago Y</u> , Condro MC, Rajbhandari AK, Van C, Jayaram B, May V, ※ <u>Waschek JA</u> . PACAP modulation of CNS and peripheral inflammation. Pituitary Adenylate Cyclase Activating Polypeptide — PACAP (Edited by Reglodi D and Tamas A), Springer, 2016; Part XII Role of PACAP in Inflammatory Processes: 651-670. 査読有.
63	Onaka Y, ※ <u>Shintani N</u> , <u>Nakazawa T</u> , Kanoh T, <u>Ago Y</u> , Matsuda T, Hashimoto R, Ohi K, Hirai H, Nagata KY, Nakamura M, <u>Kasai A</u> , <u>Hayata-Takano A</u> , Nagayasu K, <u>Takuma K</u> , Ogawa A, Baba A, ※ <u>Hashimoto H</u> . Prostaglandin D <sub>2</sub> signaling mediated by the CRTH2 receptor is involved in MK-801-induced cognitive dysfunction. <b>Behav Brain Res.</b> 2016; 314: 77-86. 査読有.
64	※ <u>Hashimoto H</u> , <u>Shintani N</u> , <u>Ago Y</u> , <u>Hayata-Takano A</u> , <u>Nakazawa T</u> , Hashimoto R, Matsuzaki S, <u>Katayama T</u> , Tohyama M, Matsuda T, Baba A. Implications of PACAP signaling in psychiatric disorders. Pituitary Adenylate Cyclase Activating Polypeptide — PACAP (Edited by Reglodi D and Tamas A), Springer, 2016; Part XIII PACAP in Stress and Mood Disorders: 757-766. 査読有.
◎ 65	Condro MC, Matynia A, Foster NN, <u>Ago Y</u> , Rajbhandari AK, Jayaram B, Parikh S, Diep AL, Nguyen E, May V, Dong HW, ※ <u>Waschek JA</u> . High-resolution characterization of a PACAP-EGFP transgenic mouse model for mapping PACAP-expressing neurons. <b>J Comp Neurol</b> 2016; 524: 3827-3848. 査読有.
66	Kawanai T, <u>Ago Y</u> , Watanabe R, Inoue A, Taruta A, Onaka Y, Hasebe S, <u>Hashimoto H</u> , Matsuda T, ※ <u>Takuma K</u> . Prenatal Exposure to Histone Deacetylase Inhibitors Affects Gene Expression of Autism-Related Molecules and Delays Neuronal Maturation. <b>Neurochem Res.</b> 2016; 41: 2574-2584. 査読有.
67	Hara Y, <u>Ago Y</u> , Taruta A, Katashiba K, Hasebe S, Takano E, Onaka Y, <u>Hashimoto H</u> , Matsuda T, ※ <u>Takuma K</u> . Improvement by methylphenidate and atomoxetine of social interaction deficits and recognition memory impairment in a mouse model of valproic acid-induced autism. <b>Autism Res.</b> 2016; 9: 926-939. 査読有.

68	<u>Ago Y.</u> , Hasebe S, Hiramatsu N, Mori K, Watabe Y, Onaka Y, <u>Hashimoto H.</u> , <u>Takuma K.</u> , ※ Matsuda T. Involvement of GABA <sub>A</sub> receptors in 5-HT <sub>1A</sub> and σ <sub>1</sub> receptor synergism on prefrontal dopaminergic transmission under circulating neurosteroid deficiency. <b>Psychopharmacology (Berl)</b> . 2016; 233: 3125-3134. 査読有.
69	<u>Ago Y.</u> , <u>Takuma K.</u> , ※ Matsuda T. Methamphetamine-induced hyperlocomotion: a focus on the role of the prefrontal serotonergic system. <i>Neuropathology of Drug Addictions and Substance Misuse, Volume 2: Stimulants, Club and Dissociative Drugs, Hallucinogens, Steroids, Inhalants, and International Aspects</i> (Edited by Preedy VR), Elsevier, Academic Press. 2016; Chapter 31: 320-328. 査読有.
70	Hasebe S, <u>Ago Y.</u> , Watabe Y, Oka S, Hiramatsu N, Tanaka T, Umehara C, <u>Hashimoto H.</u> , <u>Takuma K.</u> , ※ Matsuda T. Anti-anhedonic effect of selective serotonin reuptake inhibitors with affinity for sigma-1 receptors in picrotoxin-treated mice. <b>Br J Pharmacol</b> . 2017; 174: 314-327. 査読有.
71	Morishita Y, ※Yoshioka Y, Takimura Y, Shimizu Y, Namba Y, Nojiri N, Ishizaka T, Takao K, Yamashita F, <u>Takuma K.</u> , <u>Ago Y.</u> , Nagano K, Mukai Y, Kamada H, Tsunoda S, Saito S, Matsuda T, Hashida M, Miyakawa T, Higashisaka K, ※Tsutsumi Y. Distribution of Silver Nanoparticles to Breast Milk and Their Biological Effects on Breast-Fed Offspring Mice. <b>ACS Nano</b> . 2016; 10: 8180-8191. 査読有.
72	<u>Toriumi K.</u> , Oki M, Muto E, Tanaka J, Mouri A, Mamiya T, Kim HC, ※Nabeshima T. Prenatal phencyclidine treatment induces behavioral deficits through impairment of GABAergic interneurons in the prefrontal cortex. <b>Psychopharmacology</b> . 2016; 233: 2373-2381. 査読有.
73	※Miyashita M, Watanabe T, Ichikawa T, <u>Toriumi K.</u> , Horiuchi Y, Kobori A, Kushima I, Hashimoto R, Fukumoto M, Koike S, Ujike H, Arinami T, Tatebayashi Y, Kasai K, Takeda M, Ozaki N, Okazaki Y, Yoshikawa T, Amano N, Washizuka S, Yamamoto H, Miyata T, <u>Itokawa M.</u> , Yamamoto Y, <u>Arai M.</u> The regulation of soluble receptor for AGEs contributes to carbonyl stress in schizophrenia. <b>Biochem Biophys Res Commun</b> . 2016; 479: 447-452. 査読有.
74	Kushima I, Aleksic B, Nakatochi M, Shimamura T, Shiino T, Yoshimi A, Kimura H, Takasaki Y, Wang C, Xing J, Ishizuka K, Oya-Ito T, Nakamura Y, Arioka Y, Maeda T, Yamamoto M, Yoshida M, Noma H, Hamada S, Morikawa M, Uno Y, Okada T, Iidaka T, Iritani S, Yamamoto T, Miyashita M, Kobori A, <u>Arai M.</u> , <u>Itokawa M.</u> , Cheng MC, Chuang YA, Chen CH, Suzuki M, Takahashi T, Hashimoto R, Yamamori H, Yasuda Y, Watanabe Y, Nunokawa A, Someya T, Ikeda M, Toyota T, Yoshikawa T, Numata S, Ohmori T, Kunimoto S, Mori D, Iwata N, ※Ozaki N. High-resolution copy number variation analysis of schizophrenia in Japan. <b>Mol Psychiatry</b> . 2016; 22: 430-440. 査読有.
75	※Ogasawara Y, Tanaka R, Koike S, Horiuchi Y, Miyashita M, <u>Arai M.</u> Determination of methylglyoxal in human blood plasma using fluorescence high performance liquid chromatography after derivatization with 1,2-diamino-4,5-methylenedioxybenzene. <b>J Chromatogr B Analyt Technol Biomed Life Sci</b> . 2016; 1029-1030: 102-105. 査読有.
76	Mizutani R, Saiga R, Takekoshi S, Inomoto C, Nakamura N, <u>Itokawa M.</u> , <u>Arai M.</u> , Oshima K, Takeuchi A, Uesugi K, Terada Y, ※Suzuki Y. A method for estimating spatial resolution of real image in the Fourier domain. <b>J Microsc</b> . 2016; 261: 57-66. 査読有.
77	※Saiga R, Mizutani R, Inomoto C, Takekoshi S, Nakamura N, Tsuboi A, Osawa M, <u>Arai M.</u> , Oshima K, <u>Itokawa M.</u> , Uesugi K, Takeuchi A, Terada Y, ※Suzuki Y. Three-dimensional structure of brain tissue at submicrometer resolution. <b>AIP Conference Proceedings</b> . 2016; 1696, 020004. 査読有.
78	※Matsumoto M, Nakamachi T, Watanabe J, Sugiyama K, Ohtaki H, Murai N, Sasaki S, Xu Z, <u>Hashimoto H.</u> , Seki T, Miyazaki A, ※Shioda S. Pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide (PACAP) is involved in adult mouse hippocampal neurogenesis after stroke. <b>J Mol Neurosci</b> . 2016; 59: 270-279. 査読有.
79	Ikawa D, ※Makinodan M, <u>Iwata K.</u> , Ohgidani M, Kato TA, Yamashita Y, Yamamuro K, Kimoto S, Toritsuka M, Yamauchi T, Fukami SI, Yoshino H, Okumura K, Tanaka T, Wanaka A, Owada Y, Tsujii M, Sugiyama T, Tsuchiya K, Mori N, Hashimoto R, <u>Matsuzaki H.</u> , Kanba S, Kishimoto T. Microglia-derived neuregulin expression in psychiatric disorders. <b>Brain Behav Immun</b> . 2017; 61: 375-385. 査読有.
80	※Makinodan M, <u>Iwata K.</u> , Ikawa D, Yamashita Y, Yamamuro K, Toritsuka M, Kimoto S, Okumura, K., Yamauchi, T., Yoshino, H., Tsujii, M., Sugiyama, T., Tsuchiya, K., Mori, N., <u>Matsuzaki, H.</u> , and Kishimoto, T. Tumor necrosis factor-alpha expression in peripheral blood mononuclear cells correlates with early childhood social interaction in autism spectrum disorder, <b>Neurochem Int</b> . 2017; 104: 1-5. 査読有.

○ 81	Andrade EC, Musante V, Horiuchi A, <u>Matsuzaki H</u> , Brady AH, Wu T, Greengard P, Taylor JR, ※Nairn AC. ARPP-16 is a striatal-enriched inhibitor of protein phosphatase 2A regulated by microtubule-associated serine/threonine kinase 3. <b>J Neurosci.</b> 2017; 37: 2709-2722. 査読有.
82	Fujiwara K, Fujita Y, <u>Kasai A</u> , Onaka Y, <u>Hashimoto H</u> , Okada H, ※Yamashita T. Deletion of JMJD2B in neurons leads to defective spine maturation, hyperactive behavior and memory deficits in mouse. <b>Transl Psychiatry.</b> 2016; 6: e766. 査読有.
○ 83	Egri P, Fekete C, Dénes Á, Reglodi D, <u>Hashimoto H</u> , Fülöp BD, ※Gereben B. Pituitary Adenylate Cyclase-Activating Polypeptide (PACAP) Regulates the Hypothalamo-Pituitary-Thyroid (HPT) Axis via Type 2 Deiodinase in Male Mice. <b>Endocrinology.</b> 2016; 157: 2356-2366. 査読有.
○ 84	Sandor B, Fintor K, Reglodi D, Fulop DB, Helyes Z, Szanto I, Nagy P, <u>Hashimoto H</u> , ※Tamas A. Structural and Morphometric Comparison of Lower Incisors in PACAP-Deficient and Wild-Type Mice. <b>J Mol Neurosci.</b> 2016; 59: 300-308. 査読有.
85	Sasaki S, Watanabe J, Ohtaki H, Matsumoto M, Murai N, Nakamachi T, Hannibal J, Fahrenkrug J, <u>Hashimoto H</u> , Watanabe H, Sueki H, Honda K, Miyazaki A, ※Shioda S. Pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide promotes eccrine gland sweat secretion. <b>Br J Dermatol.</b> 2017; 176: 413-422. 査読有.
86	<u>Nakazawa T</u> , Kikuchi M, Ishikawa M, Yamamori H, Nagayasu K, Matsumoto T, Fujimoto M, Yasuda Y, Fujiwara M, Okada S, Matsumura K, <u>Kasai A</u> , <u>Hayata-Takano A</u> , <u>Shintani N</u> , Numata S, <u>Takuma K</u> , Akamatsu W, Okano H, Nakaya A, <u>Hashimoto H</u> , ※Hashimoto R. Differential gene expression profiles in neurons generated from lymphoblastoid B-cell line-derived iPS cells from monozygotic twin cases with treatment-resistant schizophrenia and discordant responses to clozapine. <b>Schizophr Res.</b> 2017; 181: 75-82. 査読有.
87	※ <u>Kasai A</u> , Kakihara S, Miura H, Okada R, <u>Hayata-Takano A</u> , Hazama K, Niu M, <u>Shintani N</u> , <u>Nakazawa T</u> , ※ <u>Hashimoto H</u> . Double In situ Hybridization for MicroRNAs and mRNAs in Brain Tissues. <b>Front Mol Neurosci.</b> 2016; 9: 126. 査読有.
88	Ishibashi Y, Izumo N, <u>Iwata K</u> , Morikawa T, Kameyama T, Watanabe Y, ※Manabe T, ※ <u>Matsuzaki H</u> . Fluvoxamine reverses estrogen-dependent decline in voluntary activities and decreased amygdala levels of serotonin in ovariectomized rats. <b>J Brain Sci</b> 2016; 46: 5-19. 査読有.
○ 89	Farkas J, Sandor B, Tamas A, Kiss P, <u>Hashimoto H</u> , Nagy AD, Fulop BD, Juhasz T, Manavalan S, ※Reglodi D. Early Neurobehavioral Development of Mice Lacking Endogenous PACAP. <b>J Mol Neurosci.</b> 2017 Apr;61(4):468-478. 査読有.
○ 90	Lacaille H, Duterte-Boucher D, Vaudry H, Zerdoumi Y, Flaman JM, <u>Hashimoto H</u> , ※Vaudry D. PACAP Protects the Adolescent and Adult Mice Brain from Ethanol Toxicity and Modulates Distinct Sets of Genes Regulating Similar Networks. <b>Mol Neurobiol.</b> 2016; in press. 査読有.
91	Tanaka T, <u>Ago Y</u> , Umehara C, Imoto E, Hasebe S, <u>Hashimoto H</u> , <u>Takuma K</u> , ※Matsuda T. Role of prefrontal serotonergic and dopaminergic systems in encounter-induced hyperactivity in methamphetamine-sensitized mice. <b>Int J Neuropsychopharmacol.</b> , 2017 May 1;20(5):410-421. 査読有.
92	Fujita Y, Masuda K, Bando M, Nakato R, Katou Y, Tanaka T, Nakayama M, Takao K, Miyakawa T, Tanaka T, <u>Ago Y</u> , <u>Hashimoto H</u> , ※Shirahige K, ※Yamashita T. Decreased cohesin in the brain leads to defective synapse development and anxiety-related behavior. <b>J Exp Med.</b> May 1;214(5):1431-1452. 査読有.
○ 93	Tran TV, Shin EJ, Jeong JH, Jang CG, Lei XG, <u>Toriumi K</u> , Yamada K, Nabeshima T, ※Kim HC. Protective potential of the glutathione peroxidase-1 gene in abnormal behaviors induced by phencyclidine in mice. <b>Mol Neurobiol.</b> 2016; in press. 査読有.
○ 94	Ivic I, Fulop BD, Juhasz T, Reglodi D, Toth G, <u>Hashimoto H</u> , Tamas A, ※Koller A. Backup mechanism maintains PACAP/VIP-induced arterial relaxations in PACAP-deficient mice. <b>J Vasc Res.</b> 2017;54(3):180-192. 査読有.
95	※Haruta M, Kamiyama N, Nakajima S, Motoyama M, Kawahara M, Ohta Y, Yamasaki A, Takehara H, Noda T, Sasagawa K, Ishikawa Y, Tokuda T, <u>Hashimoto H</u> , Ohta J. Implantable neural bidirectional device with CMOS integrated circuit technology for animal behavior. <b>Jpn J Appl Phys</b> 2017; in press. 査読有.
96	※ <u>松崎秀夫</u> . 生物学的自閉症研究の進歩. <b>脳</b> 21. 19(4):142-149, 2016. 査読無

◎ 97	※ <u>吾郷由希夫</u> , <u>早田敦子</u> , <u>河内琢也</u> , <u>山内良介</u> , <u>James Waschek</u> , <u>橋本 均</u> . マウス新生仔期のVPAC2受容体過活性化は, 前頭前皮質神経細胞の形態学的異常と認知機能障害を引き起こす. 日本神経精神薬理学雑誌. 2017; in press. 査読有.
98	※ <u>吾郷由希夫</u> . うつ病モデル動物の新しい行動評価法と抗うつ薬の新しい標的候補分子. ファルマシア. 2017; in press. 査読有.
99	<u>早田敦子</u> , <u>吾郷由希夫</u> , ※ <u>橋本 均</u> . 神経ペプチド PACAP 及びその受容体の種類と構造. Clinical Neuroscience (月刊 臨床神経科学), 分子から迫る神経薬理学 (中外医学社). 2017; in press. 査読無.
100	※ <u>高村明孝</u> , <u>宮田信吾</u> , <u>遠山正彌</u> , <u>片山泰一</u> . 特集1 ミトコンドリアダイナミクスとその破綻による神経疾患-4, ミトコンドリアタンパク質 TRAP1 機能とミトコンドリアダイナミクス-脳機能との関わり. 脳 21. 2016; 19: 30-37. 査読無.
101	※ <u>田熊一敬</u> , <u>吾郷由希夫</u> , <u>長谷部 茂</u> , <u>中澤敬信</u> , <u>橋本 均</u> , <u>松田敏夫</u> . 幼若期の環境要因による情動行動変化. 日本薬理学雑誌. 2017; 149: 76-78. 査読有.
102	※ <u>吾郷由希夫</u> , <u>長谷部 茂</u> , <u>橋本 均</u> , <u>田熊一敬</u> , <u>松田敏夫</u> . 雌選択性試験:マウス間相互作用を基盤とした新規意欲/報酬探索行動評価系. 日本薬理学雑誌. 2016; 147: 230-234. 査読有.
103	※ <u>糸川昌成</u> . 症候群としての統合失調症-生物学的研究からの再検討. 精神医学の哲学第1巻 2016; 138-151. 査読無.
104	※ <u>糸川昌成</u> . 第8章 第2節 疾患 8-2-1 統合失調症. 精神保健医療福祉白書2017. 2016; 167. 査読無.
105	<u>新井誠</u> , <u>宮下光弘</u> , <u>小堀晶子</u> , <u>井上智子</u> , <u>堀内泰江</u> , <u>鳥海和也</u> , <u>内田美樹</u> , <u>畠山幸子</u> , <u>小幡菜々子</u> , <u>野原泉</u> , ※ <u>糸川昌成</u> . 臨床医学分野における人材育成の強化. 日本生物学的精神医学会誌. 2016; 27:163-167. 査読無.
106	<u>堀内泰江</u> , <u>宮下光弘</u> , <u>糸川昌成</u> , ※ <u>新井誠</u> . カルボニルストレス性統合失調症患者由来 iPSC細胞を用いた統合失調症病態解明. 分子精神医学. 2016; 16: 15-21. 査読無.
107	<u>宮下光弘</u> , <u>堀内泰江</u> , <u>新井誠</u> , ※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症におけるカルボニルストレス. 生体の科学. 2016; 67: 484-485. 査読無.
108	※ <u>糸川昌成</u> . 今さら聞けないこの言葉ピロドキサミン. 精神科臨床サービス 第16巻第2号. 2016; 295-297. 査読無.
109	※ <u>糸川昌成</u> . 脳と心 臨床家がなぜ研究をするのか. 埼玉精神神経科診療所協会誌 平成27年度(第21号). 2016; 185-198. 査読無.
110	<u>新井誠</u> , <u>宮下光弘</u> , <u>小堀晶子</u> , <u>堀内泰江</u> , <u>鳥海和也</u> , ※ <u>糸川昌成</u> . 糖化ストレスマーカーと統合失調症. 日本生物学的精神医学会誌. 2016; 27:8-14. 査読無.
111	Kinoshita M, Numata S, Tajima A, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Watanabe S, Umehara H, Shimodera S, <u>Nakazawa T</u> , Kikuchi M, Nakaya A, <u>Hashimoto H</u> , Imoto I, Hashimoto R, ※Ohmori T. Effect of Clozapine on DNA Methylation in Peripheral Leukocytes from Patients with Treatment-Resistant Schizophrenia. Int J Mol Sci. 2017 Mar 14;18(3) 査読有.
★ ◎ 112	<u>Seiriki K</u> , ※ <u>Kasai A</u> , <u>Hashimoto T</u> , <u>Schulze W</u> , <u>Niu M</u> , <u>Yamaguchi S</u> , <u>Nakazawa T</u> , <u>Inoue KI</u> , <u>Uezono S</u> , <u>Takada M</u> , <u>Naka Y</u> , <u>Igarashi H</u> , <u>Tanuma M</u> , <u>Waschek JA</u> , <u>Ago Y</u> , <u>Tanaka KF</u> , <u>Hayata-Takano A</u> , <u>Nagayasu K</u> , <u>Shintani N</u> , <u>Hashimoto R</u> , <u>Kunii Y</u> , <u>Hino M</u> , <u>Matsumoto J</u> , <u>Yabe H</u> , <u>Nagai T</u> , <u>Fujita K</u> , <u>Matsuda T</u> , <u>Takuma K</u> , <u>Baba A</u> , ※ <u>Hashimoto H</u> . High-Speed and Scalable Whole-Brain Imaging in Rodents and Primates. Neuron. 2017 Jun 21;94(6):1085-1100 査読有. (H28.3以降の掲載だが、重要な成果であるため記載)

## ②学会等における発表

	<p>発表題名 等</p> <p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)</p> <p>(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、主たる発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者には<u>下線</u>、派遣した若手研究者には<u>波線</u>、海外の主要連携研究者には<u>斜体・太下線</u>、連携研究者には<u>斜体・破線</u>を付して下さい。</li> <li>口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。</li> <li>さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</li> <li>共同研究の相手側となる海外の研究機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。</li> </ul>
1	※ <u>橋本均</u> 、 <u>新谷紀人</u> 、 <u>早田敦子</u> 、 <u>笠井淳司</u> 、 <u>永安一樹</u> 、 <u>中澤敬信</u> . 神経ペプチドPACAPによる精神機能調節：創薬への展望. 第36回日本生物学的精神医学会・第57回日本神経化学学会大会 合同年会, 奈良, 2014年10月1日. 口頭発表(シンポジウム), 審査無
2	※ <u>本郷翔子</u> 、 <u>中田理恵子</u> 、 <u>尾中勇祐</u> 、 <u>新谷紀人</u> 、 <u>橋本均</u> 、 <u>井上裕康</u> . PRAB $\beta$ ( $\sigma$ ) 遺伝子欠損マウスの行動表現型に関する検討. 第87回日本生化学会, 2014/10/15~18, ポスター発表, 審査有
3	※ <u>柿原素楽</u> 、 <u>笠井淳司</u> 、 <u>岡田遼</u> 、 <u>尾中勇祐</u> 、 <u>中澤敬信</u> 、 <u>永安一樹</u> 、 <u>早田敦子</u> 、 <u>新谷紀人</u> 、 <u>橋本均</u> . LPS誘発炎症モデルにおいて発現変化する脳内miRNAの同定. 第126回日本薬理学会近畿部会, 和歌山, 24/10/2014. 口頭発表, 審査無
4	※ <u>橋本均</u> . アメリカにおける神経精神薬理学会の動向. 第24回日本臨床精神神経薬理学会・第44回日本神経精神薬理学会合同年会, 名古屋, 20-22/11/2014. 口頭発表(シンポジウム), 審査無
5	※ <u>中澤敬信</u> 、 <u>橋本亮太</u> 、 <u>永安一樹</u> 、 <u>安田由華</u> 、 <u>山森英長</u> 、 <u>梅田知美</u> 、 <u>藤本美智子</u> 、 <u>大井一高</u> 、 <u>石川充</u> 、 <u>赤松和土</u> 、 <u>岡野栄之</u> 、 <u>武田雅俊</u> 、 <u>橋本均</u> . iPS細胞関連技術を用いた統合失調症研究. 第24回日本臨床精神神経薬理学会・第44回日本神経精神薬理学会合同年会, 名古屋, 20-22/11/2014. 口頭発表(シンポジウム), 審査無
6	※ <u>松村憲佑</u> 、 <u>永安一樹</u> 、 <u>中澤敬信</u> 、 <u>安田由華</u> 、 <u>山森英長</u> 、 <u>梅田知美</u> 、 <u>大井一高</u> 、 <u>橋本亮太</u> 、 <u>武田雅俊</u> 、 <u>橋本均</u> . 自閉症の疾患特異的候補遺伝子の機能的スクリーニング系の確立. 第24回日本臨床精神神経薬理学会・第44回日本神経精神薬理学会合同年会, 名古屋, 20-22/11/2014. 口頭発表, 審査有
7	※ <u>中澤敬信</u> . iPS細胞関連技術を用いた統合失調症研究. 第5回脳表現型の分子メカニズム研究会. 東京, 2014年12月6日, 口頭発表(招待講演), 審査無
8	※ <u>Nakazawa T</u> , Hashimoto R, Tanimura A, Ohi K, Yamamori H, Yasuda Y, Umeda-Yano S, Kiyama Y, Konno K, Inoue T, Numata S, Ohnuma T, Iwata N, Ozaki N, <u>Hashimoto H</u> , Watanabe M, Manabe T, Yamamoto T, Takeda M, Kano M. Brain-enriched Sorting Nexin Family Proteins Regulate Spine Morphogenesis and Are Associated with Risk for Schizophrenia. ACNP 53rd Annual Meeting, Aliso, USA, 2014/12/-11, 口頭発表, 審査有
9	※ <u>永安一樹</u> 、 <u>松村憲佑</u> 、 <u>中澤敬信</u> 、 <u>安田由華</u> 、 <u>山森英長</u> 、 <u>梅田知美</u> 、 <u>大井一高</u> 、 <u>橋本亮太</u> 、 <u>武田雅俊</u> 、 <u>橋本均</u> . 自閉スペクトラム症関連候補遺伝子のハイスループット機能評価系による解析. 2014年度包括脳ネットワーク冬のシンポジウム, 東京, 2014年12月12~13日. ポスター発表, 審査有
10	※ <u>笠井淳司</u> 、 <u>勢力薫</u> 、 <u>丹生光咲</u> 、 <u>橋本岳</u> 、 <u>橋本均</u> . 高精細三次元定量的全脳解析法の構築：マイクロエンドフェのタイプの探索へ. 2014年度包括脳ネットワーク冬のシンポジウム, 東京, 2014年12月12~13日. ポスター発表, 審査有, <b>若手優秀発表賞受賞</b>
11	※ <u>橋本亮太</u> 、 <u>中澤敬信</u> 、 <u>今井啓雄</u> 、 <u>井上謙一</u> 、 <u>安田由華</u> 、 <u>山森英長</u> 、 <u>大井一高</u> 、 <u>松村憲佑</u> 、 <u>永安一樹</u> 、 <u>三浦健一郎</u> 、 <u>福永雅喜</u> 、 <u>高田昌彦</u> 、 <u>武田雅俊</u> 、 <u>橋本均</u> . ゲノム科学による霊長類脳の多様性の解明. 平成26年度 京都大学霊長類研究所共同利用研究会「霊長類脳科学の新しい展開とゲノム科学との融合」, 京都, 2015年3月13日~14日. 口頭発表, 審査無

12	※ <u>Hashimoto H.</u> International collaborative research focusing on the oxidative stress hypothesis for novel drug development in psychiatric diseases. 都医学研セミナー, 東京, 23/1/2015. 口頭発表(シンポジウム), 審査無
◎ 13	※ <u>Shintani N.</u> , <u>Hashimoto H.</u> , <u>Scorrano L.</u> Mitophagy and inhibition of mitochondrial fusion. Venetian Institute of Molecular Medicine 13 th Annual Retreat, Treviso, Italy, 6-7/2/2015. ポスター発表, 審査無
14	※勢力薫、 <u>笠井淳司</u> 、丹生光咲、山口瞬、橋本岳、※ <u>橋本均</u> 。高精細全脳形態計測システムの構築。第88回日本薬理学会年会、名古屋、2015年3月18～20日、口頭発表、審査無
15	※ <u>新谷紀人</u> 、 <u>橋本均</u> 、馬場明道。糖尿病豚島で発現減少する新規遺伝子—ミトコンドリア研究への招待。日本薬学会第135年会、神戸、2015年3月27日、口頭発表(シンポジウム)、審査無
16	※ <u>笠井淳司</u> 、勢力薫、丹生光咲、橋本岳、 <u>橋本均</u> 。高精細三次元定量的全脳解析システムの構築と脳内変化の検出。日本薬学会第135年会(神戸) 2015年3月25～28日、ポスター発表、審査有
17	※ <u>川瀬啓生</u> 、 <u>笠井淳司</u> 、小川純明、狭間啓佑、早田敦子、 <u>新谷紀人</u> 、馬場明道、 <u>橋本均</u> 。慢性的な社会的敗北ストレスによる内側前頭前皮質におけるPACAP発現低下とエビジェネティクス関連因子の発現変化。日本薬学会第135年会、神戸、2015年3月25～28日、ポスター発表、審査有
18	※ <u>梅木孝弘</u> 、東野功典、 <u>吾郷由希夫</u> 、 <u>田熊一徹</u> 、 <u>松田敏夫</u> 。プレパルスインヒビション障害に対するアルツハイマー病治療薬リバスチグミンの作用。第64回日本薬学会近畿支部総会・大会、京都、11/10/2014。口頭発表、審査無
19	※ <u>岡 智史</u> 、長谷部 茂、西山早紀、 <u>吾郷由希夫</u> 、 <u>田熊一徹</u> 、 <u>松田敏夫</u> 。抗うつ薬による長期隔離飼育マウスのエンカウンター誘発多動反応抑制の作用機序。第64回日本薬学会近畿支部総会・大会、京都、11/10/2014。口頭発表、審査無
20	※ <u>樽田淳樹</u> 、原雄大、高野恵利加、片芝圭亮、東野功典、前田優子、 <u>吾郷由希夫</u> 、 <u>田熊一徹</u> 、 <u>松田敏夫</u> 。胎仔期のバルプロ酸曝露は前頭前皮質でのドーパミン神経系の機能低下を引き起こす。第64回日本薬学会近畿支部総会・大会、京都、11/10/2014。口頭発表、審査無
21	※ <u>西山早紀</u> 、長谷部 茂、 <u>吾郷由希夫</u> 、 <u>岡 智史</u> 、 <u>田熊一徹</u> 、 <u>松田敏夫</u> 。長期隔離飼育マウスのうつ病モデルマウスとしての薬理学的有用性。第64回日本薬学会近畿支部総会・大会、京都、11/10/2014。ポスター発表、審査無
22	※ <u>渡部雄二</u> 、平松直樹、森 和也、 <u>吾郷由希夫</u> 、 <u>田熊一徹</u> 、 <u>松田敏夫</u> 。副腎・睾丸摘出によるフルボキサミン誘発前頭葉ドーパミン遊離促進に關与する $\sigma_1$ 受容体と5-HT <sub>1A</sub> 受容体の脳内局在。第64回日本薬学会近畿支部総会・大会、京都、11/10/2014。口頭発表、審査無
23	※ <u>難波佑貴</u> 、吉岡靖雄、森下裕貴、瀧村優也、清水雄貴、 <u>吾郷由希夫</u> 、 <u>田熊一徹</u> 、 <u>松田敏夫</u> 、 <u>角田慎一</u> 、東阪和馬、堤 康央。雄親曝露による非晶質ナノシリカの次世代影響評価。第87回日本生化学会大会、京都、15-18/10/2014。ポスター発表、審査有
24	※ <u>井上亜耶</u> 、河内琢也、 <u>吾郷由希夫</u> 、 <u>田熊一徹</u> 、 <u>松田敏夫</u> 。胎生期ヒストン脱アセチル化酵素阻害による神経細胞の成熟遅延。日本薬理学会近畿部会、和歌山、24/10/2014。口頭発表、審査無
25	※ <u>田中辰典</u> 、 <u>吾郷由希夫</u> 、井本絵実奈、 <u>田熊一徹</u> 、 <u>松田敏夫</u> 。精神刺激薬反復投与マウスのマウス間相互作用の異常。日本薬理学会近畿部会、和歌山、24/10/2014。口頭発表、審査無
26	※長谷部 茂、西山早紀、 <u>岡 智史</u> 、 <u>吾郷由希夫</u> 、 <u>田熊一徹</u> 、 <u>松田敏夫</u> 。隔離飼育マウスのエンカウンター誘発多動に対する抗うつ薬の多動抑制メカニズム。日本薬理学会近畿部会、和歌山、24/10/2014。口頭発表、審査無
◎ 27	※ <u>Makhijani VH</u> , <u>Condro MC</u> , <u>Ago Y</u> , <u>Tan YV</u> , <u>Tiwari-Woodruff SK</u> , <u>Waschek JA</u> . Potential neuroprotective effect of PAC1 signaling in experimental autoimmune encephalomyelitis. The 44th Annual Meeting of the Society for Neuroscience (Neuroscience 2014), Washington, D.C., USA, 15-19/11/2014. ポスター発表、審査有



28	※Tanaka T, <u>Ago Y</u> , Ota Y, Imoto E, Kitamoto M, <u>Takuma K</u> , <u>Matsuda T</u> . Rearing in overcrowded conditions in the night-time induces anxiolytic-like effects in adolescent mice. The 44th Annual Meeting of the Society for Neuroscience (Neuroscience 2014), Washington, D.C., USA, 15-19/11/2014. ポスター発表, 審査有
29	※Kawanai T, Watanabe R, Inoue A, <u>Ago Y</u> , <u>Takuma K</u> , <u>Matsuda T</u> . Prenatal exposure to histone deacetylase inhibitors delays neuronal maturation by regulating gene expression of morphogenesis-related molecules. The 44th Annual Meeting of the Society for Neuroscience (Neuroscience 2014), Washington, D.C., USA, 15-19/11/2014. ポスター発表, 審査有
30	※Higashino K, Kita Y, Asada K, Takano E, <u>Ago Y</u> , <u>Takuma K</u> , <u>Matsuda T</u> . Involvement of the ※Hasebe S, <u>Ago Y</u> , Nishiyama S, Oka S, Nakamori D, <u>Takuma K</u> , <u>Matsuda T</u> . Encounter stimulation-induced hyperactivity of social isolation-reared mice is attenuated by antidepressants. The 44th Annual Meeting of the Society for Neuroscience (Neuroscience 2014), Washington, D.C., USA, 15-19/11/2014. ポスター発表, 審査有
31	※Shirafuji T, Ueyama T, Yoshino K, Adachi N, Takahashi H, Hiramatsu N, <u>Ago Y</u> , <u>Matsuda T</u> , Toda T, Sakai N, Saito S. PKC $\gamma$ KO Parkinsonian syndrome model: The role of $\beta$ PIX phosphorylation at Ser340 and Ser583 in dopamine release. The 44th Annual Meeting of the Society for Neuroscience (Neuroscience 2014), Washington, D.C., USA, 15-19/11/2014. ポスター発表, 審査有
32	※平松直樹, 渡部雄二, 森 和也, 吾郷由希夫, 田熊一徹, 松田敏夫. セロトニン <sub>1A</sub> 受容体、 $\sigma_1$ 受容体相互作用による大脳皮質ドーパミン遊離促進のGABA <sub>A</sub> 受容体による抑制的制御. 第24回日本臨床精神神経薬理学会・第44回日本神経精神薬理学会合同年会, 名古屋, 20-22/11/2014. ポスター発表, 審査有
33	※原 雄大, 高野恵利加, 片芝圭亮, 樽田 淳樹, 東野功典, 前田優子, 吾郷由希夫, 田熊一徹, 松田敏夫. 胎仔期バルプロ酸曝露マウスの前頭葉ドーパミン神経系異常. 第24回日本臨床精神神経薬理学会・第44回日本神経精神薬理学会合同年会, 名古屋, 20-22/11/2014. 口頭発表, 審査有
◎ 34	※Makhijani VH, Condro MC, <u>Ago Y</u> , Tan YV, Tiwari-Woodruff SK, <u>Waschek JA</u> . Potential neuroprotective effect of PAC1 signaling in experimental autoimmune encephalomyelitis. The 26th Annual Neuroscience Poster Session of the UCLA Brain Research Institute, Los Angeles, USA, 2/12/2014. ポスター発表, 審査無
35	※吾郷由希夫, 長谷部 茂, 西山早紀, 岡 智史, 尾中勇祐, 田熊一徹, 松田敏夫. 雌選択性試験: マウス間相互作用を基盤とした新規意欲評価系. 第88回日本薬理学会年会, 名古屋, 18-20/3/2015. 口頭発表, 審査有
36	※田熊一徹, 吾郷由希夫, 尾中勇祐, 松田敏夫. 発達障害と前頭皮質機能異常. 第88回日本薬理学会年会, 名古屋, 18-20/3/2015. 口頭発表, 審査有
37	※長谷部 茂, 吾郷由希夫, 西山早紀, 岡 智史, 田熊一徹, 松田敏夫. 長期隔離飼育マウスのエンカウンター異常反応の神経薬理的解析. 日本薬学会第135年会, 神戸, 25-28/3/2015. 口頭発表, 審査有
38	※田熊一徹, 吾郷由希夫, 松田敏夫. 一酸化窒素誘発細胞障害におけるNCXの病態的意義. 日本薬学会第135年会, 神戸, 25-28/3/2015. 口頭発表, 審査有
39	※河内琢也, 渡部 遼, 井上亜耶, 吾郷由希夫, 松田敏夫, 田熊一徹. ヒストン脱アセチル化酵素阻害薬の胎生期曝露は神経細胞の成熟を抑制する. 日本薬学会第135年会, 神戸, 25-28/3/2015. 口頭発表, 審査有
40	※田中辰典, 太田友樹, 長谷部 茂, 吾郷由希夫, 田熊一徹, 松田敏夫. 夜間拘束ストレスの抗不安様作用. 日本薬学会第135年会, 神戸, 2015年3月25-28日. 日本薬学会第135年会, 神戸, 25-28/3/2015. 口頭発表, 審査有
41	※長谷部 茂, 岡 智史, 西山早紀, 吾郷由希夫, 田熊一徹, 松田敏夫. 長期隔離飼育マウスのエンカウンター誘発多動反応のADHD治療薬による抑制. 日本薬学会第135年会, 神戸, 25-28/3/2015. ポスター発表, 審査有
42	※原 雄大, 高野恵利加, 片芝圭亮, 樽田 淳樹, 東野功典, 吾郷由希夫, 松田敏夫, 田熊一徹. 胎仔期バルプロ酸曝露は雄性マウス前頭皮質のドーパミン神経機能を低下させる. 日本薬学会第135年会, 神戸, 25-28/3/2015. 口頭発表, 審査有

43	※東野功典, 梅木孝弘, <u>吾郷由希夫</u> , <u>田熊一徹</u> , <u>松田敏夫</u> . アルツハイマー病治療薬リバスチグミンの長期隔離飼育誘発感覚情報処理障害に対する作用. 日本薬学会第135年会, 25-28/3/2015. 口頭発表, 審査有
44	※前田優子, 山口浩史, 中川 光, 福山留以. 高野恵利加, <u>橋本 均</u> , <u>吾郷由希夫</u> , <u>松田敏夫</u> , <u>田熊一徹</u> . 環境強化による PACAP 遺伝子欠損マウスの異常行動改善作用における輪回し運動の役割. 日本薬学会第135年会, 神戸, 25-28/3/2015. ポスター発表, 審査有
45	※渡部雄二, 平松直樹, 森 和也, <u>吾郷由希夫</u> , <u>田熊一徹</u> , <u>松田敏夫</u> . GABA <sub>A</sub> 受容体はσ <sub>1</sub> 受容体、5-HT <sub>1A</sub> 受容体相互作用による大脳皮質ドーパミン遊離を調節する. 日本薬学会第135年会, 神戸, 25-28/3/2015. ポスター発表, 審査有
46	※難波佑貴, 吉岡靖雄, 森下裕貴, 瀧村優也, 清水雄貴, <u>吾郷由希夫</u> , <u>田熊一徹</u> , <u>松田敏夫</u> , 角田慎一, 東阪和馬, 堤 康央. 雄親曝露に着目した非晶質ナノシリカの次世代影響評価. 日本薬学会第135年会, 神戸, 25-28/3/2015. 口頭発表, 審査有
47	※宮武祐樹, 谷口 学, <u>松崎伸介</u> , 遠山正彌, 眞部孝幸, <u>片山泰一</u> . 精神疾患リスク分子 Discl 新規 splice variant ΔE2 は発現局在・時期が Full Length と異なる. 第41回日本脳科学学会大会 2014年11月22日 福井, 審査有
48	※三好 耕, <u>松崎伸介</u> , 宮崎育子, 浅沼幹人, <u>片山泰一</u> . ドパミン欠乏による線条体ニューロンの1次繊毛の伸長, 第41回日本脳科学学会大会 2014年11月23日 福井, 口頭発表, 審査有
49	※ <u>松崎伸介</u> , 三好 耕, 森 泰丈, <u>片山泰一</u> . アルギニンメチル化が及ぼす細胞内オルガネラへの影響. 第41回日本脳科学学会大会 2014年11月23日 福井, 口頭発表, 審査有
50	※Y. Miyatake, M. Taniguchi, <u>S. Matsuzaki</u> , M. Tohyama, T. Manabe, <u>T. Katayama</u> . The expression and the intracellular localization of ΔE2 which is novel splice variant of Disrupted-In-Schizophrenia 1 (DISC1). 米国国際細胞生物学会2014 (ASCB2014) 12月8日 フィラデルフィア, ポスター発表, 審査有
51	※ <u>Matsuzaki S</u> . International collaborative research focusing on the oxidative stress hypothesis for novel drug development in psychiatric diseases. 都医学研セミナー, 東京, 23/1/2015. 口頭発表, 審査無
52	※ <u>松崎伸介</u> , 森泰丈, <u>高村明孝</u> , 三好耕, <u>片山泰一</u> . Effects of arginine methylation via PRMT1 on Golgi body. 第120回日本解剖学会総会全国学術集会・第92回日本生理学会大会, 神戸, 3/21-23/2015 ポスター発表, 審査有
53	※ <u>新井誠</u> , 宮下光弘, 小堀晶子, 堀内泰江, <u>鳥海和也</u> , 畠山幸子, <u>糸川昌成</u> . 統合失調症における終末糖化産物の臨床的意義に関する研究. 第19回日本神経精神医学会, つくば, 1/10/2014, 口頭発表, 審査有
54	※ <u>新井誠</u> , 宮下光弘, 堀内泰江, <u>鳥海和也</u> , 小堀晶子, 畠山幸子, Naila Rabbani, Paul J Thornalley, <u>糸川昌成</u> . 細胞培養株を用いた統合失調症のカルボニルストレス回避のための研究. 第87回日本生化学学会, 京都, 16/10/2014, ポスター発表, 審査有
55	※ <u>新井誠</u> , 宮下光弘, 小堀晶子, 堀内泰江, <u>鳥海和也</u> , 畠山幸子, Naila Rabbani, Paul J Thornalley, <u>糸川昌成</u> . 統合失調症における終末糖化産物蓄積を早期に予防するための研究. 第18回日本精神保健・予防学会, 東京, 15/11/2014, 口頭発表, 審査有
○ 56	※ <u>Makoto Arai</u> , Mitsuhiro Miyashita, Akiko Kobori, <u>Kazuya Toriumi</u> , Yasue Horiuchi, Naila Rabbani, Paul J Thornalley, <u>Masanari Itokawa</u> . Research on dicarbonyl accumulation and AGEs formation in schizophrenia. 9th International Conference on Early Psychosis – To the New Horizon, Tokyo, 18/11/2014, ポスター発表, 審査有
57	※A Kobori, M Miyashita, S Hatakeyama, <u>K. Toriumi</u> , <u>M Arai</u> , H Arai, <u>M Itokawa</u> . Association study of cognitive impairment with carbonyl stress in schizophrenia patients. 9th International Conference on Early Psychosis – To the New Horizon, Tokyo, 18/11/2014, ポスター発表, 審査有

58	※ <u>Kazuya Toriumi</u> , Mitsuhiro Miyashita, Tomoe Ichikawa, Mayumi Arai, Izumi Nohara, Nanako Obata, Akiko Kobori, Yasue Horiuchi, <u>Makoto Arai</u> , <u>Masanari Itokawa</u> . Telomere shortening in the hippocampus is associated with negative symptom-like behavioral deficits and cognitive impairment in schizophrenia. 第24回日本臨床精神神経薬理学会・第44回日本神経精神薬理学会 合同年会, 名古屋, 21/11/2014, ポスター発表, 審査有
59	※ <u>新井誠</u> , 宮下光弘, 小堀晶子, 堀内泰江, <u>鳥海和也</u> , 畠山幸子, 内田 美樹, 井上 智子, <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の代謝障害としてのカルボニルストレスとその予防法に関する研究. 第14回世田谷医師会医学会, 東京, 6/12/2014, ポスター発表, 審査有
60	※ <u>片山泰一</u> . 発達障がいに関する最近の知見について, 平成26年度発達障がい専門医師養成研修, 大阪, 2014年11月9日. 口頭発表(普及活動), 審査無
61	※ <u>片山泰一</u> . 「我が国における発達障害の現状と課題」ー障害者差別解消法施行前に企業が考えるべきことー, 大阪大学経済人会, 2015年1月14日. 口頭発表(普及活動), 審査無
62	※ <u>糸川昌成</u> . 脳と心-25年の統合失調症研究から見えてきたもの, 都立墨東病院神経科集談会, 東京, 2/10/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
63	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の原因解明に挑むー臨床家がなぜ研究をするのか, 第20回千駄木精神医学研究会, 東京, 6/10/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
64	※ <u>糸川昌成</u> . 活性化ビタミンB6を用いた統合失調症の新規治療薬開発, BioJapan2014, 横浜, 15/10/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
65	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の原因解明に挑むー臨床家がなぜ研究をするのか, 第13回多摩Schizophrenia研究会, 東京 23/10/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
66	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の解明に取り組んだ25年で見えてきたもの, 記念講演会 in 神戸第2部 Recovery, 神戸 25/10/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
67	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の原因解明に挑むー臨床家がなぜ研究をするのか, 第19回翠会ヘルスケアグループ地域精神保健学会, 東京, 7/11/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
68	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の原因解明に挑むー臨床家がなぜ研究をするのか, 平成26年甲州・東海ブロック家族会, 精神保健福祉促進研修会愛知大会, 蒲郡, 13/11/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
69	※ <u>糸川昌成</u> . 精神科医として、研究者として、子供として, 第4回 都医学研シンポジウム, 東京, 14/11/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
70	※ <u>糸川昌成</u> . 健やかな心と脳-科学者が見た心の健康と医学, 町田さるびあ会, 東京, 20/11/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
71	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の原因解明に挑むー臨床家がなぜ研究をするのか, よもぎ会, 静岡, 20/11/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
72	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の原因解明に挑むー臨床家がなぜ研究をするのか, 中信地区精神科治療講演会, 松本, 5/12/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
73	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の原因解明に挑むー臨床家がなぜ研究をするのか, 武蔵野市第二金曜会, 東京, 13/12/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
74	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の解明に挑むー臨床家がなぜ研究をするのか, オアシス家族会, 千葉, 20/12/2014, 口頭発表(普及活動), 審査無
75	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の解明に挑むー臨床家がなぜ研究をするのか, 第3回ニューロカンファレンス和歌山, 和歌山, 10/1/2015, 口頭発表(普及活動), 審査無
76	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症の解明に挑むー臨床家がなぜ研究するのか. 第194回東大いちよの会, 東京, 15/2/2015, 口頭発表(普及活動), 審査無
77	※ <u>糸川昌成</u> . 脳と心ーなぜ研究がいのちをもてなすのか, 松沢病院リハビリテーション科研修, 東京, 19/2/2015, 口頭発表(普及活動), 審査無

78	※ <u>糸川昌成</u> ，統合失調症の解明に挑むー臨床家がなぜ研究するのか，精神保健学級第1回，東京，19/2/2015，口頭発表（普及活動），審査無
79	※ <u>橋本均</u> ，CINP CNS Drug Innovation Summit, CINP CNS Drug Innovation Summit, 2015年4月21日～4月22日，東京，指定討論者（口頭発表），審査有
80	※ <u>神戸悠輝</u> ， <u>中島優</u> ， <u>新谷紀人</u> ， <u>橋本均</u> ， <u>宮田篤郎</u> ，下垂体アデニル酸シクラーゼ活性化ポリペプチドによる脳内グリコーゲン代謝の活性化，第12回GPCR研究会，2015年5月15日～5月16日，東京，ポスター発表，審査有
81	※ <u>前田優子</u> ， <u>山口浩史</u> ， <u>中川光</u> ， <u>福山留以</u> ， <u>高野恵利加</u> ， <u>吾郷由希夫</u> ， <u>松田敏夫</u> ， <u>橋本均</u> ， <u>田熊一敏</u> ，豊かな環境飼育によるPACAP遺伝子欠損マウスの学習記憶障害改善作用の自発的運動非依存性．第127回日本薬理学会近畿部会．2015年6月26日，岐阜，口頭発表，審査無
82	※ <u>尾中勇祐</u> ， <u>木野村元彦</u> ， <u>新谷紀人</u> ， <u>平井博之</u> ， <u>永田欽也</u> ， <u>中村正孝</u> ， <u>長谷部茂</u> ， <u>永安一樹</u> ， <u>吾郷由希夫</u> ， <u>笠井淳司</u> ， <u>早田敦子</u> ， <u>中澤敬信</u> ， <u>田熊一敏</u> ， <u>松田敏夫</u> ， <u>馬場明道</u> ， <u>橋本均</u> ．がん治療後の脳機能障害の解明に有用な動物モデルの作製．第127回日本薬理学会近畿部会．2015年6月26日，岐阜，口頭発表，審査無
83	◎ ※ <u>Shintani N</u> ， <u>Hashimoto H</u> ， <u>Scorrano L</u> ，Mitophagy and inhibition of mitochondrial fusion. Venetian Institute of Molecular Medicine 13th Annual Retreat, 2015年2月6日～2月7日，イタリア，ポスター発表，審査無
84	※ <u>勢力薫</u> ， <u>笠井淳司</u> ， <u>丹生光咲</u> ， <u>山口瞬</u> ， <u>橋本岳</u> ， <u>中澤敬信</u> ， <u>橋本均</u> ，構造および神経活動の変化を定量的に検出する高精細三次元全脳形態計測システム，第38回日本神経科学大会，2015年7月28日～7月31日，兵庫，ポスター発表，審査有
85	※ <u>松村憲佑</u> ， <u>橋本亮太</u> ， <u>中澤敬信</u> ， <u>鶴崎美德</u> ， <u>安田由華</u> ， <u>永安一樹</u> ， <u>川島和</u> ， <u>山森英長</u> ， <u>藤本美智子</u> ， <u>大井一高</u> ， <u>梅田知美</u> ， <u>福永雅喜</u> ， <u>藤野陽生</u> ， <u>笠井淳司</u> ， <u>早田敦子</u> ， <u>新谷紀人</u> ， <u>武田雅俊</u> ， <u>松本直通</u> ， <u>橋本均</u> ．自閉症の疾患特異的候補遺伝子の機能的スクリーニング．第38回日本神経科学大会．2015年7月28日～7月31日，兵庫，口頭発表，審査有
86	※ <u>Kasai A</u> ，The emerging potential of the apelin/APJ system in angiogenic eye diseases, VIMM seminar, 2015年5月26日，Padova, Italy. 招待講演（口頭発表），審査有
87	※ <u>難波佑貴</u> ， <u>吉岡靖雄</u> ， <u>森下裕貴</u> ， <u>瀧村優也</u> ， <u>清水雄貴</u> ， <u>吾郷由希夫</u> ， <u>田熊一敏</u> ， <u>松田敏夫</u> ， <u>東阪和馬</u> ， <u>堤康央</u> ．ナノマテリアルの雄親曝露による次世代影響評価．第42回日本毒性学会学術年会，2015年6月29日～7月1日，金沢，口頭発表，審査有
88	※ <u>長谷部茂</u> ， <u>岡智史</u> ， <u>尾中勇祐</u> ， <u>橋本均</u> ， <u>松田敏夫</u> ， <u>吾郷由希夫</u> ， <u>田熊一敏</u> ．雌選択性試験：マウス間相互作用を基盤とした新規うつ様行動評価系．第38回日本神経科学大会．2015年7月28日～7月31日，兵庫，ポスター発表，審査有
89	※ <u>田中辰典</u> ， <u>太田友樹</u> ， <u>大住康晃</u> ， <u>長谷部茂</u> ， <u>尾中勇祐</u> ， <u>橋本均</u> ， <u>松田敏夫</u> ， <u>田熊一敏</u> ， <u>吾郷由希夫</u> ．マウス活動期における拘束ストレスは抗不安作用を示す．第38回日本神経科学大会．2015年7月28日～7月31日，兵庫，ポスター発表，審査有
90	※ <u>東野功典</u> ， <u>梅木孝弘</u> ， <u>尾中勇祐</u> ， <u>橋本均</u> ， <u>松田敏夫</u> ， <u>田熊一敏</u> ， <u>吾郷由希夫</u> ．リバスチグミンのムスカリン受容体を介したプレバルスインヒビション障害改善作用．第38回日本神経科学大会．2015年7月28日～7月31日，兵庫，ポスター発表，審査有
91	◎ ※ <u>Takamura H</u> ， <u>Yamada K</u> ， <u>Matsuzaki S</u> ， <u>Hazrati L</u> ， <u>Katayama T</u> ， <u>Fraser PE</u> ，SUMOylation affects Tau accumulation in neurodegenerative diseases. 第38回日本神経科学大会．2015年7月28日～7月31日，兵庫，ポスター発表，審査有
92	※ <u>毛利育子</u> ， <u>橋雅弥</u> ， <u>早田敦子</u> ， <u>橋本均</u> ， <u>谷池雅子</u> ，自閉症脳における prostaglandin D2の関与．第16回Origin神経科学研究会，2015年8月28日～8月29日，福岡，口頭発表，審査有
93	※ <u>丹生光咲</u> ， <u>笠井淳司</u> ， <u>勢力薫</u> ， <u>山口瞬</u> ， <u>橋本岳</u> ， <u>中澤敬信</u> ， <u>橋本均</u> ，ストレスにより活性化する神経細胞の全脳マッピングと定量的解析，次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2015，2015年8月29日，東京，口頭発表，審査有
94	※ <u>長谷部茂</u> ， <u>吾郷由希夫</u> ， <u>岡智史</u> ， <u>尾中勇祐</u> ， <u>橋本均</u> ， <u>松田敏夫</u> ， <u>田熊一敏</u> ．性的活動性を利用した新規意欲評価系の開発．第58回日本神経化学大会，2015年9月11日～9月13日，埼玉，ポスター発表，審査有

95	※原雄大, 樽田淳樹, 片芝圭亮, 樋口桃子, 東野功典, <u>橋本均</u> , 松田敏夫, <u>吾郷由希夫</u> , <u>田熊一徹</u> . 前頭前皮質ドパミン神経系の活性化による胎仔期バルプロ酸曝露マウス行動異常の改善. 第58回 日本神経化学大会, 2015年9月11日~9月13日, 埼玉, ポスター発表, 審査有
96	※Kambe Y, Nakashima Y, <u>Shintani N</u> , <u>Hashimoto H</u> , Miyata A. Potent induction of glycogen metabolism by pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide on cultured astrocytes. 第58回 日本神経化学大会, 2015年9月11日~9月13日, 埼玉, ポスター発表, 審査有
◎ 97	※ <u>Ago Y</u> , <u>Hayata A</u> , Kawanai T, <u>Hashimoto H</u> , Waschek JA. Overactivation of the VPAC2 receptor during postnatal brain maturation induces changes in synaptic proteins and selective alterations in prepulse inhibition in mice. 第58回 日本神経化学大会, 2015年9月11日~9月13日, 埼玉, ポスター発表, 審査有
98	※Kambe Y, Nakashima Y, Tuong NM, Kurihara T, <u>Shintani N</u> , <u>Hashimoto H</u> , Miyata A. Decreased appetite in pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide-null mice. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日~9月26日, トルコ, 口頭発表(シンポジウム), 審査有
◎ 99	※ <u>Ago Y</u> , Condro MC, Tan YV, <u>Hayata A</u> , Kawanai T, Cushman JD, Fanselow MS, <u>Hashimoto H</u> , <u>Waschek JA</u> . Overactivation of the VPAC2 receptor during postnatal brain development causes prefrontal synaptic abnormalities and cognitive dysfunction in mice. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日~9月26日, トルコ, 口頭発表(シンポジウム), 審査有
◎ 100	※ <u>Waschek JA</u> , Condro MC, Matynia A, <u>Ago Y</u> , Rajbhandari AK, Van C, Jayaram B. High resolution characterization of a PACAP-EGFP transgenic mouse model: Mapping the circuitry of PACAP-expressing neurons, 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日~9月26日, トルコ, 口頭発表(シンポジウム), 審査有
◎ 101	※ <u>Hashimoto H</u> , <u>Shintani N</u> , <u>Ago Y</u> , <u>Hayata-Takano A</u> , <u>Waschek JA</u> , Baba A. Roles of PACAP in depression-like behavior. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日~9月26日, トルコ, 口頭発表(シンポジウム), 審査有
○ 102	Heleys Z, Kun J, Dobrosi N, Nemeth J, Perkecz A, Szabadfi K, Pinter E, Gaszner B, Tekus V, Szolcsanyi J, Ateinhoff M, <u>Hashimoto H</u> , Reglodi D, Biro T. PACAP is up-regulated in the skin by transient receptor potential vanilloid 1 ion channel activation and induces inflammation. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日~9月26日, トルコ, 口頭発表, 審査有
○ 103	Farkas J, Kovacs L, Gaszner T, <u>Hashimoto H</u> , Balogh A, Reglodi D, Gaszner B. PACAP heterozygous mice in the three it theory model of depression. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日~9月26日, トルコ, 口頭発表, 審査有
○ 104	Ohtaki H, Xu Z, Watanabe J, Hiraizumi Y, <u>Hashimoto H</u> , Numazawa S, Shioda S. PACAP contributes to proliferation of hematopoietic stem/progenitor cells in murine bone Marrow. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日~9月26日, トルコ, 口頭発表, 審査有
○ 105	Vaczy A, Lokos E, Atlasz T, Maasz G, Schmidt J, Mark L, Kvarik T, Werling D, Fulop B, Tamas A, Kocsis B, <u>Hashimoto H</u> , Reglodi D. Proteome analysis of tears wild type and PACAP-deficient mice. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日~9月26日, トルコ, ポスター発表, 審査有
○ 106	Sandor B, Fintor K, Kiss P, Nagy P, Heleys Z, Fedor F, Acs P, Nagy A, Reglodi D, Fulop B, <u>Hashimoto H</u> , Tamas A. Structural, morphometric and mechanical differences between the incisor teeth of adult wild type and PACAP-deficient mice. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日~9月26日, トルコ, ポスター発表, 審査有
○ 107	Fulop BD, Csaszar A, Reglodi D, Heleys Z, Gaszner B, <u>Hashimoto H</u> , Tamas A. Protective effects of pituitary adenylate cyclase activating polypeptide (PACAP) in mouse hind-limb ischemia. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日~9月26日, トルコ, ポスター発表, 審査有

○ 108	Fulop BD, Humli V, Tamas A, Nemeth A, Reglodi D, <u>Hashimoto H</u> , Zelles T. Hearing impairment in pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide (PACAP) deficient mice. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日～9月26日, トルコ, ポスター発表, 審査有
○ 109	Reglodi D, Ivic I, Vamos Z, Tamas A, Fulop BD, Toth G, <u>Hashimoto H</u> , Koller A. Adaptation of molecular signaling eliciting vasorelaxation motor responses are altered in PACAP deficient mice. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日～9月26日, トルコ, ポスター発表, 審査有
○ 110	Jozsa G, Juhasz T, Zakany R, Fulop B, Helyes Z, Kiss T, Tamas A, <u>Hashimoto H</u> , Reglodi D. Callus formation is disturbed in PACAP (Pituitary Adenylate Cyclase Activating Peptide) KO mice. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日～9月26日, トルコ, ポスター発表, 審査有
○ 111	Kovacs L, Farkas J, Reglodi D, <u>Hashimoto H</u> , Kormos V, Gaszner B. Extra-hypothalamic corticotropin releasing factor systems in the three hit theory model of depression in mice. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日～9月26日, トルコ, ポスター発表, 審査有
○ 112	Atlasz T, Vaczy A, Kovacs K, Lokos E, Kvarik T, Werling D, Kocsis B, Fulop B, Tamas A, <u>Hashimoto H</u> , Reglodi D. The protective role of the endogenous PACAP in LPS-induced inflammation in the retina. 12th International Symposium on VIP/PACAP and Related Peptides. 2015年9月21日～9月26日, トルコ, ポスター発表, 審査有
113	※長谷部茂, 吾郷由希夫, 岡智史, 尾中勇祐, 橋本均, 松田敏夫, 田熊一敬. 雌雄エンカウンター刺激を用いた新規マウス意欲評価系. 第45回日本神経精神薬理学会, 2015年9月24日～9月26日, 東京, ポスター発表, 審査有
114	※東野功典, 吾郷由希夫, 梅木孝弘, 尾中勇祐, 橋本均, 田熊一敬, 松田敏夫. リバスタチグミンによる隔離飼育誘発感覚情報処理障害の改善作用におけるムスカリン受容体の関与. 第45回日本神経精神薬理学会, 2015年9月24日～9月26日, 東京, ポスター発表, 審査有
115	※加茂俊彦, 早田敦子, 勢力薫, 尾形勝弥, 中澤敬信, 永安一樹, 笠井淳司, 新谷紀人, 橋本均. miRNAを介したPACAPによる樹状突起スパイン形成機構. 第45回日本神経精神薬理学会, 2015年9月24日～9月26日, 東京, ポスター発表, 審査有
116	※難波佑貴, 吉岡靖雄, 森下裕貴, 清水雄貴, 吾郷由希夫, 田熊一敬, 松田敏夫, 長野一也, 東阪和馬, 堤康央. 雄親曝露に着目したナノマテリアルの次世代影響評価. 第65回日本薬学会近畿支部総会・大会, 2015年10月17日, 大阪, 口頭発表, 審査有
117	※ <u>Arai Makoto</u> , Horiuchi Y, Kobori A, Miyashita M, <u>Toriumi K</u> , Hatakeyama S, <u>Itokawa M</u> , <u>Hashimoto H</u> . Pentosidine accumulation in the pathophysiology of schizophrenia. 45th Society for Neuroscience Annual meeting (Neuroscience2015). 2015年10月17日～10月21日, U.S.A., 口頭発表, 審査有
118	※ <u>Toriumi K</u> , Miyashita M, Ichikawa T, Kobori A, Horiuchi Y, Arai Mayumi, Nohara I, Obata N, <u>Hashimoto H</u> , <u>Itokawa M</u> , <u>Arai Makoto</u> . Hippocampal telomere shortening is associated with the negative symptoms and the cognitive impairment of schizophrenia. 45th Society for Neuroscience Annual meeting (Neuroscience2015). 2015年10月17日～10月21日, U.S.A., ポスター発表, 審査有
119	※Seiriki K, <u>Kasai A</u> , Hashimoto T, Schulze W, Niu M, <u>Nakazawa T</u> , <u>Hashimoto H</u> . A new block-face serial microscopy tomography for computational mapping of brain cells, and unbiased comparative analysis. 45th Society for Neuroscience Annual meeting (Neuroscience2015). 2015年10月17日～10月21日, U.S.A., ポスター発表, 審査有
120	※ <u>Kasai A</u> , Kakihara S, Okada R, Hazama K, <u>Nakazawa T</u> , <u>Nagayasu K</u> , <u>Hayata-Takano A</u> , <u>Shintani N</u> , <u>Hashimoto H</u> . Practical optimization of in situ hybridization procedure for the detection of microRNAs and mRNA expression in brain tissues. 45th Society for Neuroscience Annual meeting (Neuroscience2015). 2015年10月17日～10月21日, U.S.A., ポスター発表, 審査有

121	※原雄大, <u>吾郷由希夫</u> , 樽田淳樹, 片芝圭亮, 樋口桃子, 長谷部 茂, <u>尾中勇祐</u> , <u>橋本均</u> , 松田敏夫, <u>田熊一徹</u> . 注意欠陥多動性障害治療薬による前頭葉ドパミン神経系活性化を介した胎仔期バルプロ酸曝露マウスの行動異常の改善. 第128回日本薬理学会近畿部会, 2015年11月20日, 大阪, 口頭発表, 審査無
122	※田中辰典, <u>吾郷由希夫</u> , 梅原千晶, <u>尾中勇祐</u> , <u>橋本均</u> , <u>田熊一徹</u> , 松田敏夫. メタンフェタミン反復投与マウスの精神的ストレスによる多動反応の神経化学的基盤. 第128回日本薬理学会近畿部会, 2015年11月20日, 大阪, 口頭発表, 審査無
123	※大住康晃, <u>永安一樹</u> , <u>笠井淳司</u> , 木本早紀, <u>尾中勇祐</u> , <u>早田敦子</u> , <u>中澤敬信</u> , <u>新谷紀人</u> , <u>橋本均</u> . セロトニン神経機能に関わる遺伝子発現に対するmiRNAの作用. 第128回日本薬理学会近畿部会, 2015年11月20日, 大阪, 口頭発表, 審査無
124	※長谷部茂, <u>吾郷由希夫</u> , 岡智史, 渡部雄二, <u>尾中勇祐</u> , <u>橋本均</u> , <u>田熊一徹</u> , 松田敏夫. エンカウンター刺激を利用した新規マウス意欲評価試験の開発. 第128回日本薬理学会近畿部会, 2015年11月20日, 大阪, 口頭発表, 審査無
125	※ <u>橋本均</u> , <u>笠井淳司</u> , 勢力薫, 丹生光咲, <u>中澤敬信</u> . 脳病態を解明するモデル動物の全脳イメージング. 第6回脳表現型の分子メカニズム研究会, 第10回IGC, 第6回COCORO合同会議. 2015年11月14日~11月15日, 東京, 口頭発表, 審査無
126	※ <u>田熊一徹</u> , <u>吾郷由希夫</u> , 長谷部 茂, <u>橋本均</u> , 松田敏夫. 発育期の環境要因が精神・神経機能に及ぼす影響. 第89回日本薬理学会年会, 2016年3月9日~3月11日, 神奈川, 口頭発表(シンポジウム), 審査有
127	※河内琢也, <u>吾郷由希夫</u> , 井上亜耶, 山内良介, <u>尾中勇祐</u> , <u>橋本均</u> , 松田敏夫, <u>田熊一徹</u> . トリコスタチンA胎仔期曝露の大脳皮質由来初代培養神経細胞の成熟およびneuroigin-1発現に対する作用. 第89回日本薬理学会年会, 2016年3月9日~3月11日, 神奈川, ポスター発表, 審査有.
◎ 128	※ <u>吾郷由希夫</u> , <u>Condro Michael</u> , <u>早田敦子</u> , 河内琢也, <u>橋本均</u> , <u>Waschek JA</u> . 成熟雄性マウスの行動表現型ならびにシナプス関連蛋白質発現に対する新生仔期VPAC2受容体活性化の影響. 第89回日本薬理学会年会, 2016年3月9日~3月11日, 神奈川, ポスター発表, 審査有
129	※長谷部茂, <u>吾郷由希夫</u> , 岡智史, 渡部雄二, <u>尾中勇祐</u> , <u>橋本均</u> , <u>田熊一徹</u> , 松田敏夫. 5-HT <sub>1A</sub> とσ <sub>1</sub> 受容体共活性化による前頭葉ドパミン神経調節の薬理的意義. 第89回日本薬理学会年会, 2016年3月9日~3月11日, 神奈川, 口頭発表, 審査有
130	※原雄大, <u>吾郷由希夫</u> , 片芝圭亮, 樽田淳樹, 樋口桃子, <u>尾中勇祐</u> , <u>橋本均</u> , 松田敏夫, <u>田熊一徹</u> . 胎仔期のヒストン脱アセチル化酵素阻害薬曝露による雄性マウス生育後の情動行動、脳組織形態への影響. 第89回日本薬理学会年会, 2016年3月9日~3月11日, 神奈川, ポスター発表, 審査有
◎ 131	※ <u>吾郷由希夫</u> , <u>Michael Condro</u> , <u>早田敦子</u> , 河内琢也, <u>橋本均</u> , <u>James Waschek</u> . マウス新生仔期VPAC2受容体活性化による感覚情報処理機能の障害. 日本薬学会第136年会, 2016年3月26日~3月29日, 神奈川, ポスター発表, 審査有
132	※田中辰典, <u>吾郷由希夫</u> , 梅原千晶, <u>尾中勇祐</u> , <u>橋本均</u> , <u>田熊一徹</u> , 松田敏夫. マウスエンカウンター試験を用いた覚せい剤精神病のストレス再燃の解析. 日本薬学会第136年会, 2016年3月26日~3月29日, 神奈川, ポスター発表, 審査有
133	※長谷部茂, <u>吾郷由希夫</u> , 岡智史, 渡部雄二, <u>尾中勇祐</u> , <u>橋本均</u> , <u>田熊一徹</u> , 松田敏夫. 5-HT <sub>1A</sub> 受容体とσ <sub>1</sub> 受容体の共活性化によるピクトキシン誘発意欲低下の改善. 日本薬学会第136年会, 2016年3月26日~3月29日, 神奈川, ポスター発表, 審査有
◎ 134	※ <u>Matsuzaki S</u> , <u>Takamura H</u> , <u>Katayama T</u> , <u>Fraser P</u> . SUMOylation Pathways in Synaptic Development and Neurodegeneration. 第89回日本薬理学会年会, 神奈川, 2016年3月9日~11日, 口頭発表(シンポジウム), 審査有
135	※ <u>Inoue N</u> , <u>Shintani N</u> , <u>Hashimoto H</u> . Functional role of a novel protein inhibiting mitochondrial fusion. 第89回日本薬理学会年会, 神奈川, 2016年3月9日~11日, 口頭発表(シンポジウム), 審査有

136	※Saika F, Kiguchi N, <u>Matsuzaki S</u> , Kishioka S. Peripheral a4b2 nicotinic acetylcholine receptor agonist attenuates macrophage induced neuroinflammation and neuropathic pain. 第 89 回日本薬理学会年会, 神奈川, 2016 年 3 月 9 日～11 日, ポスター発表, 審査有
137	※雑賀史浩、木口倫一、 <u>松崎伸介</u> 、岸岡史郎, マウス坐骨神経部分結紮誘発神経障害性疼痛における MMP-12 の関与, 第 4 回ニューロカンファレンス和歌山, 和歌山, 2016 年 1 月 9 日, 口頭発表, 審査無
138	※天野元揮、 <u>松崎伸介</u> 、向井春香、佐藤大樹、 <u>高村明孝</u> 、韓薩日娜、三好 耕、 <u>片山泰一</u> . ゴルジ体の形態維持におけるアルギニンメチル化酵素 1 (PRMT1) の働き, 第 10 回小胞体ストレス研究会, 兵庫, 2015 年 11 月 29 日～30 日, ポスター発表, 審査有
139	※雑賀史浩、氏家悠佳、木口倫一、 <u>松崎伸介</u> 、岸岡史郎, 神経障害性疼痛に及ぼす MMP12 の影響, 第 128 回日本薬理学会近畿部会, 大阪, 2015 年 11 月 20 日, 口頭発表, 審査無
140	※ <u>岩田圭子</u> 、 <u>松崎秀夫</u> 、立花太郎、中村和彦、 <u>片山泰一</u> 、森 則夫. 新規 SERT 制御因子としての NSF～自閉症発症メカニズムへの関与～, 第 42 回日本脳科学会, 宮崎, 2015 年 11 月 12 日～13 日, ポスター発表, 審査有
◎ 141	※ <u>松崎伸介</u> 、天野元揮、向井春香、佐藤大樹、韓薩日娜、 <u>高村明孝</u> 、三好 耕、 <u>片山泰一</u> . 神経系における Small Ubiquitin like Modifier 1(SUMO1)の働き, 第 42 回日本脳科学会, 宮崎, 2015 年 11 月 12 日～13 日, 口頭発表, 審査有 (謝辞で Fraser 氏を紹介しつつ発表)
◎ 142	※ <u>Matsuzaki S</u> , <u>Takamura H</u> , Miyoshi K, <u>Hashimoto H</u> , Raught B, Arancio O, <u>Katayama T</u> , Fraser P. Sumo1 overexpression affects synaptic function, spine density and memory. 45th Society for Neuroscience Annual meeting (Neuroscience2015), U.S.A., 2015/10/17-21. ポスター発表, 審査有
143	※Amano G, <u>Matsuzaki S</u> , Mukai H, Mori Y, <u>Takamura H</u> , Sato H, Han S, Miyoshi K, <u>Katayama T</u> . Effect of Arginine methylation via PRMT1 on organelle. 第 58 回日本神経化学会大会, 埼玉, 2015 年 9 月 11 日～13 日, ポスター発表, 審査有
144	※Yamada K, Takahashi T, Vasu M, Suzuki K, Iwata Y, Wakuda T, <u>Matsuzaki S</u> , <u>Katayama T</u> , Mori N. Microglial property changed in a maternal immune activation animal model with relevance to schizophrenia. 第 58 回日本神経化学会大会, 埼玉, 2015 年 9 月 11 日～13 日, ポスター発表, 審査有
145	※Sato H, <u>Matsuzaki S</u> , <u>Iwata K</u> , Miyoshi K, <u>Takamura H</u> , Amano G, Han S, <u>Matsuzaki H</u> , <u>Katayama T</u> . Analysis for Mechanism of Autism spectrum disorder via serotonin transporter dysfunction. 第 58 回日本神経化学会大会, 埼玉, 2015 年 9 月 11 日～13 日, ポスター発表, 審査有
◎ 146	※ <u>Takamura H</u> , Yamada K, <u>Matsuzaki S</u> , Hazrati Lili-N, <u>Katayama T</u> , Fraser P. SUMOylation affects Tau accumulation in neurodegenerative diseases. 第 38 回日本神経科学大会, 2015 年 7 月 28 日～31 日, 兵庫, ポスター発表, 審査有
◎ 147	※ <u>Matsuzaki S</u> , <u>Takamura H</u> , Miyoshi K, Raught B, Arancio O, Fraser P, <u>Katayama T</u> . SUMO1 Overexpression Affects Synaptic Function, Spine Density and Memory. 第 38 回日本神経科学大会, 2015 年 7 月 28 日～31 日, 兵庫, ポスター発表, 審査有
148	※三好 耕、笠原恭輔、宮崎育子、 <u>松崎伸介</u> 、佐藤朝子、笹岡俊邦、浅沼幹人、 <u>片山泰一</u> . 線条体ニューロンの 1 次繊毛はドパミン入力の欠乏により伸長する, 第 38 回日本神経科学大会, 2015 年 7 月 28 日～31 日, 兵庫, ポスター発表, 審査有
149	※雑賀史浩、木口倫一、 <u>松崎伸介</u> 、岸岡史郎, ドパミン D <sub>1</sub> 受容体を介した CC-ケモカイン発現増加はメタンフェタミン精神的依存形成に関与する, 第 127 回日本薬理学会近畿部会, 岐阜, 2015 年 6 月 25 日, 口頭発表, 審査無
150	※Kishioka S, Kobayashi Y, Kiguchi N, Saika F, <u>Matsuzaki S</u> . Matrix Metalloprotease 12: Novel Target for Neuropathic Pain. BIT's 6 <sup>th</sup> Annual World Congress of Neuro Talk-2015, Hangzhou, 中国, 2015/5/22-24. 口頭発表, 審査有
151	※糸川昌成. 設計図より大工の腕-遺伝子研究からみたリカバリー-. 第 11 回日本統合失調症学会, 25/3/2016. 口頭発表 (シンポジウム), 審査有
152	※糸川昌成. 当事者と家族の体験としての統合失調症. 第 11 回日本統合失調症学会, 26/3/2016. 口頭発表 (座長), 審査有



153	※宮下光弘, 渡邊琢夫, 堀内泰江, <u>鳥海和也</u> , 小堀晶子, 吉川武男, 鷲塚伸介, <u>糸川昌成</u> , 山本博, <u>新井誠</u> . 統合失調症におけるカルボニルストレス脆弱性と esRAGE. 第11回日本統合失調症学会, 26/3/2016. ポスター発表, 審査有
154	※小笠原裕樹, 鹿山将, 小池伸, 鈴木俊宏, <u>新井誠</u> , 堀内泰江, <u>糸川昌成</u> . 難治性統合失調症患者血漿中におけるカルボニル化タンパク質の解析. 第11回日本統合失調症学会, 26/3/2016. ポスター発表, 審査有
155	※ <u>Arai Makoto</u> , Horiuchi Y, Kobori A, Miyashita M, <u>Toriumi K</u> , <u>Hashimoto H</u> , <u>Itokawa S</u> . Pentosidine accumulation in the pathophysiology of Schizophrenia. 45th Society for Neuroscience Annual meeting (Neuroscience2015), U.S.A., 21/10/2015, ポスター発表, 審査有
156	※Kobori A, Hatakeyama S, Horiuchi Y, <u>Toriumi K</u> , Miyashita M, <u>Itokawa M</u> , Arai H, <u>Arai Makoto</u> . Study for the effect of carbonyl stress makers on cognitive impairment of schizophrenia. 45th Society for Neuroscience Annual meeting (Neuroscience2015), U.S.A., 19/10/2015, ポスター発表, 審査有
157	※ <u>Toriumi K</u> , Miyashita M, Ichikawa T, Nohara I, Kobori A, Obata N, Horiuchi Y, <u>Arai Makoto</u> , <u>Hashimoto H</u> , <u>Itokawa M</u> . Telomere shortening in the hippocampus is associated with negative symptom-like behavioral deficits in schizophrenia. 45th Society for Neuroscience Annual meeting (Neuroscience2015), U.S.A., 17/10/2015, ポスター発表, 審査有
158	※ <u>Toriumi K</u> , Miyashita M, Ichikawa T, Kobori A, <u>Arai Maokoto</u> , Horiuchi Y, Arai Mayumi, Nohara I, Obata N, <u>Itokawa M</u> . Telomere shortening in the hippocampus is associated with the negative symptoms of schizophrenia. 12th World Congress of Biological Psychiatry. Megaton Athens International Conference Centre. ギリシャ. 14-18/6/2015, ポスター発表, 審査有
159	※Kobori A, Hatakeyama S, <u>Arai Makoto</u> , Horiuchi Y, <u>Toriumi K</u> , Miyashita M, Arai H, <u>Itokawa M</u> . Effect of carbonyl stress on cognitive impairment in schizophrenia patients. 12th World Congress of Biological Psychiatry. Megaton Athens International Conference Centre. ギリシャ. 14-18/6/2015, ポスター発表, 審査有
160	※小堀晶子, 畠山幸子, 堀内泰江, <u>鳥海和也</u> , 宮下光弘, <u>糸川昌成</u> , 新井平伊, 新井誠. 統合失調症の認知機能障害に対するカルボニルストレスの影響. 第45回日本神経精神薬理学会・第37回日本生物学的精神医学会, 24-26/9/2015. ポスター発表, 審査有
161	※ <u>鳥海和也</u> , 宮下光弘, 市川智恵, 新井麻由美, 野原泉, 小堀晶子, 堀内泰江, <u>橋本均</u> , <u>糸川昌成</u> , <u>新井誠</u> . 海馬のテロメア短縮は統合失調症の陰性症状及び認知機能障害に関与する. 第45回日本神経精神薬理学会・第37回日本生物学的精神医学会, 24-26/9/2015. ポスター発表, 審査有
162	※久島周, アレクシッチブランコ, 椎野智子, 吉見陽, 大矢友子, 木村大樹, Chenyao Wang, 高崎悠登, 石塚佳奈子, 鈴木道雄, <u>糸川昌成</u> , 大森哲郎, 染矢俊幸, 吉川武男, Jingrui Xing, 武田雅俊, 橋本亮太, 岩田仲生, 池田匡志, 尾崎紀夫. 統合失調症の発症に強い影響を与える稀なゲノムコピー数異変 (CNV) の検討. 第45回日本神経精神薬理学会・第37回日本生物学的精神医学会, 24-26/9/2015. ポスター発表, 審査有
163	※ <u>新井誠</u> , 堀内泰江, 小堀晶子, <u>鳥海和也</u> , 畠山幸子, 宮下光弘, <u>糸川昌成</u> . 糖化・酸化ストレスと関連する統合失調症の病態研究. 第45回日本神経精神薬理学会・第37回日本生物学的精神医学会, 24/9/2015. ポスター発表, 審査有
164	※ <u>糸川昌成</u> . 統合失調症治療薬に関する医師主導治験. 第45回日本神経精神薬理学会・第37回日本生物学的精神医学会, 24/9/2015. 口頭発表 (シンポジウム), 審査有
165	※堀内泰江, 浄住佳美, 松林宏行, 西村誠一郎, 浦上研一, <u>新井誠</u> , 楠原正俊, 山口健. 臨床ゲノム研究における偶発的所見の結果開示, 遺伝カウンセリングの取り組みとその課題ー静岡県立静岡がんセンター・プロジェクト HOPE の例. 日本人類遺伝学会第60回大会, 東京, 16/10/2015/. 口頭発表, 審査有
166	※ <u>新井誠</u> . 統合失調症の新たな治療法を求めて-基礎研究と臨床研究のクロストーク. 第37回茨城医学会精神科分科会・第64回茨城精神医学集談会, 水戸, 3/11/2015 口頭発表 (招待講演), 審査有
167	※藤巻知央, 菊池亜弥, 蓮見真子, 竹腰進, 水谷隆太, 井野元智恵, 中村直哉, 坪井秋男, 大澤資樹, <u>新井誠</u> , 大島健一, <u>糸川昌成</u> , 上杉健太郎, 竹内晃久, 寺田靖子, 鈴木芳生, 雑賀里乃, 水谷隆太. ヒト大脳皮質の神経回路の三次元解析. 第38回日本分子生物学会年会・第88回日本生化学会大会合同大会, 神戸 1/12/2015 ポスター発表, 審査有

168	※堀内泰江, 島海和也, 糸川昌成, 岡野栄之, 新井誠. 統合失調症患者由来神経細胞-グリ ア間代謝的相互作用の解析. 第48回精神神経系薬物治療研究報告会, 豊中, 4/12/2015. ポ スター発表, 審査有
169	※井上智子, 内田美樹, 小堀晶子, 畠山幸子, 糸川昌成, 木村慧心, 堀内泰江, 宮下光弘, 新井誠. カルボニルストレスを含む代謝異常と統合失調症のヨーガ療法の探索的研究. 第19回日本精神保健・予防学会学術集会, 12/12/2015, ポスター発表, 審査有
170	※内田美樹, 井上智子, 新井誠, 小堀晶子, 畠山幸子, 木村慧心, 糸川昌成. カルボニルス トレス性統合失調症へのヨーガ療法効果〜パイロット研究からみた臨床介入研究の課題. 第19回日本統合医療学会, 山口, 12/12/2015, 口頭発表, 審査有
171	※糸川昌成. 脳と心 - 25年脳の部品を研究してみた -. 都立墨東病院神経科集談会. 墨東 病院, 東京 7/5/2015, 講演, 審査無
172	※糸川昌成. 脳と心 -25年脳の部品を研究してみた-. 北区ケアマネージャーの会. 19/5/2015. 講演, 審査無
173	※糸川昌成. 病院勤務医が研究に向かい合うということ-臨床家がなぜ研究をするのか-. 駒込病院・東京都医学総合研究所共催 第1回リサーチカンファ 駒込病院, 3/6/2015. 講 演, 審査無
174	※糸川昌成. 統合失調症 -医学研と松沢、脳と心-. 平成27年度レジデントクルズス 松 沢病院 会議室, 東京. 12/6/2015. 講演, 審査無
175	※糸川昌成. 都立神経病院と医学研の研究情報交換会. 妄想はどこから生まれるのか-精 神科領域で初めての医師主導治験は都立病院の1症例の発見から始まった-. 神経病院 4階会議室, 東京. 23/6/2015, 講演, 審査無
176	※糸川昌成. 脳と心 -科学者が考える回復の道のり-. 品川区精神障害者家族会講演 会, 品川区役所第3庁舎, 18/7/2015, 講演, 審査無
177	※糸川昌成. 脳と心 -25年脳の部品を研究してみた-. 第19回新都心メンタルネットワ ーク研究会 新宿ワシントンホテル, 東京, 31/7/2015, 講演, 審査無
178	※糸川昌成. 脳と心 -縄文人の遺伝子と倭人の魂-. 全国版子どもの集い・交流会, 日本 福祉大学東海キャンパス. 22/8/2015, 講演, 審査無
179	※糸川昌成. 「命はどこから来るのか -分子生物学が明かす心のゆくえ-」. ラ・ボア・ラ クテ2F「カペラ, 埼玉, 4/9/2015, 講演, 審査無
180	※糸川昌成. 命をもてなす -人が人を支えるためには-. 日本精神科看護協会千葉県支 部 千葉中央看護専門学校, 千葉, 12/9/2015, 講演, 審査無
181	※糸川昌成. 脳の病気、心の健康 -命と心はどこから来るのか-. 豊島区障害者団体連合 会創立30周年記念講演会 豊島区立勤労福祉会館, 東京, 14/9/2015, 講演, 審査無
182	※糸川昌成. 統合失調症治療の最前線ときょうだい支援. 第7回兄弟姉妹全国交流会. 戸 山サンライズ, 東京, 22/9/2015, 講演, 審査無
183	※糸川昌成. 統合失調症の解明に挑む-臨床家がなぜ研究をするのか-. 宮崎 DSA カンファ レンス 2015 HOTEL SKYTOWER, 宮崎, 1/10/2015, 講演, 審査無
184	※糸川昌成. 人はなぜ病をえるのか -命がともす魂の回復-. 世田谷家族会, 区立総合福 祉センター, 東京, 17/10/2015, 講演, 審査無
185	※糸川昌成. 脳と心 -統合失調症の解明を目指して脳の部品を25年研究してみたけれど -. 第102回 石川県神経科精神科医会, 金沢ニューグランドホテル, 石川, 15/10/2015, 講演, 審査無
186	※糸川昌成. 脳科学者から見た援助者のあり方ー脳と心と魂とー. 戴帽式記念講演, 東京 都立板橋看護専門学校, 東京, 30/10/2015, 講演, 審査無
187	※糸川昌成. 脳と心 -医師主導治験は成功したけれど-. 第32回こころと脳のセミナ ー, 九州大学病院, 福岡, 31/10/2015, 講演, 審査無
188	※糸川昌成. 脳と心 -脳の部品を25年研究して-. 国際医療福祉大学大学院公開講座, 国 際医療福祉大学青山キャンパス, 東京, 2/12/2015, 講演, 審査無

189	※糸川昌成. 統合失調症が秘密の扉をあけるまで -新しい治療法の発見は-臨床家の研究から生まれた-. 横浜市障害者家族連合会,横浜西口 SY ビル, 神奈川, 5/12/2015, 講演, 審査無
190	※糸川昌成. 脳科学から見た援助者のあり方 -脳と心と魂と-. 平成 27 年度岩手県看護連盟会員研修会. いわて県民情報交流センター, 岩手, 12/12/2015, 講演, 審査無
191	※糸川昌成. 脳と心-脳の部品を 25 年研究してみて-. Antipsychotics Bridge Conference 2016 ホテルグランヴィア大阪, 大阪, 5/2/2016, 講演, 審査無
192	※糸川昌成. 利他の心の環-縄文人の DNA と心-. こころの健康を考える区民会議「世田谷宣言」発表報告会, 世田谷区役所第三庁舎, 東京, 13/2/2016, 講演, 審査無
193	※糸川昌成. 脳と心-健やかな心と命のために-. 心の健康に関わる研修会. 千葉県山武健康福祉センター, 千葉, 17/2/2016, 講演, 審査無
194	※Arai Makoto. Personalized medicine: focusing on an importance to overcome the heterogeneity of schizophrenia by profiling of carbonyl stress biomarker. UT Southwestern Medical Center, U.S.A., 22/10/2015, 講演, 審査無
195	※新井誠. 東京都医学総合研究所における精神医学研究-基礎研究と臨床研究のクロストーク. 東京都立松沢病院, 東京, 18/7/2015, 講演, 審査無
196	※新井誠. 統合失調症の基礎と臨床研究のクロストークへの取り組み-統合失調症の原因究明と予防・治療法の開発- 東海大学, 10/7/2015, 講演, 審査無
197	※栃谷史郎, 松崎秀夫. マウス妊娠期腸内細菌叢の攪乱は仔の中枢神経系の発生発達に影響を与える. 第 19 回腸内細菌学会, 2015 年 06 月, 審査有
◎ 198	※Shintani N, Ikeda K, Higashi S, Inoue N, <u>Scorrano L</u> , <u>Soriano ME</u> , <u>Hashimoto H</u> . Protective role of p13, a protein stimulating mitochondrial fragmentation, in pancreatic $\beta$ -cells under type 2 diabetes. FASEB science research conference, U.S.A., 17-22/5/2015. ポスター発表, 審査有
199	※井上直紀, 新谷紀人, 笠井淳司, 小椋紗恵, 早田敦子, 中澤敬信, 橋本 均. In vitro パーキンソン病モデルにおけるミトコンドリア融合阻害因子 MiFI の機能解析. 日本薬学会第 137 年会, 2017 年 3 月 24-27 日, 仙台, ポスター発表, 審査有.
200	※丹生光咲, 笠井淳司, 勢力薫, 五十嵐久人, 山口瞬, 山中章弘, 中澤敬信, 橋本 均. 精神的ストレスにより活性化する神経核の情動行動における役割. 日本薬学会第 137 年会, 2017 年 3 月 24-27 日, 仙台, 口頭発表, 審査有.
201	※森川直祐, 立花雅史, 吾郷由希夫, 合田 寛, 櫻井文教, 水口裕之. 代謝型グルタミン酸受容体 2/3 アンタゴニストによる骨髄由来免疫抑制細胞の機能阻害を介したがん退縮効果. 日本薬学会第 137 年会, 仙台, 2017 年 3 月 24-27 日. ポスター発表, 審査有.
201	※尾中勇祐, 新谷紀人, 中澤敬信, 吾郷由希夫, 木野村元彦, 田邊 航, 荻田喜代一, 橋本均. 腫瘍の形成に伴って認められる高次脳機能障害は腫瘍切除後も持続する. 日本薬学会第 137 年会, 2017 年 3 月 24-27 日, 仙台, ポスター発表, 審査有.
202	※新谷紀人, 尾中勇祐, 木野村元彦, 中澤敬信, 橋本 均. がんサバイバーの持続的脳機能障害を反映する動物モデルの作製. 第 90 回日本薬理学会年会, 2017 年 3 月 15 日~2017 年 3 月 17 日, 長崎, 口頭発表, 審査有.
203	※神戸悠輝, Nguyen Thanh Trung, 中島 優, 栗原 崇, 新谷紀人, 橋本 均, 宮田篤郎. 摂食制御に対する PACAP の二面性. 第 90 回日本薬理学会年会, 2017 年 3 月 15 日~2017 年 3 月 17 日, 長崎, 口頭発表(シンポジウム), 審査有.
◎ 204	※吾郷由希夫, 早田敦子, 河内琢也, 山内良介, <u>Waschek James</u> , 橋本 均. VPAC2 受容体を介する大脳皮質神経発達異常と精神疾患との関連. 第 90 回日本薬理学会年会, 長崎, 2017 年 3 月 15-17 日. 口頭発表(シンポジウム), 審査有.
205	※梅原千晶, 吾郷由希夫, 田中辰典, 長谷部 茂, 橋本 均, 田熊一徹, 松田敏夫. メタンフェタミン退薬時の社会的刺激による多動反応と前頭前野セロトニン、ドパミン神経系の活性化. 第 90 回日本薬理学会年会, 長崎, 2017 年 3 月 15-17 日. ポスター発表, 審査有.

206	※勢力 薫, <u>笠井淳司</u> , 桑木崇宏, 丹生光咲, 中 雄一郎, 五十嵐久人, <u>中澤敬信</u> , 山口 瞬, <u>吾郷由希夫</u> , <u>橋本 均</u> . 全脳活動マッピングを用いた NMDA 受容体拮抗薬誘発行動異常に関わる脳部位の解析. 第90回日本薬理学会年会, 長崎, 2017年3月15-17日. 口頭発表(年会優秀発表賞受賞), 審査有.
207	※Nawa Y, Yonemaru Y, <u>Kasai A</u> , Smith NI, <u>Hashimoto H</u> , Kawata S, Fujita K. Improving resolution and SNR in saturated excitation microscopy by using signal subtraction. SPIE Photonics WEST 2017, 2017年1月28日~2月2日. San Francisco(USA), 審査有.
208	※ <u>Nakazawa T</u> , Matsumura K, Nagayasu K, <u>Kasai A</u> , <u>Hayata-Takano A</u> , <u>Shintani N</u> , <u>Takuma K</u> , Yamamori H, Yasuda Y, Hashimoto R, <u>Hashimoto H</u> . ASD-associated de novo mutations in POGZ impair the DNA-binding activity of POGZ. 55th Annual Meeting, ACNP, 2016年12月4日~8日, Hollywood (USA), 審査有.
◎ 209	※ <u>Shintani N</u> , Inoue N, Ikeda K, Higashi S, <u>Scorrano L</u> , <u>Kasai A</u> , <u>Hayata A</u> , Baba A, <u>Hashimoto H</u> . Functional analyses of mitochondrial fragmentation factor p13 in vitro. 第39回日本分子生物学会, 2016年11月30日~12月2日, 横浜, 審査有.
210	※神戸悠輝, 用皆正文, 中島 優, <u>新谷紀人</u> , <u>橋本 均</u> , 高崎一朗, 栗原 崇, 宮田篤郎. PACAP シグナリングによって駆動されるアストロサイト-ニューロン乳酸シャトルの中樞神経機能発現への関与. 第90回日本薬理学会年会, 長崎, 2017年3月15-17日. 口頭発表(シンポジウム), 審査有.
211	※ <u>Shintani N</u> . A drug discovery research from the viewpoint of novel factor for mitochondrial fusion inhibition, RCCMD Seminar: Forefront of Mitochondrial Research, 2016年11月22日, 福井, 口頭発表(招待講演), 審査無.
212	※尾中勇祐, <u>新谷紀人</u> , 中澤敬信, 吾郷由希夫, 木野村 元彦, 田邊 航, 荻田 喜代一, <u>橋本 均</u> . がん治療後に認められる高次脳機能障害におけるシクロオキシゲナーゼの関与. 第130回日本薬理学会近畿部会, 京都, 2016年11月19日. ポスター発表, 審査無.
213	※五十嵐 久人, <u>笠井淳司</u> , 勢力 薫, 丹生光咲, 中 雄一郎, 山浦港生, 山口 瞬, <u>中澤敬信</u> , <u>橋本 均</u> . 社会的敗北ストレスによる社会的忌避行動時の全脳神経活動マッピング. 第130回日本薬理学会近畿部会, 2016年11月19日, 京都, ポスター発表, 審査無.
214	※沼田周助, 菊地正隆, 中澤敬信, 橋本亮太. iPS細胞を用いたクロザピン反応性のメチル化解析. 第26回日本臨床精神神経薬理学会年会, 2016年11月17日~18日, 大分, 口頭発表, 審査有.
215	※Hasebe S, Hara Y, Higuchi M, <u>Ago Y</u> , <u>Nakazawa T</u> , <u>Hashimoto H</u> , Matsuda T, <u>Takuma K</u> . Continuous activation of dopaminergic system improves autism-related behavioral abnormalities in mice prenatally exposed to valproic acid. The 46th Annual Meeting of the Society for Neuroscience (Neuroscience 2016), San Diego(USA), November 12-16, 2016. ポスター発表, 審査有.
◎ 216	※ <u>Hashimoto H</u> , <u>Ago Y</u> , <u>Hayata-Takano A</u> , Kawanai T, Yamauchi R, <u>Waschek JA</u> . Activation of the VPAC2 receptor inhibits neurite outgrowth and branching of cortical neurons by a PKA-dependent mechanism. The 46th Annual Meeting of the Society for Neuroscience (Neuroscience 2016), San Diego(USA), November 12-16, 2016. ポスター発表, 審査有.
217	※名和靖矩, 米丸泰央, <u>笠井淳司</u> , スミス ニコラス, <u>橋本 均</u> , 河田 聡, 藤田克昌. 飽和励起顕微鏡における蛍光信号の差分計測を用いた SN 比の向上 Optics & Photonics Japan2016, 2016年10月30日~11月2日, 東京, 口頭発表, 審査有.
218	※名和靖矩, 米丸泰央, <u>笠井淳司</u> , スミス ニコラス, <u>橋本 均</u> , 河田 聡, 藤田 克昌. 蛍光の差分計測を用いた飽和励起顕微鏡. 電気学会バイオメディカル研究会, 2016年9月26日, 東京, 口頭発表, 審査有.
219	※Watanabe K, Palonpon AF, Smith NI, Chiu L, <u>Kasai A</u> , <u>Hashimoto H</u> , Kawata S, Fujita K. Structured line illumination microscopy for high-resolution Raman imaging. Optics & Photonics Japan2016, 2016年10月30日~11月2日, 東京, 口頭発表, 審査有.
220	※Nawa Y, Yonemaru Y, <u>Kasai A</u> , Smith NI, <u>Hashimoto H</u> , Kawata S, Fujita K. Saturated excitation microscopy with extracting nonlinear fluorescence signals by signal subtraction. 第77回応用物理学会秋季学術講演会, 2016年9月13日~16日, 新潟, 口頭発表, 審査有.

221	※長谷部 茂, 原 雄大, 樋口桃子, 吾郷由希夫, 中澤敬信, 橋本 均, 松田敏夫, 田熊一敏. ドパミン神経賦活薬の慢性投与は胎仔期バルプロ酸曝露マウスの自閉症様行動を改善する. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学会大会 合同年会, 福岡, 2016年9月8-10日. ポスター発表, 審査有.
222	※新谷紀人, 尾中勇佑, 木野村元彦, 中澤敬信, 橋本均. 実験動物を用いたガン病態下・治療後の脳機能障害の評価. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学会大会 合同年会, 2016年9月8日~10日, 福岡, ポスター発表, 審査有.
◎ 223	※新谷紀人, 井上直紀, 池田和哉, 東信太朗, <u>Luca Scorrano</u> , 笠井淳司, 早田敦子, 馬場明道, 橋本均. ドパミン神経細胞死におけるミトコンドリア融合阻害因子 p13 の役割. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学会大会 合同年会, 2016年9月8日~10日, 福岡, ポスター発表, 審査有.
224	※田熊一敏, 長谷部 茂, 原 雄大, 中澤敬信, 橋本 均, 松田敏夫, 吾郷由希夫. 発育期環境要因による神経精神疾患の発症制御. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学会大会 合同年会, 福岡, 2016年9月8-10日. 口頭発表(シンポジウム), 審査有.
225	※早田敦子, 加茂俊彦, 勢力 薫, 尾形勝弥, 中澤敬信, 吾郷由希夫, 永安一樹, 笠井淳司, 新谷紀人, 橋本 均. 神経細胞の成熟における PACAP と BDNF の役割. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学会大会 合同年会, 福岡, 2016年9月8-10日. 口頭発表, 審査有.
226	※橋本 均, 勢力 薫, 丹生 光咲, 中 雄一郎, 笠井 淳司. 全脳イメージングによる脳機能・疾患機序の解析. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学会大会 合同年会, 2016年9月8日~10日, 福岡, 口頭発表, 審査有.
227	※ <u>Hashimoto H.</u> Whole Brain Imaging to Investigate Physiology and Pathophysiology of Brain Disorders. 2016年8月30日, Padua (Italy), 口頭発表(招待講演, 日伊国交150周年事業), 審査無.
228	※ <u>Shintani N.</u> , <u>Iwata K.</u> SHIRPA: a comprehensive mouse phenotyping protocol to unveil novel gene functions in vivo (available in Padova!), 2016年8月30日, Padua (Italy), 口頭発表(招待講演, 日伊国交150周年事業), 審査無.
229	※松村憲佑, 中澤敬信, 永安一樹, 三浦大樹, 笠井淳司, 田熊一敏, 山森英長, 安田由華, 橋本亮太, 橋本 均. 自閉スペクトラム症関連遺伝子 <i>POGZ</i> の患者特異的 <i>de novo</i> 変異の表現型解析. 次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2016, 2016年, 8月24日, 仙台, 口頭発表, 審査無.
230	※田熊一敏, 長谷部 茂, 中澤敬信, 橋本 均, 松田敏夫, 吾郷由希夫. ムスカリン性アセチルコリン受容体の神経精神薬理学. 第58回歯科基礎医学会学術大会, 札幌, 2016年8月24-26日. 口頭発表(シンポジウム), 審査有.
231	※橋本 均. 精神疾患の分子機構の解析と創薬に向けた疾患モデル研究. 第61回脳の医学・生物学研究会, 2016年8月20日, 名古屋, 口頭発表, 審査無.
◎ 232	※ <u>Ago Y.</u> , <u>Hayata A.</u> , Kawanai T, Yamauchi R, <u>Waschek JA.</u> , <u>Hashimoto H.</u> Overactivation of the VPAC2 receptor during the early postnatal period causes prefrontal synaptic abnormalities and cognitive dysfunction in mice. 30 <sup>th</sup> CINP World Congress of Neuropsychopharmacology, 2016年7月3日~5日, Seoul (Korea), ポスター発表, 審査有.
233	※新谷紀人, 尾中勇祐, 叶拓也, 中澤敬信, 吾郷由希夫, 松田敏夫, 橋本亮太, 大井一高, 平井博之, 永田欽也, 中村正孝, 笠井淳司, 早田-高野敦子, 永安一樹, 馬場明道, 橋本均. 認知機能制御におけるプロスタグランジン DP2 受容体の役割. 第46回日本神経精神薬理学会年会, 2016年7月2日~3日, ソウル(韓国), ポスター発表, 審査有.
◎ 234	※新谷紀人, 井上直紀, 池田和哉, 東信太朗, <u>Luca Scorrano</u> , 笠井淳司, 早田-高野敦子, 中澤敬信, 永安一樹, 馬場明道, 橋本 均. ミトコンドリアの断片化促進因子 p13 による神経機能制御. 第46回日本神経精神薬理学会年会, 2016年7月2日~3日, ソウル(韓国), ポスター発表, 審査有.
◎ 235	※吾郷由希夫, 早田敦子, 河内琢也, 山内良介, <u>Waschek James.</u> , 橋本 均. マウス新生仔期の VPAC2 受容体過剰活性化は感覚情報処理機能障害と認知機能障害を引き起こす. 第46回日本神経精神薬理学会年会, 2016年7月2-3日, ソウル(韓国), ポスター発表, 審査有.

236	※ <u>吾郷由希夫</u> , 原 雄大, 前田優子, 長谷部 茂, <u>橋本 均</u> , 松田敏夫, <u>田熊一徹</u> . 自閉症モデルマウスにおける前頭前皮質ドーパミン神経系の異常～ADHD 治療薬による行動異常の改善. 第46回日本神経精神薬理学会年会, 2016年7月2-3日, ソウル (韓国), 口頭発表(シンポジウム), 審査有.
237	※ <u>中澤敬信</u> , <u>橋本亮太</u> , <u>橋本 均</u> . iPS細胞技術を用いた統合失調症患者のクロザピン応答性の個人間の相違の分子機構解析. 第46回日本神経精神薬理学会年会, 2016年7月2日～3日, ソウル (韓国), 口頭発表, 審査有.
238	※ <u>川瀬啓生</u> , <u>吾郷由希夫</u> , 長谷部 茂, 岡 智史, <u>田熊一徹</u> , 松田敏夫, <u>橋本 均</u> . 雌性マウスを用いた意欲・報酬探索行動評価試験. 第129回日本薬理学会近畿部会, 広島, 2016年6月24日, 口頭発表, 審査無.
239	※Watanabe K, Palonpon AF, Smith NI, Chiu L, <u>Kasai A</u> , <u>Hashimoto H</u> , Kawata S, Fujita K. High resolution Raman imaging by structured line illumination microscopy. Biomedical Imaging and Sensing Conference 2016 (BISC'16), 2016年5月18日～20日, 横浜, 口頭発表, 審査有.
240	※ <u>田中辰典</u> , <u>吾郷由希夫</u> , 梅原千晶, 長谷部 茂, <u>橋本 均</u> , <u>田熊一徹</u> , 松田敏夫. 精神的ストレスによる覚せい剤精神病の再燃現象におけるセロトニン受容体の関与. 第13回GPCR研究会, 東京, 2016年5月13-14日. 口頭発表, 審査無.
◎ 241	※ <u>吾郷由希夫</u> , 河内琢也, 山内良介, <u>早田敦子</u> , <u>James Waschek</u> , <u>橋本 均</u> . 統合失調症におけるVIP/PACAP受容体VPAC2活性化の病態的意義. 第13回GPCR研究会, 東京, 2016年5月13-14日. ポスター発表, 審査無.
242	※ <u>天野元揮</u> , <u>松崎伸介</u> , <u>森泰丈</u> , <u>高村明孝</u> , <u>韓薩日娜</u> , <u>鹿田星</u> , <u>佐藤大樹</u> , <u>伊藤麻衣</u> , <u>三好耕</u> , <u>片山泰一</u> . Effect on the COPI vesicle trafficking by methylation of SCYL1 via PRMT1. 第90回日本薬理学会年会. 2017年3月15-17日, 長崎, 口頭発表, 審査有.
243	※ <u>松崎伸介</u> , <u>佐藤大樹</u> , <u>向井春香</u> , <u>岩田圭子</u> , <u>天野元揮</u> , <u>高村明孝</u> , <u>三好耕</u> , <u>木口倫一</u> , <u>雑賀史浩</u> , <u>松崎秀夫</u> , <u>片山泰一</u> , <u>岸岡史郎</u> . Analysis for Mechanism of Autism spectrum disorder via serotonin transporter dysfunction. 第90回日本薬理学会年会. 2017年3月15-17日, 長崎, 口頭発表, 審査有.
244	※Han S, Miyoshi K, Shikada S, Amano G, Matsuzaki S, <u>Takamura H</u> , <u>Katayama T</u> . The Implications of the Tubby Family Proteins in the Localization of G Protein-Coupled Receptors to Primary Cilia. 第43回日本脳科学学会大会. 2016年11月11日～12日, 中国・西安市, 口頭発表, 審査有.
245	※ <u>天野元揮</u> , <u>松崎伸介</u> , <u>森泰丈</u> , <u>高村明孝</u> , <u>韓薩日娜</u> , <u>鹿田星</u> , <u>佐藤大樹</u> , <u>伊藤麻衣</u> , <u>三好耕</u> , <u>片山泰一</u> . PRMT1を介したSCYL1メチル化によるCOPI小胞輸送への影響. Effect on the COPI vesicle trafficking by methylation of SCYL1 via PRMT1. 第89回日本生化学会大会. 2016年9月25日～27日, 仙台, ポスター発表, 審査有.
246	※ <u>韓薩日娜</u> , <u>三好 耕</u> , <u>鹿田星</u> , <u>天野元揮</u> , <u>佐藤大樹</u> , <u>高村明孝</u> , <u>松崎伸介</u> , <u>片山泰一</u> . Tubbyファミリー遺伝子がGタンパク共役型受容体の一次繊毛局在に寄与する様式の解析. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学学会大会合同年会. 2016年9月8日～10日, 福岡, ポスター発表, 審査有.
247	※ <u>三好耕</u> , <u>韓薩日娜</u> , <u>鹿田星</u> , <u>天野元揮</u> , <u>佐藤大樹</u> , <u>高村明孝</u> , <u>松崎伸介</u> , <u>片山泰一</u> . 繊毛疾患原因遺伝子の変異がGタンパク共役型受容体の繊毛局在に及ぼす影響. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学学会大会合同年会. 2016年9月8日～10日, 福岡, ポスター発表, 審査有.
248	※ <u>鹿田星</u> , <u>韓薩日娜</u> , <u>天野元揮</u> , <u>佐藤大樹</u> , <u>高村明孝</u> , <u>松崎伸介</u> , <u>三好耕</u> , <u>片山泰一</u> . 1次繊毛におけるGタンパク質共役型受容体との相互作用因子の探索. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学学会大会合同年会. 2016年9月8日～10日, 福岡, ポスター発表, 審査有.
249	※ <u>松崎伸介</u> , <u>丸谷典子</u> , <u>渡部音哉</u> , <u>岡村麻美</u> , <u>明石海音</u> , <u>天野元揮</u> , <u>高村明孝</u> , <u>三好耕</u> , <u>雑賀史浩</u> , <u>木口倫一</u> , <u>片山泰一</u> , <u>工藤喬</u> , <u>岸岡史郎</u> . 小胞体ストレス性細胞死におけるSigma-1受容体発現とタンパク質SUMO化. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学学会大会合同年会. 2016年9月8日～10日, 福岡, ポスター発表, 審査有.

250	※天野元揮、松崎伸介、森泰丈、 <u>高村明孝</u> 、韓薩日娜、鹿田星、佐藤大樹、伊藤麻衣、三好耕、 <u>片山泰一</u> 。Effect on the COPI vesicle trafficking by arginine methylation of Scyl1. 第38回日本生物学的精神医学会・第59回日本神経化学会大会合同年会。2016年9月8日～10日、福岡、ポスター発表、審査有。
251	※三好耕、韓薩日娜、天野元揮、佐藤大樹、 <u>高村明孝</u> 、松崎伸介、 <u>片山泰一</u> 。hTERT-RPE1細胞におけるGタンパク共役型受容体の絨毛局在。第39回日本神経科学大会。2016年7月20日～22日、横浜、ポスター発表、審査有。
252	※松崎伸介、丸谷典子、渡部音哉、岡村麻美、明石海音、天野元揮、 <u>高村明孝</u> 、三好耕、雑賀史浩、木口倫一、 <u>片山泰一</u> 、工藤喬、岸岡史郎。小胞体ストレス細胞死機構におけるタンパク質SUMO化の役割。第129回日本薬理学会近畿部会。2016年6月24日、広島、口頭発表、審査無。
253	※ <u>糸川昌成</u> 。心はどこへつながるのか -分子生物学からポリネシアまで-。第12回日本統合失調症学会、2017年3月24日～25日、米子、口頭発表、審査有。
254	※内田美樹、井上智子、小堀晶子、畠山幸子、木村慧心、 <u>糸川昌成</u> 、 <u>新井誠</u> 。カルボニルストレス性統合失調症へのヨーガ効果、臨床像と実習反応から見る適応についての考察。第12回日本統合失調症学会、2017年3月24日～25日、米子、ポスター発表、審査有。
256	※井上智子、内田美樹、小堀晶子、畠山幸子、堀内泰江、宮下光弘、棒葉俊一、 <u>新井誠</u> 。カルボニルストレス性統合失調症へのヨーガ療法でみられた分子・生理学的変化の症例検討。第12回日本統合失調症学会、2017年3月24日～25日、米子、ポスター発表、審査有。
257	◎ ※ <u>Usui N</u> , Araujo D, Co M, <u>Berto S</u> , Harper M, <u>Toriumi K</u> , Tucker HO, <u>Konopka G</u> . Post-translational modification of FOXP1 in the developing brain. 第39回日本分子生物学会年会、2016年11月30日～12月2日、横浜、ポスター発表、審査有。
258	◎ ※Miyashita M, <u>Arai M</u> , <u>Toriumi K</u> , Ichikawa T, Horiuchi Y, Kobori A, Takahashi K, Tokunaga T, Ishimoto K, Yuzawa H, Usami S, Yoshikawa T, Okazaki Y, Washizuka S, Amano N, Takizawa S, Miyata T, <u>Itokawa M</u> . High-dose pyridoxamine add-on treatment for schizophrenia. Neuroscience 2016, 2016年11月12日～16日, San Diego(USA), ポスター発表、審査有。
259	◎ ※ <u>Toriumi K</u> , Miyashita M, Kobori A, Horiuchi Y, Nohara I, Obata N, <u>Itokawa M</u> , <u>Konopka G</u> , <u>Arai M</u> . Effect of deficiency of vitamin B6 on mouse behavior and monoaminergic system. Neuroscience 2016, 2016年11月12日～16日, San Diego(USA), ポスター発表、審査有。
260	◎ ※Araujo DJ, <u>Toriumi K</u> , Escamilla CO, Harper M, Anderson AG, <u>Berto S</u> , Tucker HO, Powell C, <u>Konopka G</u> . Brain region-specific contributions of Foxp1 to autism-related phenotypes. Neuroscience 2016, 2016年11月12日～16日, San Diego(USA), ポスター発表、審査有。
261	◎ ※ <u>Usui N</u> , Araujo D, Co M, <u>Berto S</u> , Harper M, <u>Toriumi K</u> , Tucker HO, <u>Konopka G</u> . Post-translational modification of FOXP1 in the developing brain. Neuroscience 2016, 2016年11月12日～16日, San Diego (USA), ポスター発表、審査有。
262	◎ ※Horiuchi Y, Kiyozumi Y, Matsubayashi H, Nishimura S, Urakami K, Oonami S, <u>Arai M</u> , Kusuhara M, Yamaguchi K. Systematic assessment and reporting of secondary findings in whole exome sequencing: the project of HOPE. The American Society of Human Genetics (ASHG) 2016 Annual meeting, 2016年10月19日～22日, Vancouver (Canada), 口頭発表、審査有。
263	◎ ※堀内泰江、浄住佳美、松林宏行、西村誠一郎、浦上研一、 <u>新井誠</u> 、楠原正俊、山口健。臨床ゲノム研究における二次的所見の結果開示の取り組みとその課題。第23回日本遺伝子診療学会大会、2016年10月7日、東京、口頭発表、審査有。
264	◎ ※ <u>鳥海和也</u> 、宮下光弘、小堀晶子、堀内泰江、野原泉、小幡菜々子、 <u>糸川昌成</u> 、 <u>Genevieve Konopka</u> 、 <u>新井誠</u> 。ビタミンB6欠乏がマウスの行動及びモノアミン神経系に与える影響について。第59回日本神経化学会大会・第38回日本生物学的精神医学会合同年会、2016年9月8-10日、福岡、ポスター発表、審査有。
265	◎ ※ <u>Usui N</u> , Araujo D, Co M, Harper M, <u>Toriumi K</u> , Tucker HO, <u>Konopka G</u> . Post-translational modification of FOXP1 in the brain development and ASD. 第59回日本神経化学会大会・第38回日本生物学的精神医学会合同年会、2016年9月8-10日、福岡、口頭発表、審査有。

266	※宮下光弘, 新井誠, 鳥海和也, 堀内泰江, 市川智恵, 小堀晶子, 高橋克昌, 徳永太郎, 石本佳代, 湯澤公子, 宇佐美慧, 吉川武男, 岡崎祐士, 鷺塚伸介, 天野直二, 滝澤俊也, 宮田敏男, 糸川昌成. カルボニルストレスが亢進する統合失調症 に対するピリドキサミン大量療法の効果の検証. 第 38 回日本生物学的精神医学会合同年会, 2016 年 9 月 8-10 日, 福岡, ポスター発表, 審査有.
267	※糸川昌成. 精神症状はどこから生まれるのか - 精神疾患の治療薬開発が難航する理由 -. 第 46 回日本神経精神薬理学会. 2016 年 7 月 2-3 日, 韓国, 口頭発表, 審査有.
268	※内田美樹, 井上智子, 小堀晶子, 畠山幸子, 木村慧心, 糸川昌成, 新井誠. カルボニルストレス性統合失調症へのヨーガ療法介入研究から見えた臨床応用の可能性. 第 57 回日本心身医学会総会. 2016 年 6 月 4-5 日, 仙台, ポスター発表, 審査有.
269	※井上智子, 内田美樹, 小堀晶子, 畠山幸子, 糸川昌成, 榛葉俊一, 木村慧心, 堀内泰江, 宮下光弘, 新井誠. ヨーガ療法を介入したカルボニルストレス性統合失調症の 1 症例. 第 57 回日本心身医学会総会. 2016 年 6 月 4-5 日, 仙台, ポスター発表, 審査有.
270	※宮下光弘, 渡邊琢夫, 堀内泰恵, 鳥海和也, 小堀晶子, 吉川武男, 鷺塚伸介, 山本博, 糸川昌成, 山本靖彦, 新井誠. 統合失調症における新たなカルボニルストレス脆弱性. 第 112 回日本精神神経学会, 2016 年 6 月 2-4 日, 千葉, ポスター発表, 審査有.
271	※Arai M. Carbonyls stress and Schizophrenia. 14th IGAKUKEN International Symposium, 2016 年 6 月 1 日, 東京, 口頭発表, 審査有.
272	※Kobori A, Hatakeyama S, Horiuchi Y, Toriumi K, Miyashita M, Itokawa M, Arai H, Arai M. Investigating the association of plasma pentosidine/serum pyridoxal and cognitive impairment of schizophrenia. 14th IGAKUKEN International Symposium, 2016 年 6 月 1 日, 東京, ポスター発表, 審査有.
273	※新井誠. 医学・薬学系シンポジウム: 海外留学のすすめとキャリアパス: 私にとっての統合失調症研究を通じて～過去・現在・未来～. 第 26 回日本メイラード学会, 2016 年 6 月 1 日, つくば, 口頭発表, 審査有.
274	※糸川昌成. 脳とこころ. 第 14 回ヨーガ療法学会研究総会. 2016 年 4 月 22 日～24 日, 口頭発表, 審査有.
275	※井上智子, 内田美樹, 小堀晶子, 畠山幸子, 糸川昌成, 木村慧心, 堀内泰江, 宮下光弘, 新井誠. ヨーガ療法を介入したカルボニルストレス性統合失調症の 1 症例. 第 14 回ヨーガ療法学会研究総会. 2016 年 4 月 22 日～24 日, ポスター発表, 審査有.
276	※糸川昌成. 脳のふしぎーその働きと成長 -. 都立松沢病院退院準備講座市民精神保健福祉フォーラム, 2017 年 2 月 25 日, 横浜, 口頭発表, 審査無.
277	※糸川昌成. 脳と心ー入院には視床を休めるいみがある -. 都立松沢病院退院準備講座, 2017 年 2 月 15 日, 東京, 口頭発表, 審査無.
278	※糸川昌成. 松沢病院で発見された治療薬～精神科医で初めて: 医師主導治験の裏話～. 都立松沢病院薬剤部研修講義, 2017 年 1 月 30 日, 東京, 口頭発表, 審査無.
279	※糸川昌成. 心はどこまで脳なのか～物語を生きる回復のしくみ～. 28 年度ダイケア・病院家族会「輪の会」合同研修会. 2016 年 12 月 21 日, 蕪崎, 口頭発表, 審査無.
280	※糸川昌成. 松沢病院で発見された治療薬～精神科で初めて: 医師主導治験の裏話～. 松沢病院精神科医局集談会. 2016 年 12 月 20 日, 東京, 口頭発表, 審査無.
281	※糸川昌成. 人はなぜ病を得るのか～蛋白質の科学者が考える命の意味～. 第 14 回精神保健福祉講演会, 2016 年 12 月 17 日, 東京, 口頭発表, 審査無.
282	※新井誠. 思春期の脳と身体の健康を支えるもの: 統合失調症の新たな病態仮説から. 平成 28 年度第 6 回東京都民講座, 2016 年 12 月 9 日, 東京, 口頭発表, 審査無.
283	※糸川昌成. 人はなぜ病を得るのか～神話が明かす DNA のこころ～. NPO 法人じんかれん 50 周年記念大会・第 43 回精神保健福祉「県民の集い」. 2016 年 11 月 29 日, 横浜, 口頭発表, 審査無.
284	※糸川昌成. 心はどれくらい脳なのか～病を得る意味と回復のしくみ～. 八戸精神科医会. 2016 年 11 月 16 日, 八戸, 口頭発表, 審査無.



285	※糸川昌成. 健康とストレス-心はどこまで脳なのか-. 第20回健康こうほく21活動発表会「ふれあいの会」, 2016年10月28日, 東京, 口頭発表, 審査無.
286	※糸川昌成. 心はどれくらい脳なのか～病の意味と回復のしくみ～. 第36回コンボ亭月例会 in 大阪. 2016年10月15日, 大阪, 口頭発表, 審査無.
287	※糸川昌成. 医学をきわめる-からだと心の科学-. 戸山高校・チームメディカルミーティング. 2016年10月8日, 東京, 口頭発表, 審査無.
288	※糸川昌成. 「心はどれくらい脳なのか」～統合失調症の分子生物学から見えてきたもの～. 第2回さいたま東部地区勉強会. 2016年9月16日, 埼玉, 口頭発表, 審査無.
289	※糸川昌成. 臨床家がなぜ研究をするのか? 精神科医が研究の足跡をふりかえると. 東海PPSTセミナー, 2016年9月1日, 名古屋, 口頭発表, 審査無.
290	※糸川昌成. リハビリをさまたげない薬とのつきあい方. 地域精神保健福祉機構リハビリ全国フォーラム2016. 2016年8月27日, 東京, 口頭発表, 審査無.
291	※糸川昌成. ハイブリッドが育む科学の力. 第30回先端技術大賞授賞式. 2016年7月28日, 東京, 口頭発表, 審査無.
292	※糸川昌成. 東京都医学研における精神医学研究. 松沢臨床精神医学サマーセミナー2016, 2016年7月23日, 東京, 口頭発表, 審査無.
293	※糸川昌成. 「心はどこまで脳なのか」統合失調症治療の最新の知見. 都立病院関連施設薬剤師会平成28年度第1回学術講演会, 2016年7月21日, 東京, 口頭発表, 審査無.
294	※糸川昌成. 心の病は誰でもかかる!～治る? 最新の精神医療について. 都民精神保健啓発講演会(東京つくし会), 2016年6月23日, 東京, 口頭発表, 審査無.
295	※糸川昌成. 心はどれくらい脳なのか 回復を支援する～病気からの快復・魂の回復. ACTネットワーク中四国ブロック研修 in 岡山, 2016年6月11日, 岡山, 口頭発表, 審査無.
296	※糸川昌成. 精神科的治療と内科的治療-脳がなぜ他の臓器と違うのか-. 松沢病院レジデントクルズ. 2016年5月30日, 岡山, 口頭発表, 審査無.
297	※新井誠. 過去・現在・未来: 基礎研究と臨床研究の橋渡し. 都立松沢病院精神科・医局セミナー, 2016年5月26日, 東京, 口頭発表, 審査無.
298	※糸川昌成. 心の科学-脳がなぜ心を生むのだろう-. 都医学研オープンラボ, 2016年5月15日, 東京, 口頭発表, 審査無.
299	※糸川昌成. 心はどれくらい脳なのか. 東京都立墨東病院神経科講演会. 2016年5月12日, 東京, 口頭発表, 審査無.
300	※糸川昌成. 心はどれくらい脳なのか. 精神医学の科学哲学セミナー. 2016年5月11日, 東京, 口頭発表, 審査無.
301	※糸川昌成. 心はどれくらい脳なのか. 埼玉医科大学神経科学セミナー, 2016年5月9日, 埼玉, 口頭発表, 審査無.
302	※糸川昌成. 脳とこころ-脳の部品を25年研究してみても- 第9回南信州溪流フォーラム2016年4月23日, 長野, 口頭発表, 審査無.
303	※糸川昌成. 人はなぜ心を病むのだろう-分子からみた脳と命-. 大分大学医学部特別講演, 2016年4月21日, 大分, 口頭発表, 審査無.
304	※Matsuzaki H. Clinical Research for Child Mental Development in Japan. 2016年8月30日, Padua (Italy), 口頭発表(招待講演, 日伊国交150周年事業), 審査無.
◎ 305	※Iwata K, Scorrano L. Exploring the role of mitochondrial dynamics in developmental and psychiatric disorders. 15th VIMM Annual Retreat, Padova (Italy), 2017年2月17-18日, ポスター発表, 審査無.
306	※Iwata K, Nakabayashi K, Hata K, Nakamura K, Shintani N, Matsuzaki H, Mori N. Genome-wide DNA methylation profiles in postmortem brains from subjects with autism. Society for neuroscience 2016, 2016年11月16-19日, San Diego (USA), ポスター発表, 審査有.

307	※Hirayama A, <u>Matsuzaki H</u> . Measurement of Multiple Radical Scavenging Activity as a diagnostic method for autism spectrum disorder in children. The Society for Redox Biology and Medicine's 23rd Annual Meeting, 2016年11月16-19日, San Francisco (USA), ポスター発表, 審査有.
308	※ <u>Matsuzaki H</u> , <u>Iwata K</u> , Nakamura K, Tsujii M, Mori N. Specific Hypolipidemia caused by VLDL degradation in Children with ASD. The Society for Neuroscience 46th annual meeting (Neuroscience 2016), 2016年11月12-16日, San Diego (USA), ポスター発表, 審査有.
309	※原田陽子、渡邊賢、 <u>松崎秀夫</u> :自閉症者血清中の糖脂質: MALDI-TOF-MSによる網羅的糖鎖分析. 第38回日本生物学的生物精神医学会・第59回日本神経化学会合同年会, 2016年9月8-10日, 福岡, 口頭発表, 審査有.
310	※ <u>松崎秀夫</u> , <u>岩田圭子</u> , 中林一彦, 中村和彦, 秦健一郎, 森則夫. 自閉症死後脳縫線核メチル化状態の網羅的解析. 第38回日本生物学的生物精神医学会・第59回日本神経化学会合同年会, 2016年9月8-10日, 福岡, 口頭発表, 審査有.
311	※ <u>柄谷史郎</u> 、 <u>松崎秀夫</u> . Perturbing Maternal Gut Microbiota during Pregnancy leads to changes in the Behavior of Offspring. International Session (P-6), 第5回日本DOHaD研究会年会, 2016年7月24日, 東京, 口頭発表, 審査無.
312	※ <u>松崎秀夫</u> . NSF interacts with SERT and modulates its trafficking: implications for pathophysiology in autism. International Session(P-5), 第5回日本DOHaD研究会年会, 2016年7月24日, 東京, 口頭発表, 審査無.
◎ 313	※ <u>Shintani N</u> , Ikeda K, Inoue N, <u>Scorrano L</u> , <u>Soriano ME</u> , <u>Hashimoto H</u> . p13, a protein associated with pancreatic islet hyperplasia, controls mitochondrial integrity. EBEC2016 (The 19th European Bioenergetics Conference), 2016年7月2日～7日, Riva del Garda (Italy), ポスター発表, 審査有.
314	※ <u>新谷 紀人</u> , ※ <u>岡本 浩二</u> . ミトコンドリアの障害・品質管理研究の最前線. 日本薬学会第135年会, 27/3/2015. 口頭発表(オーガナイザー), 兵庫, 審査有
315	※ <u>新谷 紀人</u> , ※ <u>松崎 伸介</u> . 神経変性疾患創薬に向けた新たな細胞内分子反応の理解. 第89回日本薬理学会年会, 10/3/2016. 口頭発表(オーガナイザー), 神奈川, 審査有
316	※ <u>岡本 浩二</u> , ※ <u>新谷 紀人</u> . 多才なミトコンドリアを支える分子基盤. 第39回日本分子生物学会年会, 30/11/2016. 口頭発表(オーガナイザー), 神奈川, 審査有
◎ 317	※ <u>Hashimoto H</u> , ※ <u>Waschek JA</u> . PACAP and inflammatory signals in the brain: Depression to neurodegenerative disease. 12 <sup>th</sup> international symposium on VIP/PACAP and related peptides, 21-26/9/2015. 口頭発表(オーガナイザー), トルコ, 審査有
◎ 318	※ <u>Waschek JA</u> , <u>Ago Y</u> . Explaining the genetic linkages of VPAC2 and PAC1 to mental health disorders through animal. 12 <sup>th</sup> international symposium on VIP/PACAP and related peptides, 21-26/9/2015. 口頭発表(オーガナイザー), トルコ, 審査有
319	※ <u>吾郷 由希夫</u> , ※ <u>神戸 悠輝</u> . PACAPシグナル研究の新潮流～中枢・末梢組織での新しい生理・病態的意義～. 第90回日本薬理学会年会, 16/3/2017. 口頭発表(オーガナイザー), 長崎, 審査有